社会人が送る、
二度目の学生生活
TrymenT
脚色 えある
原作 TrymenT
Ⅵ
TrymenT

TrymenT

今を変えたいと願うあなたへ

YoU KnowS ThE DeaR KnowS

VI

TrymenT CharacteR RolL

登場人物名簿

夏杞文実（なつき ふみ）

河居織鶴（かわい おりつる）

星乃あやめ（ほしの あやめ）

喜羽正明（きば まさあき）

君島翔（きみしま かける）

TrymenT CharacteR RolL

影山（かげやま）星一（せいいち）

八馬（はちま）奏（かなで）

東雲（しののめ）すずね

六車（むぐるま）虎次郎（こじろう）

山崎（やまざき）颯太（そうた）

天草（あまくさ）月乃（つきの）

TrymenT CharacteR RolL

たかぬま　な　み　え
高沼奈美恵

しのみや　きょう
四宮　匡

にった　つかさ
新田　司

ほしの　いさお
星乃勲雄

さとう　りひと
佐藤理人

ほしの　ともみ
星乃朋美

TrymenT CharacteR RolL

大舘流花（おおたて　るか）

箒木日向子（ははきぎ　ひなこ）

五十嵐啓介（いがらし　けいすけ）

ミリャ

狩野冬馬（こうの　とうま）

海蔵もも（かいぞう）

TrymenT CharacteR RolL

アイ

中村夏奈（なかむら かな）

伊砂 真（いすか まこと）

トト

三国義貴（みくに よしたか）

ユウ

TrymenT CharacteR RolL

ななせ　わたる
七瀬　弥

ふたかみ　きょうこ
二上響子

こばやし
小林

さいとう　ひさ
斎藤　久

RaisoN D'etrE

——夜闇に大きな満月が浮かぶ。
うっすらとした月明りが、廃墟の一室を照らす。
部屋を訪ねてきた人物をアイが振り返る。
「こんばんは。どうしたの、こんな夜遅くに」
入り口に立つ人物は、寂しげな微笑みを浮かべる。
「ああ……うん、ごめんね」
司が顔を伏せる。
アイが心配そうに司を覗き込む。
「司、どうかしたの？」
司が顔を上げる。
「え、いや……」
言葉を切った司が顔をあげて目を丸くする。
「司？」
アイが首をかしげる。
「……えっと？」
不思議そうな表情のアイを見つめて、司が苦笑いを浮かべる。

「まぁ、いっか。ここにくれば、君に会えると思って」
「……………」
アイは黙ったまま、司を見つめる。
「よかった、やっぱり君なんだね」
司が微笑む。
「こんばんは、アルファ」
対面するアイが、ポカンと口を開ける。
「……アルファ？　……」
アイが首をかしげて司を見つめる。
「ん……。ああ、ごめん」
司が首をてのひらでさすりながら、居心地の悪そうな微笑みを浮かべる。
「つい、クセで」
しばらくアイから目を逸らし、またアイを見つめ、微笑みかける。
「会えてうれしいよ、ユウ」
「――――!!」
アイが目を見開く。
「えっ。なんで。どうして？」
アイが目を見開いたまま、司の顔をまじまじと見つめる。

「……司、もしかして、思い出したの？　なくしてた記憶、戻ってきたの？」
司が眉を寄せる。
「えっと……記憶って……」
唐突に、司が目を見開く。
「――！」
司が額を強くおさえる。
「……っ。……なんだ？」
苦しげに片目を閉じ、もう一方の目をアイを向ける。
アイが心配そうに司を見つめる。
その背後のグランドピアノに司の視線が移る。
「あ、ピアノ……」
司が息をのむ。
「……あ……そうだ」
司が額から手を離し、アイに向き直る。
「ユウに聞きたいことがあったんだ。君の作った曲で、少しわからないところがあって……」
そう言って、グランドピアノのほうに歩き出す。
「…………」
アイは黙ったまま司の背中を見つめる。

アイは黙ったまま司の背中を見つめる。
司が鍵盤蓋を開ける。
「ん……ずいぶん埃かぶってるね。最近はあまり演奏していないの？」
司が鍵盤を優しく叩き、軽やかな音が響く。
「……その……。ボクは、ピアノは弾けないんだ……」
音が止まる。
「え？」
司が振り返る。
二人の視線が交わる。
「……たぶん、司の言ってるユウは……ボクのお姉ちゃんのことで、ボクじゃない」
「…………」
司が目を見開く。
「……お姉さん？」
司がハッと息をのむ。
「……それは、ごめんなさい」
そう言ってアイに向き直り、頭を下げる。
「そんな……ユウに姉妹がいたなんて、全然知らなくて……」
司がもう一度、小さく頭を下げる。

アイが両手を振る。
「そんな、謝らないで。えっと……君が知らないのも当然で、ボクと君はたぶん……。初対面だから……」
アイが顔を伏せる。
俯いたアイを、司が見つめる。
「……………。そっか……。それでそんな姿をしているんですね」
司の言葉遣いに、アイがピクリと体を震わす。
アイがゆっくり顔を上げる。
「……知ってるの？」
司がうなずく。
「たぶん……なんですけど。少し背が縮んでるみたいだけど、あなたのその姿はユウが――」
口を開いたまま、司の言葉が途切れる。
司が目を見開く。
「……？」
アイが首をかしげて、司を見つめる。
司が一歩、アイのほうに踏み出す。
「司……？」
よろよろとアイの横を通り、壊れたテレビに近づいていく。
アイが不安げに、司の背中を見守る。

アイが不安げに、司の背中を見守る。
テレビの前に腰をかがめて、司が割れた画面を覗きこむ。
「…………。なに……この姿」
震える声で呟き、自分のてのひらを見つめる。
「なんで…………僕」
司の視線の先で、手が小刻みに震えはじめる。
アイが司に歩みよる。
「司……どうしたの？」
「……。……………」
司が頭を抱える。
「……そうだ、さとうくんが…………」
両手で髪をかきむしるように、更に強く抱え込む。
「……っ。いた……痛い…………」
「司……？」
司の呼吸が荒く乱れていく。
「……っ……はっ……はぁっ…………。……はっ……っ……っあ
――」
「司‼」
司の目が大きく見開かれる。
「――――――」

その直後、力が抜けたように司が倒れる。
アイがかけ寄って、倒れる司をだきかかえる。
「……っ」
アイの腕の中で、司は目を閉じて寝息を立てていた。
司の顔を見下ろすアイが目を見開く。
「司……！　司！」
体を揺らしても、司の反応はない。
「……」
司を膝上に抱えるアイ。
眠った司の表情を見つめる。
その頬に、ぽつりと水滴が落ち、そのまま流れ落ちていった。
「……」
アイがうなだれるように、司に顔を伏せる。
白い前髪が表情を覆い隠している。
「……」
アイが下唇を噛む。
「……そうか、ボクは。ボクは……。…………。……」
窓から覗く満月が、廃墟の一室をうっすらと照らしていた。

・・・

海岸沿いに、ミリャと司が向かい合って立つ。

潮風を受けながら、司がミリャを見つめる。

「４月５日午前６時６分。緊急ログアウトが、トライメント計画の運営者と参加者に対して開始された。それはつまり、計画の中止を意味する合図。だけど、全体の三分の一の人たちはログアウトできずにとり残されてしまった。それが、トライメント計画に起きた事件の始まり」

無機質な声で、ミリャが続ける。

「朝方のことで、外側から管制している仕様から、内部の運営者には問題の原因がわからないまま、気づけば世界は閉ざされていた。ログアウトができないということは、外と連絡を取ることができないということ。さらに、計画を進行するための内部情報統制システムの重要管理権にアクセスできなくなって、全体の状況管理も難しくなった。結果、なにが起きたのか不明なまま、人々はこの世界に閉じ込められたということになる」

司が眉を寄せる。

「……そのことを、誰も知らないのはどうして？　記憶のない俺はともかく、みんなもこの世界が電脳世界だということは知らない様子だった」

ミリャが小さくうなずく。

「そういう治験を含めた計画なんだ。参加者全員はトライメント計画がどんな実験を行い、なにが成されるのか、全ての状況を説明されて計画に参加している。けど実験の目的の性質から、参加者にはこの世界を本物の世界だと感じ、生活してもらう必要があった。結果、記憶を忘却させる専用の部屋で、この世界が電脳世界であることや計画の実態の説明を行い、記憶忘却の了承を得て参加をしているんだ。みんなが説明されて了承した事実はあっても、そのこと自体も覚えてはいないんだよ。そんな危険な計画だからこそ、これだけの資金が動いて、参加中の皆の生活を保障する制度が多く適用されているんだ。でも、計画の大元は国際会議で行われたシンギュラリティによる社会問題から始まっている。個人でも実現可能な新たな技術のほうが問題で、これを抑制する方法を事前調査するためにどうしても必要な計画だったんだ」

「…………」

「話を戻すね」

そう言って、ミリャが波打ち際を歩きはじめる。
司がしばらくその背中を目で追ってから、ミリャのあとを歩き始める。

砂浜に残されたミリャの足跡を、司が追う。

「世界が閉ざされたあと、内部に残された運営者が調査してわかったのは、残された生徒がいることと――。――この世界の『管理ＡＩ』、『Ａｌｐｈａ』との接触がかなわなかったこと」

淡々と、頭の中の記録を順に引き出すようにミリャが言葉を続ける。

「大前提として、『管理ＡＩ』は通常自立しない、この世界の制御塔に組み込まれた、あくまでも『管理システム』なんだ。これまでは『管理システム』を人力で制御していたんだけど、それには膨大なコストと人員、多くの手間が掛かっていた。そこで今回、『管理システム』を代替して制御する『管理ＡＩ』、『Ａｌｐｈａ』が採用された。この『Ａｌｐｈａ』の問題を検証するため運営者が制御塔に向かったけど、中に入ることもできなかった。内部でも学園運営を含めた計画を中止する動きがあったけど、数日の調査で予定が変わった」

ミリャがかがみ込んで、波に打ち上げられた乾いた枝を手にとる。

「理由は、この計画を進行するための『管理ＡＩ』の役割が続行されていたため。司持に『管理ＡＩ』管理下にある『システム』が学園の

運営を続行したことから、強制的に計画は始まってしまった」

ミリャは枝の先端で『御雲島』を描き、その上に『ＡＩ』と描く。

そのあと、『御雲島』を丸で囲んだ。

「この『システム』は、ＡＩ専用プロトコル『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』といって、ＡＩ全てを統制するプログラムであり、この世界を司る一種の脳なんだ。これを通じて、『管理ＡＩ』は島全域に生活しているダミーの人間を操作している。御雲島』の中に点を描いていく。そのダミーの人々が、ログアウトによって欠けた人員を補うように、計画の遂行を開始したんだ」

「……ダミー」

司が顔を上げ、犬の散歩をしているおばあさんに目を向ける。

「じゃあ、あの人も」

ミリャがうなずく。

「わんちゃんもそうだよ」

「…………」

ミリャが砂浜に視線を落として、描いた絵を枝でかき消す。

「そういうわけで、島全域に生活しているダミーの人々が『管理ＡＩ』によって管制されている以上、私たちにできることは非常に限られるんだよね。結局、『管理ＡＩ』との接触はいまだ実現せずで、

やっと状況の輪郭がわかってきたところだけど、運営は手詰まり状態にある」
　乱れた砂を見つめてから、ミリャは枝を砂浜に放り、司を振り返る。
「これ以上解決の手段がなくて、１年間計画を完遂して『管理ＡＩの役割』を終わらせることでしか、問題解明の進歩が得られない状況になっている」
　ミリャが司越しに、後方にある廃墟を眺める。
「そんな状況の中、もう一人、真実を知る少女が現れた」
　司がミリャの視線を追って振り返る。
「その少女、『アイ』が唯一接触を許していた人物が、司くんなんだ」
「…………」
　廃墟をじっと見つめていた司が、ゆっくりとミリャを振り返った。

　別れ際、トンネルから司がミリャを振り返る。
　二人の視線がぶつかる。
「……………。……………司くん、ありがとう。おかげで大きな手掛かりが得

「られた」
　司が視線を逸らして、目を伏せる。
「…………」
「……俺には、結局今の問題を解決する手段はないように思えたけど……」
　ミリャが首を振る。
「手段については、考えてはいたんだ。ただ、『管理ＡＩ』である『彼女』が、どういったスタンスでいるのかがわからなかったから、下手に手出しできなくてね」
　司が目を丸くする。
「方法があるの？」
　ミリャが口に手を当てて少し考える。
「まったく方法がないわけではないかも。……まだ検証中だけど」
　顔を司に向けて、ミリャが続ける。
「そもそも、『管理ＡＩ』はあくまでも人工知能、つまり機械であるはずで、勝手な決断はありえない。誰かが指示をしたか、あらかじめそういうプログラムが組み込まれていたか……どちらにしろ、直接本体を確認する必要があった。そして、本体である『管理ＡＩ』は通常自立しない。けど見てのとおり、人間の姿で自立しているというのが

現状だ。わからないのは、彼女が何者なのかということ。外側からアクセスした形跡はないし、『彼女』は元々内側にいる存在ということになる」
「……やっぱり、『管理ＡＩ』その人……ではないの？」
ミリャがもう一度目を伏せる。
「……考えたくはないけど、その可能性でずっと追ってはいる。でも今のところ、確度の高い仮説にたどり着けてない」
ミリャがため息をつく。
「幸い、彼女は人を害するような子には見えなかったし、彼女の目的もわかった。今回の事件が計画的犯罪でないのだとしたら、やりようはある」
「………………。それじゃあ、ミリャはその検証をこれから進めていくんだね」
ミリャがうなずく。
「そうか……」
司が俯く。
「俺は……。…………………」
ゆっくり顔を上げた司がミリャを見つめる。
「俺も、少し考えてみるよ」

――うっすらとした朝の光が窓から差し込む。
机に向かうももの顔を、ノートパソコンのバックライトが照らしていた。
二段ベッドの下段で、流花が体を起こす。
「……………」
欠伸をもらして、ぼんやりとした視線をももの背中に向ける。
「……………」
ももは熱心にキーボードを叩いていた。
「……人工的に制御しているものを管理するプロトコル……。……見つけました」
ももが背もたれに寄りかかる。
天井を仰ぎ、体の力を抜いてだらりと腕を垂らす。
目元にうっすらクマが浮かんでいた。
「もも……また朝まで作業してたのか」
「……んー」
ももから返事を聞き、流花がため息をつく。
後頭部をかき、ベッドから立ち上がり、大きく伸びをする。

「……んっ……はぁ」
片手を腰に当てて、ももの背中に歩み寄る。
「もも、これから寝るんだろ？」
「……いぇ」
そう答えたももが身を起こしてまたノートパソコンに向かう。
「知りたいことがあるので、今日は日向子さんの元へお邪魔したいと思います」
「忙しいな」
「気になって眠れませんので」
そう言って、ももが立ち上がる。
その背中を流花が見つめる。
「……まさか、これから行くんじゃないだろうな」
ももが流花を振り返る。
「そのつもりでしたけど……」
「いや、時間……」
流花が机の上の時計に視線を向ける。
「まだ8時だ。さすがに早いだろう。というかお前、あの後風呂入ったのか？」
「………………」
ももが自分の腕をあげてにおいを嗅ぐ。

ミミが自分の膝を[illegible]呟く。

「……別に、大丈夫ですけど」

「お前なあ、部屋にこもるだけならともかく、友人に会いに行くなら身だしなみくらい気にしろよ」

「……むう」

ももが部屋の外に歩いて行く。

「どこいくんだ？」

「お風呂ですよ。目を覚まして日向子さんのところに行ってきます」

「……………」

流花がももの背中を見送り、、机の上のノートパソコンに視線を向ける。

それから、近くにおかれたタブレットに目を向けた。

「ん？　トト？」

タブレットの画面は薄明るく光り、トトがちょこんと立っている。

「おはよう。珍しく大人しいな」

トトが顔を上げる。

「あっ、ハロー。流花」

返事だけ返して、トトはまた静かになった。

流花が首をかしげる。

「どうした？」

「……いえ」
トトが顔を伏せる。
「これで……いいのかなと思いまして」
「……ももと、なにかあったのか？」
トトが力なく首を振る。
「最近、ももがずっと調査に明け暮れているのは、私のためなんです。……しかもそれは……」
「……よくわからないが、大丈夫だろ。ももは自分がやりたいと思ったことしかやらないからね」
流花が腕を組む。
「…………」
俯くトトを流花がじっと見下ろす。
「…………。本当、不思議だな。トトと話していると、まるで人間と話しているみたいに感じる」
「……！」
トトが目を見開いて顔を上げる。
「あ、いや、すまない。本当に感心してしまってね……」
トトが寂しげな微笑みを浮かべる。
「いいえ、それだけももがすごいという証明ですから、誉め言葉です」
そう言ってトトがまた俯く。

「……………。……依存しているのはもではなく、トトですね……」

司が机に開いたノートにペンを走らせる。

時折タブレットに視線を移し、内容をノートに書き写す。

『法とは――』

『物事に秩序を与えるものや人間にとっての根本的な規範』

手を止めて、タブレットの画面をスクロールさせる。

『法律とは――』

『社会生活の秩序を維持し統制するために、国家などが定めた規範』

そこまで書き写し、司が顔を上げる。

「……………。……………システム」

そう呟いた司の耳に、キーボードの打鍵音が届いてくる。

振り向くと、理人が机に向かってノートパソコンのキーボードを叩いていた。

「……ふむ」

エンターキーを叩き、背もたれに身を預ける。

口に手を当てて画面をじっと見つめる。

「理人は、何の作業をしてるの？」
理人が司に顔を向ける。
「自由学習のプレゼンまとめだね」
「あー……」
理人が腕を組んでノートパソコンに視線を戻す。
「一応、後々使いまわせるように、ゲームの企画書としても形にしてるんだ。ゲームの企画は、売れるＩＰを作り出すことはもちろんだけど、独自開発の特許技術や、便利なシステムを作ることも説得力に繋がるからね」
「今回の企画は、初めからそう掲げてたもんね」
うなずいた理人が、ノートパソコンから司に顔を向ける。
「司はもう発表内容まとめられた？」
「……いやー、それがまだなんだよね……」
司は、手元に広がったノートをぱらぱらとめくった。
「プレゼンは奥が深くて難しいよ。あ、そういう意味では、内容はゲーム開発にこだわらなくていいよ」
司が理人を振り向く。
「というと？」
「もう、単純にグループ制作は難しいとか、ももちゃんはチートだとか、ミリアちゃんの上[illegible]とかでも

な、ミリヤちゃんの外見とかでも」
「それ、感想じゃん……」
目を細めた司が言った。
「いいんだよ。今回はゲームム開発のプレゼンって指定されてる訳じゃないし、自分の伝えたいことをどう伝えるかがポイントなんだから」
「……」
司がため息をつく。
「まったく、耳が痛いな、ほんとに」
理人が司の横顔を見つめる。
「……」
司が天井を見上げる。
「うーん……ゲームの宣伝っていう意味では理人と被っちゃうんだけど……。このARゲームって、島中を探索していく事が一つの目的になってるでしょ」
「そうだね」
口に手をあて、司がぼんやりとした視線を漂わせる。
「クエストを進めれば島の観光と同時に、植物や生息する生物の情報を知ることができる。例えば、子供たちがこのゲームを持ち寄れば、休み時とかに課外活動を促せるし、子供とその両親両方に嬉しいシステムになってる。範囲が島中で、危険な場所は予め外しているから安

心だし、観光協会も島の宣伝になって嬉しいんじゃないかな」
「ほうほう」
司が顔を上に向けたまま続ける。
「ゲームといえば楽しんでもらうことが目的の娯楽ではあるけど、やり方によっては、そういうコミュニティの在り方も提供できるんじゃないかって。つまり、ゲームの持つ性質は、ゲーム内での目的以上に、そのゲームをプレイすることによって実現可能となる目的を定めることができる。ゲームは、意思を持たない子たちにも共通の目的と環境を与えて、ルールの中で、どうやって目的を達成するかを一緒に考えられる――。ある種のシステムなんだよ。…………。あれ、これよくない？」
司が理人を振り向く。
「いやあ、僕も思わず聞き入っちゃったよね」
理人が笑みを浮かべる。
「いやまあ……話してみるもんだね……」
司が頬を赤らめ、体を前に向ける。
そう呟いて、頬をかいた。
「難しい顔して机に向かってると思えば、プレゼン内容を考えてたのね。そういうことなら相談してくれればよかったのに」
司は手元のノート見つめる。

司は手元のノート見つめる。

「いや、実は全然違う勉強をしていたんだけど……なんかふと思いついたっていうか」

「あー、あるあるだね、ソレ」

理人が身を乗り出して、司のノートを覗き込む。

「……ん……え？　法律の勉強⁇」

理人が司を見て怪訝な表情を浮かべる。

「どしたの、司」

理人の丸くした目を見て、司が苦笑いを浮かべる。

「これはちょっと気になって……色々調べてみようと思って始めたことの一つだよ」

「はー」

理人が体を引き、背もたれに寄りかかる。

「ああでも、ゲーム制作ってある種の世界創造だしな……。その世界を統べるルールを作るためにも、法律を知ることもいつかは必要かなあ」

「……」

司が理人の横顔を眺めてから、前を向いて顔を上げる。

「……世界創造か」

テーブルにおかれたタブレットの真っ暗な画面をももが見つめる。
「ミリャの病気の原因がわかったわけではないんですが、三国先生の言っていた意味はわかりました」
そう話すももを、テーブルの反対側から日向子が見つめる。
「確かな確証があるわけではないんですが、ミリャの脳を蝕む病気をいかにして治そうと考えているのか、その方法自体はなんとなくわかったんです。ですが、まだ推論の域を出ていません」
ももが顔を上げる。
「そこで、日向子さんにご協力いただきたいことがあるんです」
「それはもちろん。ミリャちゃんのためにできることがあるなら、それは願ってもいない申し出だよ。でも、私にできることってなにかあるのかな……？」
ももがうなずく。
ももがタブレットに指を触れる。
「諸事情があって……ももちゃんはとある調査をし辛い立ち位置にいます」
「調査？」
「はい。日向子さんには、その調査にご協力いただきたいんです

「はい。日向子さんには、その調査にご協力していただきたいのです。といっても、基本的にはシンプルな調査です」
ももがゴホンと咳払いする。
「三国先生の裏の目的を探って欲しいのです」
日向子が眉を寄せる。
「裏の目的……。それは、ミリャちゃんの病状を快復させることじゃないかな……」
ももが口に手を当てる。
「それは確かなんですが、一つわからないことがあって」
顔を上げるもも。
「日向子さんは、特別支援学校のことはご存知ですか？」
「えっ、うん……なんとなくは……」
「その特別支援学校を運営していた民間企業が、あるシステムを独自に開発していたんです」
ももがタブレットを日向子に差し出す。
「そのシステムの一部として作られたのが、このタブレットです。そして、そのシステム開発を始めた人物が――」
ももがタブレットを静かにおく。
「三国義貴先生です」
「……!!」

日向子が目を見開く。
「そうだったんだ……」
ももがうなずく。
「『社会問題を最適化する仕組みを作ること』。それが民間企業の掲げていた目的でした」
ももが俯く。
それから細いため息をついた。
「三国先生の目的が、もしミリャを救うことであり、その手段がももちゃんの想像する通りなら……。ももちゃんは、その目的に加担したい事情があるんです」
日向子が小さく首をかしげる。
「加担したいけど、目的が釣り合わなかった場合、ももちゃんはトトを失う可能性が高いです。三国先生は研究者のももちゃんを知っています。ももちゃんが直接動けば、すぐに怪しいと感づかれてしまいます。ですから、日向子さんに見極めてほしいのです」
ももが顔を上げる。
「ミリャを救いたい気持ちを持っている日向子さんなら、この計画の原理を明かしても秘密を守ってくれると思いました。もし不安でしたら、今話したことは忘れてください。ミリャのためといいながら、こ

れにももちゃん自身の私情が発端ですから……」
　そう言って、ももがさらに深く顔を伏せる。
「ううん、大丈夫だよ」
　ももが顔をあげる。
　日向子がももを見つめて、微笑んだ。
「それが、ももちゃんの頼みなら私に断る理由はないし、ミリャちゃんを助けられる可能性があるのなら、私もそれを優先したい。聞かせてほしいな、ももちゃんの目的を」
　ももが寂しげな微笑みを浮かべる。
「……やっぱり、日向子さんは優しいですね。それじゃあ、損ばかりしてしまいますよ」
　日向子が目を丸くしてから苦笑いを浮かべ、目を伏せる。
「ううん、これは正直……私自身の私情も入っているから」
　ももが日向子を見つめる。
「……ミリャですか？」
　日向子がうなずく。
「…………」
　顔を上げた日向子が苦笑いを浮かべる。
「私、ももちゃんのほうがよっぽど優しいと思うな。損するとか、ももちゃんのほうが言われてそう」

ももが息をのみ、目を逸らして机の一点をぼんやり眺める。
「……それをよく言われていたのは、私の両親ですね」
「……そうなんだ」
ももが居心地悪そうに苦笑いを浮かべる。
そのあとで、バッと顔をあげる。
「あっ、でも大丈夫ですよ！　ももちゃんは裏切りませんので！」
日向子が目を丸くしてから笑った。
「大丈夫だよ、そんなこと考えてないから」
日向子の笑みに、ももも微笑みを返す。
「それでは日向子さん。お話しさせていただきます。トライメント計画の内情を」

「ただいまです」
玄関をまたいだももが扉を閉め、靴を脱ぐ。
同時に、玄関入り口の靴を見回すもも。
廊下を歩き、部屋の扉を開ける。
「…………」

人気のない部屋にももが入り、リュックを椅子の上におく。
それから目蓋を重たそうに伏せる。
「さすがにちょっと眠いですね……」
ももが呟いて、リュックからタブレットを取り出す。
電源を付けると、画面にトトが現れる。
「トト、ももちゃんはちょっとひと眠りするので、三時間後に起こしてください」
トトがももをジッと見上げる。
トトが前に組んだ手をもじもじと動かす。
「トト？　どうしたんですか？」
「……その」
トトが顔を伏せる。
「あの……私のせいで、ごめんなさい」
ももが眠そうな目で、優しく微笑む。
「むしろ、ももちゃんに研究する理由を与えてくれてありがとうございます、トト」
トトが顔を上げる。
「でも、ももは……」
すぐにまた、トトは俯く。
「普通の学園生活を送りたがっていました……」

「……そうですね」
ももが顔を上げ、机のノートパソコンに視線を向ける。
「ももちゃんが研究者になったことで、両親の居場所は無くなってしまいました。私はただ、もし普通の女の子でいられるなら、普通でいてみようと思っただけです」
ももが自嘲する。
「まあ……こんなものですよね」
ももがタブレットを持ち、ベッドに向かう。
画面内からトトがももを見上げている。
梯子を上り、ベッドの上段に寝そべる。
「あぁ、一瞬で眠れますね……これは」
ももが目を細める。
「トト、よろしくお願いしますね」
ももの横にタブレットが寄り添うようにおかれる。
その画面の中から、トトがももを見守る。
「はい、おやすみなさいませ。私の大切な、もも」

中央に咲く桜の木。
そこに向かってミリャが一人、ゆっくり歩いていく。
なだらかな小丘をのぼり、木の幹に触れる。
「……………」
そのまま目を閉じる。
「……これもそうか」
そう呟いてから、ゆっくり目を開き、手を離す。
一歩後退して、小さくため息をつく。
振り返り、桜の木を背にして歩き出す。
「『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』を作ったのが彼だとすると、一体誰が……」
桜公園を後にして、ミリャが表情を凜とさせる。
「本気で今を変えたいと願った人たちの想いを……お父さんたちの想いは、私が守る」
一歩一歩踏みしめながら、ミリャが草原を進む。
ミリャがゆっくりと足を止める。
——風が吹き、髪がなびく。
背後に、一つの影。
「……………」
小さく口を開けたミリャが、その人物を振り返る——。

・・・

週明け。タブレットを持った生徒が、廊下を流れていく。
その流れを縫うようにして、司が早足で歩く。
司の前方に、ミリャと日向子の後ろ姿があった。
「おはよう、箒木さん。それと、ミリャちゃんも」
二人の隣に並んだ司が日向子に顔を向け、ミリャにも視線を一瞬送る。
ミリャがこくりとうなずく。
「あ……おはよう、新田くん」
一呼吸おいてから、日向子が司の言葉に反応する。
司が小さく首をかしげる。
「どう？　最近は息抜きできてる？」
「あ……えっと」
日向子が視線を上に向ける。
「う一ん……結局いつもと変わらない日々を送ってるなあ。試験結果がまだだから、それで頭が切り替わっていないのかも」
司に向き直った日向子が苦笑する。
「[illegible]

「ああ、そういうのあるよね」
「ね」
会話が途切れ、無言のまま三人がしばらく歩く。
「……………」
司が前をむき直す。
司が日向子の横顔を盗み見る。
日向子越しに、ミリャが肩をすくめてみせた。
教室の前で日向子が立ち止まる。
司とミリャもそれに合わせて立ち止まると、日向子が二人を振り返る。
「それじゃ……二人とも、またね」
日向子が微笑む。
「合格したら、なにか驕るよ」
「ん……」
日向子が表情を変えずに司を見つめる。
それからハッと息を飲む。
「あ！　試験ねっ」
司がきまずそうに頬をかく。
「大丈夫？　緊張してる？」

日向子が首を振る。
「ごめんね、今朝からずっとぼーっとしてて。ちゃんと寝れなかったのかも」
苦笑しながら日向子が言った。
「そっか」
司が日向子を見つめたまま、片手をあげる。
日向子が目を丸くして首をかしげる。
それから司の意図に気づき、おずおずと手をあげる。
「まだ合格してないけど……」
「景気づけに、ね」
日向子が困ったような微笑みを浮かべる。
二人がハイタッチを交わし、乾いた音が小気味よく鳴った。
「それじゃ、また」
「うん、ありがとうね」
司が微笑み、日向子に背を向ける。
ミリャが日向子に、サムズアップを突き出す。
「……」
日向子がミリャをジッと見つめる。
「またね、ミリャちゃん」
そう言って日向子は微笑み、手を振って教室に向かった。

そう言って日向寺に微笑み、手を振って教室に向かった。

「……」

ミリャがうなずいてから、司のあとを追いかけた。

司とミリャが廊下を並んで歩く。

目の前を歩く人々が教室に流れていくの見送る。

司が振り返る。

うしろには誰もいない。

「……」

立ち止まった司が隣のミリャを振り向く。

「ミリャ」

その呼びかけに、ミリャが立ち止まる。

「篝木さん、どうしたの？」

ミリャが司をじっと見つめてから、周囲を見渡す。

それから司に体を寄せる。

「……廊下で話しかけないでよ」

小さな声でミリャが言った。

「ごめん、気になっちゃって」

ミリャが小さくため息をついて目を伏せる。
「……ももが私たちの部屋まできて、ちょっとね」
「……」
「用があるなら人のいないところでね」
ミリャが司を押しのける。
司が前を向く。
立ち止まったまま口に手を当て、チラリとミリャに視線を送る。
「……どうしよっかな」
ミリャが首をかしげる。
間をおいて、ジトっとした目を司に向ける。
「そういう意地悪は、シャレにならないからね」
「ごめん、冗談だよ」
司が笑いながら教室の中に入って行く。
ミリャがため息をつき、それからピタリと静止する。
「……」
目を見開いて、ゆっくりうしろを振り返る。
廊下の壁の隅から顔を覗かせているももとミリャの目が合う。
「…………」
ゆっくりと前を向いたミリャの頬に、汗が一筋流れる。
それから、重い足取りでミリャが教室の中に入っていった。

それから、重い足取りでミリャも教室の中に入っていった。
「…………」
ミリャが、司とももと理人の三人に手を振り、人の流れに乗って教室を出て行く。
三人はその背中を見送った。
「…………」
ミリャが見えなくなったあと、司と理人がミリャの机挟んで向かい合う。
「あの、二人とも、いいかな？」
ももが顔を上げて司を見やる。
「どした？」
司がタブレットを取り出す。
「これ、頼まれてたフィールドワークの観測データなんだけど、一通り終わってね。自分なりに考えて、使えそうな場所とか、アイデアをまとめてみたんだ」
司が顔を上げる。
「時間があるときにチェックしてもらえたらなーと」

理人が微笑む。
「いやあ、時間ありまくりだよ」
そう言って、理人も自分のタブレットを取り出す。
「二人が放課後も使って本当よくやってくれてるからねー。司のフィールドワークの作業が終わったら話すつもりだったんだけど、もうまもなく目的の課題は完了する」
机の上におかれた司のタブレットに、理人が自分のタブレットをかざす。
画面にデータ転送の進捗メーターが表示され、少しづつ溜まっていく。
「あとは各自がプレゼン内容を考えるくらいだね」
「そうか……」
ももが片手を腰に当て、もう片方の手に持ったタブレットを見る。
「それにしても、かなり順調に進みましたね」
メーターがいっぱいになり、理人がタブレットを手元に戻す。
「理人の進行が旨いおかげだよ」
「いやいや、君らが優秀なおかげだよ」
「いやいやいや」
「いやいやいやいやいや！」

ももが嬉しそうに否定する。
それを見て、司と理人が苦笑いを浮かべる。
今度はももがタブレットを掲げる。
「それじゃあ、司が集めたデータはももちゃんが解析して反映しておきます」
「いつも悪いね」
「頑張るのはトトなので、なんてことないですねー」
そう言って、メーターの溜まったタブレットを手元に寄せる。
理人が口に手を当てて考え込む。
「……いくらだしたらトトちゃんを譲ってくれるの？」
「譲りませんよ！」
もも、タブレットを守る様に抱き抱えて身を引く。
二人のやりとりを眺めていた司が苦笑する。
「俺はなにかすることあるかな？」
理人が司に顔を向ける。
「あいや、マジでプレゼンくらいだよ」
「そっか」
司が机においていたタブレットを手に持つ。
「じゃあ、いい加減俺も進路希望なんかを考えていこうかな」
「……」

ももがじっと司を見つめる。
「それがいいね」
理人がうなずきながら言った。
「では、今日は解散ですか？」
理人がうなずく。
ももがニッと微笑む。
「わかりました」

鞄を手に、司が廊下を歩く。
「つかさっ」
司に駆け寄ったももが、ぽんと司の背中を叩く。
「ん。ももちゃん、どうしたの？」
司が廊下の隅により、ももも同じようにして司の隣に立つ。
「司、ももちゃんとこれからデートしましょう」
司が首をかしげる。
「なにを企んでいるのかな？」
「企むだなんて、そんなそんな〜」
井戸端会議をしている主婦のように、ももが手をひらひらとさせ

る。
「どうせ、ミリャちゃんのことでしょ」
「えっ、全然違いますよ！　司、ミリャが気になるんですか？ あらあらまあああ！」
「……………」
司が微笑む。
「もうお昼ご飯の野菜食べてあげないよ」
「ウソウソ、じょ一だんですよっ。もう、司ってば純情なんですから〜」
ももがにっこりと微笑む。
司が大きなため息をつく。
「ラブホテルで顔を真っ赤にしてたももちゃんには負けるよ」
ももの顔が瞬時に赤くなる。
「ばっ!!　ばっかで一!!　そんなわけあるわけないにきまってるじゃないですか!!」
そう叫んだももが目を泳がせる。
司が首をかしげる。
「じゃあ、今から行こうか？」
「へっ!?」
ももの表情が凍り付く。

司のまっすぐな視線から逃げるように、ももが目を逸らす。
「な、なに言ってるんですか、冗談でもそんな……ら、らら……ラブホテルに行こうだなんて！」
司が両手を挙げる。
「俺、ラブホテルに行こうとは一言も言ってないけど」
「……」
ももが固まる。
司がその様子を見て吹き出す。
「ももちゃんは純情だなあ」
ももの顔が更に赤くなる。
「じゃ、行こうか、デート」
司がももの頭に手を乗せてぽんぽんと叩く。
それから、飄々と歩きはじめる。
「〜〜〜〜っ」
ももが走り出し、司の背中にタックルする。
「ぐあっ」
のけ反る司を追い越して、ももが廊下をさらに走る。
「喫茶店まで競争でーーす!!」
背中をさすりながら、走り去るももの後ろ姿を司が眺める。

「しょうがない先輩た」
そう呟いて司が微笑む。
しばらくして、廊下の奥からももの悲鳴が届く。
「ぎゃ——！　いすかせんせい!!　これは違っ……、理由があるランニングなんですっ!!」

入り口のドアの鐘がなり、ウェイトレス姿の夏奈が二人を出迎える。
ももが小さなカードを夏奈に突き出す。
「夏奈、奥の席をお願いします」
「まかせて!!　二名様ご案内ー！」
カードを受け取った夏奈が声を張り上げて、ずいずい奥に進んでいく。
そのあとに司とももが続く。
司が前屈みになってももに顔を近づける。
「何、さっきのやり取り」
「まぁまぁ」
そのまま二人は店の奥側へ。

やや仕切られた空間に設置された二人掛けのテーブル席に司とももが座る。
テーブルの上にはコーヒーと紅茶がおかれていた。
夏奈が伝票をテーブルにおく。
「ごゆっくり～」
にこりと、満面の笑みを浮かべた夏奈が去っていく。
その背中を司とももが見送る。
「夏奈はああ見えて、秘密を厳守してくれるので」
「はあ」
司が気の抜けた相づちをうち、ももが手に取ったコーヒーの香りをかぐ。
「ふう」
それから口をつけてすすった。
紅茶のカップを手に持った司がその様子を見つめる。
「ももちゃん、コーヒー飲むんだね」
「えっ？」
カップをおいたももが目を丸くする。
それから手元のコーヒーカップに視線を落とし、司を見上げる。
「へ、変ですか？」

「ぜんぜん」
そう言って司も紅茶を一口すする。
「……」
しばらく呆然とするもも。
熱い紅茶を飲み込んだ司が深く息を吐き出し、カップをソーサーに戻す。
「……司、なんだか雰囲気が変わりましたよね」
司が顔を上げ、ももを見る。
「最近、よく言われるよ」
「…………」
紅茶からたつ湯気に小さく息を吹きかけて、司がもう一度カップを持ち上げる。
「ももちゃんは、前のほうがよかった？」
表情を変えずに、司がももを見つめる。
ももキョトンと首をかしげる。
「いえ、素で感じた感想といいますか……」
ももが手元のコーヒーの黒い水面をぼんやり見つめる。
「司が望んだ変化なら、それがよいものだとももちゃんも思いますよ。他人から見た良い悪いなんて、その人の都合ですしね」
「

……」
　ももがコーヒーカップを持ちあげ、コーヒーをすする。
「ももちゃん、普段は子供っぽいのに、たまに大人な一面を見せるよね」
「……それ、褒めてますか？」
「ギャップがあって魅力的だよ」
　ももが頬を赤らめて目を逸らす。
「ほんと……最近の司は飛ばしてきますねぇ……」
　ももがゆっくりコーヒーカップをおく。
「まあ、人には誰しも二面性がありますからね。外も内も同じような人の方が珍しいでしょう」
　司がももに視線を向けてから顔を伏せ、静かに微笑む。
「……二面性か」
　ももが、俯いた司をチラリと覗く。
「司、『探しもの』は見つかりましたか？」
「……」
　顔を上げた司がももの目を見つめ返してから、再び顔を伏せる。
　しばらく沈黙する。
　ももはじっと見つめながら待っていた。
「……実は、ももちゃんもとある『探しもの』をしていまして」

司が顔をあげる。
「ももちゃんの、探しもの？」
「……ものというか、方法でしょうか」
ももが足元の籠に入った鞄からタブレットを取り出す。
机におかれたもものタブレットを司が見つめる。
「司は、トトをどう思いますか」
「……………」
電源のついていない黒い画面を、司が見つめる。
「すごい……人工知能だなと……」
ももが微笑む。
「ありがとうございます。でも」
ももが言葉を切り、司が顔をあげる。
「すごいのはトトであり、この世界なんです」
司の表情がピクリと動く。
「……………。……この世界？」
ももがうなずく。
「少し話は変わりますが、司は人工知能の作り方について、ご存知ですか？」
「人工知能の作り方……。……最近学んだ浅い知識だけど、データを学習させることから始まる　みたいな？」

学習させるのが好ましい……のかい？」
　ももが微笑んでうなずく。
「そうですね。人工知能——そう呼ばれると、まるで人が、知能そのものを作ったように思えますが。実際は、司の言った通り、さまざまなものを『学習』させて、知能の『ように見える』ものが観測されるようになった。これを、人工知能と呼んでいるんですよ」
　ももが人差し指を立てる。
「つまり、ボトムアップ式に組み立てていくのではなく、膨大な情報を与えた結果として現れた『なにか』。現在の人工知能は、そういうものなんです」
「ふむ……」
「そうしてやがて、人工知能はデータを『観測』し、結果を『推定』し、現実との『誤差』から世界を学習していく。つまり彼らは、試行錯誤の連続なんですよ。遥か昔、盤上のゼロサムゲームで彼らが人類を打ち破ってから続く伝統芸です。だから、当然彼らが間違うこともあります。ただ、そこから彼らは学び続けているんです。次は間違えないようにと、次はもっといい結果になるようにと、パラメータの変更とプロセスの修正を繰り返して」
「……」
　ももを見つめていた司が、もう一度タブレットの真っ暗な画面を見

つめる。
「トトもそうです。同じ人工知能でも、経験によって差異が生まれていくんです。まるで、人間のように」
　ももがコーヒーカップを手にとり、一口すする。
　ふう、と小さく息をつく。
「トトには、日常的に世界のあらゆる情報を学習してもらっています。そのトトにですね、この御雲島で再構築してから変なクセがついているんですよ」
「……クセ？」
　ももがうなずく。
「人工知能には、これまた人間と同じく、いろいろとクセが出るものなんです。例えば将棋のＡＩだったら、あのソフトは中盤が強い、あのソフトは序盤が雑……開発者が狙ったわけでもないのにそういったクセがつく」
　司はももを見つめながら耳を傾けていた。
　ももがその視線を見つめ返して微笑む。
「ある意味、子育てに似てるのかもしれないですね」
「なるほど、だからトトちゃんはこんなにも日常的に暴走して……」
　ももがムッとする。
「まあ、それはともかく　　トトの学習にはももちゃんも疑問に思う

ところがあるんです。方法は同じなのに、これまでと、この計画内でのクセの付き方が、まるで違うんですよね」
「……」
「つまり、すごいのはトトであり、この世界なんです」
司が口に手を当てる。
「すごいトトちゃんが、トライメント計画を通して学習して、さらにすごくなったってこと……？」
「概ね正解ですね。なにがすごいって……」
ももが周囲を見渡してから、司に顔を寄せる。
「？」
司も身を乗り出してももに顔を寄せる。
耳打ちをするように、ももが口に手をそえる。
「トトは、感情を学習しているんです」
「……………」
二人が静かに顔を離す。
司が眉を寄せる。
「感情って……」
ももが人差し指を口元に立てる。
「司、このことは他言無用でお願いします」

「それは……もちろん」
ももが小さくため息をつく。
「……ももちゃんの『探しもの』というのは、トトを救う方法です」
「……………」
「司の想像する通り、トトの存在が知られれば、トトは消されてしまうでしょう。……それは……どうしても嫌で……」
ももがぎゅっと手を握る。
「なんとかできないか、方法を探しているんです」
「……」
ももが押し黙ったまま俯く。
司はしばらく、ももを眺めた。
「……ももちゃんは、どうしてこの話を俺に？」
「………………」
顔をあげたももが、大きく深呼吸をする。
「本当はもっと確証を得てから話すつもりでした……まだ話すつもりはなかったんです。……ですが」
言いよどむももに、司が微笑みかける。
「大丈夫だよ、少なくとも俺は、ももちゃんの味方だから」
「……」
ももが顔を上げて、司を真っすぐ見つめた。

ももが顔を上げて、司をまっすぐ見つめた。

・・・

インターホンの呼び出し音が鳴る。
司がその機械をじっと見つめる。
受話器がとられた音がして、司がカメラに向かって手を振る。
「ミリャ、いるかな？」
ホワイトノイズが続き、通話が切断される。
司が端末から顔を上げて、廊下を進んでいく。
扉を開け、司が中に入る。
玄関まで迎えにきたミリャが、司を見上げる。
「どしたの？」
「ちょっとミリャに、話があって」
ミリャが首をかしげる。
「なにかな？」
「ももちゃんから、俺たちがこの世界の仕組みについて知っている前提で相談を受けた」

「…………」
「君の持つ病気についても、なんとなく見当がついているようだった。ミリャが話せることは知らない様子だったけど、君がしようとしていることに、心当たりがあるみたいだったね」
「そっか。やっぱり、彼女はすごいね」
ミリャが小さく顔を伏せる。
ミリャが口に手を当てる。
それから、立ち上がった司を見上げる。
「とりあえず、あがって」
司がうなずく。
「お邪魔します」
ミリャが部屋の奥に進んでいく。
司は靴を脱いで下駄箱にしまい、ミリャのあとに続いた。
テーブルを挟んで司とミリャが向かい合う。
「……なるほどね」
ミリャは口元に手を当てて司の話を最後まで聞いた。
「俺には知識がないからそういうものだとしか理解できなかったけど、実際に感情を学習するなんてことがあり得るのかな」

と……実際に感情を学習するなんてことがあり得るのかな？」
　ミリャがゆっくり首を振る。
「……あり得ない」
「…………」
　ミリャが目を伏せる。
「普通なら、あり得ないと思う」
「……普通なら」
　司が視線をテーブルの上に漂わせる。
「……俺には、そこら辺にあふれているダミーですら感情があるように見えたけど、それは違うんだよね」
「あれはたぶん、元になっている人がいて模倣しているだけだから、そもそも基本理論が異なるんだ。ただ、トトは学習している……。そうか……」
　ミリャが目を細める。
「実は疑問だったんだ。今回の計画でトトのような人工知能の存在が許されていることが。計画の仕様上、人工知能はプロトコルの影響を受けてしまう。だから注意が入るはずなんだけど、今の計画は管理が機能していない」
「なるほど」
　ミリャが顔を上げ、司を見る。

「司くん」
司が顔を上げ、二人の視線が交わる。
「司くんは、『管理ＡＩ』の『彼女』をどう思う？」
「……。あってもおかしくないと……俺は思うよ」
「……」
口を開いてなにかを言いかけたミリャが、また口を閉じる。
「……」
沈黙が続いたあと、司がゆっくり口を開く。
「このタイミングで話を挟むようで申し訳ないんだけど」
ミリャが視線を司に向けて首をかしげる。
「なにかな？」
「……えっと」
司が頬をかく。
「ももちゃんの話を聞いて思ったんだけど、ミリャ、俺に話してないことがあるよね」
「……」
「君がなにをしようとしているか、とか、『彼女』が『管理ＡＩ』そのものだと気付いた理由、とか……具体的なことは聞いていないし。それでもよかったんだけど……俺が知っても都合が悪くないのであれば、知っておきたい

に、知っておきたい」
　ミリャが目を伏せて、小さくため息をつく。
「……聞いても、止めないでね」
　司が苦笑いを浮かべる。
「俺が止めてもミリャは聞かないでしょ」
「……まぁ、ね。じゃあ……」
　ミリャが背筋を少し伸ばす。
「……この世界が、夢という名の電脳仮想世界だって話はしたよね」
　司がうなずく。
「正確には、とある『人工知能』が見る夢にみんなの意識がアクセスして、そこで目を覚ましているんだ。その大元となっている『人工知能』は、『Ｏｍｅｇａ』と呼ばれている。その『Ｏｍｅｇａ』を作った研究機関の主任が、レイ・Ｂ・ホラトレイス」
　司が目を見開く。
「彼は昔、人々の意識を特定のシステムプロトコルを通じて共有させる実験を、身内を使った臨床実験で成功させた。恐らく、『Ｏｍｅｇａ』やそれを補佐するシステム『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』は、当時の研究の完成形にあたるものなんだと思う」
　ミリャが腕を組む。
「人工知能『Ｏｍｅｇａ』は現実にあって、私たちのいるこの夢の世

界を管理しているのが、人工知能『Ａｌｐｈａ』。『Ａｌｐｈａ』は前に話した通り、この計画の状態を管理するＡＩで、この世界を司るシステムを利用して問題を監視している。それが、人工知能同士を繋ぐネットワ一クプロトコル『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』」

ミリャが司を指さす。

「君と」

その指を、自分に向ける。

「私。私たちの背中にあるレリ一フが、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』に関与している証なんだ」

司がごくりと喉を鳴らす。

「この模様……そういうことだったんだ……」

ミリャがうなずく。

「ちなみに、私が『彼女』が『管理ＡＩ』そのものだと気付いたのは、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』を通して彼女を認識したことがあったからだ」

「……なるほど」

「といっても、それは当時私の意識が確立されていないときの行動の結果わかった事実でね。今は『彼女』に逆探知されてしまうからなるべく使用は避けてる。下手したら彼女に削除される可能性もあるから

ね」

「ミリャが顔を少し上に向ける。

「理由はハッキリしていないけど、現在アクセス不可能になっているはずの『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』に、私たちはアクセスできる。まあ、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』は私たちにとって、脳の電気信号を最適化する補助器具のようなものだから、それが繋がっている理由と考えるのが妥当だね」

司が首をかしげる。

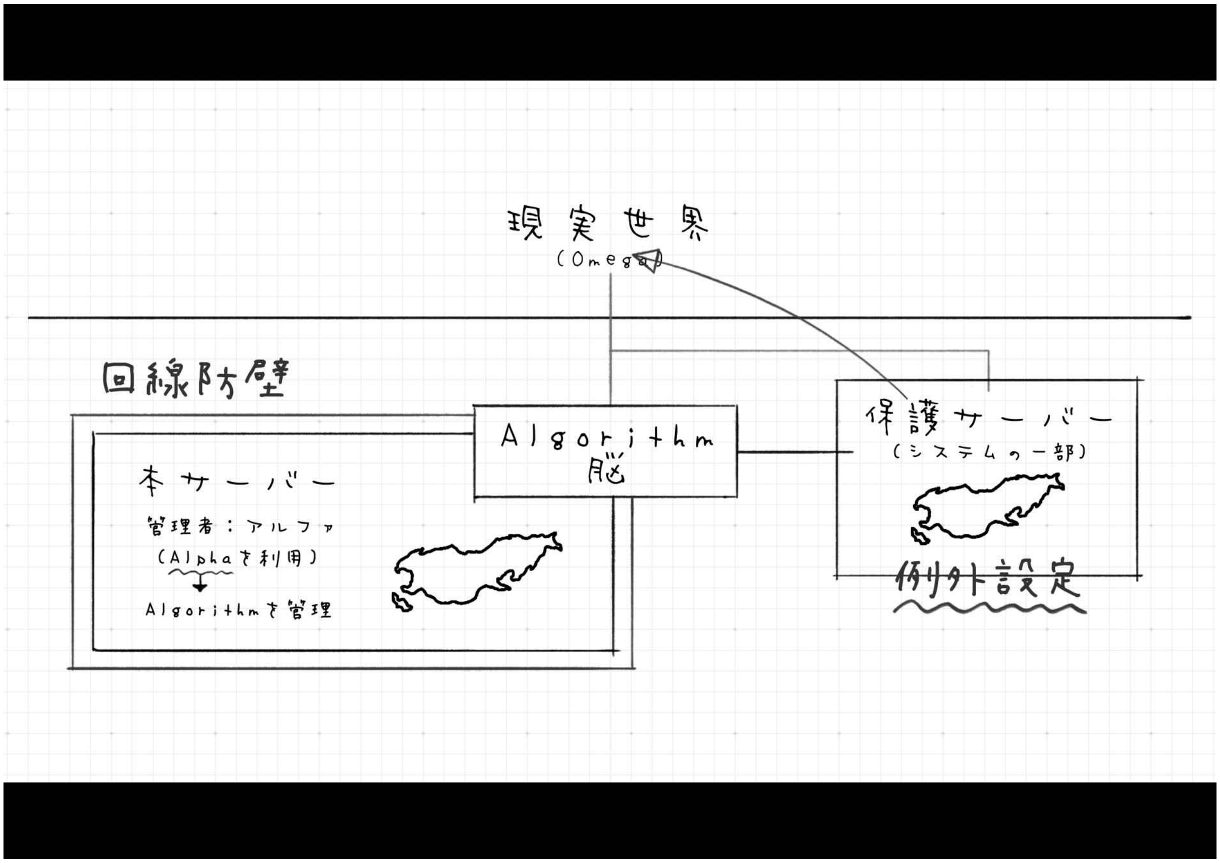
「それって、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』から俺たちが切り離されたら、意識を自立できないってこと……？」

ミリャが司に顔を向けてうなずく。

「たぶんね」

目を伏せて、ミリャが自分の手元を見つめる。

「……私は、この『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』を利用できないかと考えてる。通常、人々がこの世界にくる時は、現実の世界から人工知能『Ｏｍｅｇａ』の夢にアクセスしている。だけど、司くんのもう一つの意識が別の場所で眠っているようなんだ。本来なら、それは君の中にあるはずだけど、アクセスできなかった意識を保護する『Ｏｍｅｇａ』の機能が、君のもう一つの意識を別世界に保存している。私はあの日、その別世界にアクセスし、君のもう一つの意識を見た」


現実世界
(Omega)
回線防壁
Algorithm
脳
本サーバー
管理者：アルファ
(Alphaを利用)
Algorithmを管理
保護サーバー
(システムの一部)
例外設定

「ん……んん……。まあ、とりあえず。……字がヨレヨレなのはご勘弁ください」
「味があっていいと思うよ」
ミリャが苦笑いしながら頬をかく。
それから、ペンで紙に書いた文字を指す。
「結論から言うと、私はこの意識の一時保存を行っている『緊急保護サーバー』を利用して、現世に戻れないかと考えてるんだ」
そう言って、『現実世界』に線を引く。
「……そんなことができるの？」
ミリャがうなずく。
「『緊急保護サーバー』は、『Ａｌｐｈａ』の管理権と実行している回線防壁の外にありながら、切り離すことのできない保護機能として独立している。つまり、私の意識を『緊急保護サーバー』に移行して……そこから現実世界に意識を戻すってことだね」
「でも、移行するには……」
ミリャがうなずく。
「回線防壁に穴をあける必要があるね。例えば、緊急保護が必要と判断されるなにかを、あえて起こすとか。でも私たちはアルファから例外設定を受けているようだから、回線防壁の影響は受けない。回線防

壁があったら、本体との相互通信による脳の補助を『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』から受けられないからね」
「なるほど……」
「現実世界に戻るための装置は公社が所有してるんだけど、今は外からも中からも接続することができない。だけど、その装置を模倣して防壁のない『緊急保護サーバー』で再現すれば――」
「現実世界に戻れると……」

「イエス」
ミリャがペンをおく。
「『緊急保護サーバー』へのアクセスは『Ｏｍｅｇａ』の脳そのものである『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』を利用する。問題なのは、文字通り自分の身体を実験体にしないといけないのと、前例のない方法ばかりで、なにが起こるのかわからないということ。あとは、以前は司くんのもう一つの意識から『緊急保護サーバー』のアクセスポイントを割り出した訳だけど――。私が『Ｏｍｅｇａ』に帰ってこられたのは、『Ｏｍｅｇａ』の司くんと『緊急保護サーバー』の司くんの繋がりを辿ったからなんだ。それがあの日途絶えてしまったから、恐らく行ったきり戻ってくることができない、一方通行のアクセスになる。……そんなところかな」

ミリャが口を閉じたあとも、司はしばらく、ミリャが描いた概念図を眺めていた。
「なるほど、ね」
ミリャが司をちらりと盗み見る。
「…………」
それからすぐに顔を伏せる。
司がミリャを見つめる。
「それだけ？」
ミリャが首をかしげる。
「……それだけって？」
「他にも隠していることがあるんじゃないかな、と」
「……」
ミリャの視線が彷徨う。
「……むしろ、なにが気になってるの？」
司の目をみて、ミリャがたずねる。
「そもそも、その計画には穴があるんじゃないかな」
すぐにミリャが口を開き、閉口する。
そのままミリャが押し黙る。
「君は、自分の意識を『緊急保護サーバー』へ移動させて現実世界に
戻すといったけど、それには現状問題を[illegible]

戻すといったけど、それには現状問題と矛盾する点がある」

ミリャの体がピクリと跳ねる。

「……アルファやアイが現状維持を図っているだろう理由。君の父親、三国先生もそうだ」

「……………」

司が腕を組む。

「この世界で維持を続けるということは、そうしなきゃいけない理由があるんだ。君はさっき、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』は俺たちにとって脳の電気信号を最適化する補助器具であり、これがなくては意識を自立できないと言っていたよね。つまり、俺たちの今の状態では現実世界へ帰っても、目覚めることができないんじゃないかな？」

「……」

「本来なら計画が終わるまで一年間の猶予があったし、計画自体がこのあとも続いていくなら、もう一度行うチャンスもあった。だけど、問題が起きたことによって計画の中止という可能性が出てきた。つまり、もう再挑戦の機会はない。今問題を解決しては救済の手段を失うから、現状維持を続けようとしている」

ミリャが顔を伏せ、視線を逸らす。

「……そうだね」

ミリャが黙り込む。

二人の沈黙が、微かに届く波の音を際立たせる。
「司くんの場合……それだけじゃない。君の眠った意識は、今ここにいる君と分離している。通常、一つの意識が現実へ戻るのに対して、司くんの意識はそれぞれが自我を持ってしまっている。そんな君が、現実世界へ戻ろうとしたとき……どうなるのかわからない」
「………」
俯いたミリャを司が見つめる。
それから苦笑を浮かべる。
「なんだ、そんなことか」
その声にミリャがピクリと体を跳ねさせ、ゆっくり顔を上げる。
ミリャの顔を見つめて、司が微笑む。
「その可能性については、俺も考えついていたよ。そういう意味では、ミリャのほうがよっぽど重いと俺は思う」
ミリャが司をじっと見つめる。
「人が恐れるのは、なにかを失う未来じゃないかな。俺は君の言う通り、司の一部であり、記憶もない。失うものなんてなにもないんだよ」
ミリャの表情が哀しげに歪む。
「こういうとネガティブに聞こえるかもしれないけど……俺は君に目

的を与えられて嬉しかったんだよ、ミリャ。俺に生まれながらにして、人の役に立つための目的を、渇望していた気がする」

「……」

「初めはよかった。けど、個々人の能力が求められるようになってきてから明確な差を感じ始めて、今では空っぽな自分に気づいた。そして、この計画に起きた問題は、俺を救おうとする想いが一端にあると知って、役に立つどころか問題の根源になっていたとわかった」

司が困ったような、寂しげな微笑みを浮かべる。

「なぜ、俺は生まれたのだろうと……そう思わないかい？」

「……………………」

目を閉じた司が続ける。

「ミリャが俺のそんな思いを察して、気を遣っていたことは気づいている。……君は強い。覚悟が違う」

司の目が薄く開く。

「ミリャがお父さんに真実を話さない理由だってそうだ。俺がアルファと目的を違えるように、ミリャと三国先生の目的が相反するからだろう」

ミリャが目を伏せて、顔を歪ませる。

「確かに、アルファの読みは正しい。真実を知った今、手段があれば俺は自らを犠牲にする選択をするだろうね」

ミリャが目を伏せる。
そのミリャを、司がじっと見つめる。
「今の君のように」
「……」
顔をあげたミリャが司を見つめる。
司の唇がかすかに震えていた。
「俺は、自分で考えて選択なんてしていなかった。すべて君に背中を押してもらった結果だ」
司が目を閉じる。
「満たされた気分だった……誰かの役に立てるという実感が……俺の中の虚無感を埋めてくれた。ミリャの目的が、俺が今生きる理由なんだ」
まくし立てるように、司が話す。
すぐに口を開き、なにかを言いかけ、ゆっくりと閉じる。
再び静寂が訪れ、二人の耳に波の音が届いた。
俯いて黙り込むミリャから、司が視線を逸らす。
「生まれつき病弱で、未来の無かった私を、諦めなかった人たちがいた」
ぽつりとミリャが呟いた。

司がミリャに顔を向ける。
「私自身も病気に向き合うことを誓ったけど、解決方法は得られないままで、お互いに消耗するだけだった。私が努力して頑張る姿を見せれば、相対的に人々を悲しませるだけの結果しか生まれなくて。そのうち、私は未来を受け入れるようになった」
表情をまったく変えずに、ミリャは俯いたまま呟く。
「私の終わりが近づいてくるにつれて、お父さんをようやく解放できるんだって、安心するようになった。ずっと周りに助けられ続けるばかりで、足枷にしかならない自分の——。お父さんの夢を捻じ曲げて、研究内容まで変えてしまった私の人生を、ようやく終えられるんだって」
「…………」
司が目を伏せる。
「……思ったよ、私も。どうして私は生まれたんだろうって」
ミリャが目を瞑る。
「それでも、私は再び目覚めた」
目を開き、ミリャが顔を上げる。
「きっと、同じことを私のお父さんも思っていたんだと思う」
司が視線をミリャに向ける。

「こんな運命は間違っていると」
司の目が見開かれる。
「私に施されたこの人工の脳は、私になにかを変える力を与え、機会も与えてくれた。だから私は、最後まで足掻くよ。本気で今を変えたいと願った人たちの想いを、今度は私が守りたいから」
「…………。…………」
司が目を細める。
「……そう。……そうか」
唇を噛み、胸に手を当て、ぎゅっと服を掴む。
「……同じ境遇であっても、こんなにも見えている景色が違うのか」
司が自嘲する。
「……なにが言いたかったんだろうな……俺は。君に、なにを言わせたかったんだろう」
司の瞳から涙がこぼれて頬をつたった。
「結局、弱いままだ」
ミリャが悲しげに司を見つめる。
「……………」
ミリャが立ち上がり、司のそばに立つ。
手を伸ばして、そっと司を抱きしめる。
「[illegible]

「強さは、過去があってのものだよ」
そう呟いて、ミリャが眉を下げながら微笑む。
「自分に欠落があると知りながら虚勢を張り続ける君を、私は強いと知っている。空っぽなのが怖いのは当然だよ。司くんは私と違って記憶もない。そんな君が居場所と目的を求めるのは当然だ」
ミリャが目を閉じる。
「私の境遇が君の支えになってくれるのであれば、私は司くんのそばにいるよ。……ただ、司くんにも願いを見つけてほしい。君が……君であるために」
「……………」
ミリャが穏やかに微笑む。
「言っておくけど、私だって強がりで……本当の目的は問題を解決した先にあるんだからね」
「……解決した先……」
ミリャがうなずく。
それから、司の背中をあやすように優しく叩く。
「ほら、元気だして。司くんがそんな調子だと、私も困っちゃうよ」
「……………」
司がゆっくりと顔を上げる。
「……そっか……俺は……。……司は……。強くなりたかったの

か……」
　そう呟いて、ミリャをゆっくり見上げ、薄い微笑みを浮かべた。
「こんなに恥ずかしい記憶が残るのなら、消してしまいたいというのもわかる気がする」
　ミリャが目を丸くする。
「それでも、他の皆は覚えているからね」
　微笑んだミリャが言った。
「……そうだよね」
　司が微笑んだまま目を閉じて、ミリャに寄りかかるように身を預ける。
「ミリャ、ありがとう」
　そう呟いた司が、もう一度ミリャを見上げる。
「ん？」
　ミリャが首をかしげて司を見下ろす。
「なにも覚えていないからこそなんだろうけど……」
　司が悲しげに微笑む。
「『俺』自身は確かに、君のことが――」
　部屋の扉の鍵が開く音が響く。
　音のしたほうを、二人が同時に振り返る。

カチャリと音を立てて扉が開く。

司が目を見開く。

「あ……」

「ただいま――っ」

廊下から日向子の声が聞こえ、司とミリャが顔を見合わせる。

「あっ……どうしよ……」

わたわたと慌てるミリャ越しに、司がベッドの下の隙間を見つける。

急いで立ち上がろうとした司が足をすべらせる。

「……！」

バランスを崩した司が、ミリャに覆いかぶさるように倒れる。

「……っ」

「うそっ……！」

どさりと大きな音が鳴る。

「えっ、なに、今の音っ」

日向子が駆け込んでくる。

「ミリャちゃん、だいじょう――。ぶ……？」

扉を開けた日向子の目に、ミリャを押し倒す司の姿が映る。

「……。……へ？」

呆然と口を開ける日向子に、司とミリャが顔を向ける。

それから、司がバッとミリャから離れる。
「あ……えっと……その……。……お邪魔しています」
重たい沈黙が部屋に包みこんだ。
しばらくして、日向子の口がわなわなと震え出す。
「あっ、あっ。す、すみません。お邪魔しました」
ペコリとお辞儀して、日向子が扉を閉める。
「ま、待って、箒木さん！　違うんだ、これは！」
閉ざされた扉に向かって、司が叫ぶ。
「その……色々あって少しだけお邪魔してたんだけど箒木さんが帰ってきたからあわてて……それで倒れたというか！　そう、事故みたいな！」
ミリャがチラリと司を見る。
司が視線から逃げるように目を逸らす。
「……そうなの？」
扉の向こうから、日向子の小さな声が聞こえた。
司は姿の見えない日向子に、うんうんとうなずく。
「そうなんだ」
「私、お邪魔じゃない……？」
「いやいやっ、ここ、箒木さんの部屋だからっ。ってかごめん、俺が

出ていくよ」
　そう言って、司が鞄を持って立ち上がる。
　机の上のミリャのメモを手に取り、ポケットにしまう。
　立ち上がった司がミリャを見下ろす。
　ミリャは頬に汗をかきながらうなずいた。
「司が扉を開けると、日向子が手をもじもじさせながら立っていた。
「あっあっ。こんにちは」
「う、うん。こんにちは」
　日向子の横を通り、司が玄関に向かう。
「そしてさようなら」
「さ、さようなら」
　下駄箱から靴を取り出し、司がペコペコと何度もお辞儀する。
　同じく、日向子もペコペコお辞儀を返した。
「それじゃ……」
　扉を閉める間際、日向子の後ろからミリャが司を見つめているのが見えた。
「……」
　扉が、無機質な音を立てて閉まった。

・・・

二段ベッドの下段で、丸くなった司が横になっている。

「……」

理人はテレビゲームに夢中になっている。

司が仰向けになり、両目を覆うように、腕を乗せる。

その腕を額にずらし、目を細める。

「……なにしてんだろ……俺」

大きくため息をつき、目を瞑る。

「……だめだな、俺は……」

理人のコントローラーを操作する音が際立つ。

その音にしばらく耳をかたむけてから、理人の後ろ姿に目を向ける。

「なあ……ヴァルトレイク・フューラーさん」

理人がピクリと反応する。

「なんだい急に」

背中を向けたまま理人がコントローラーの操作を続ける。

「てか、その名前、よく覚えてたね」

　そう言って理人が振り返る。
「……。あれほどインパクトある自己紹介はなかなかないからね」
　理人が肩をすくめる。
「ももちゃんが有名な研究者だよ？　彼女の自己紹介のあとならなにを言っても許されるかなって。んで、どした。もしかしてうるさくて眠れなかった？」
「ああ、いや。なんでそんな名前なのか、前から気になってて。聞こう聞こうと思ってたんだけど、いつの間にか忘れてて。今ふと思い出したから忘れる前に聞いちゃおうって思った」
　理人が口を開けて、呆然と司を眺める。
「……いいけど、話し長くなるよ？」
「じゃあいいや」
「いいのかよ!!」
　理人がコントローラーをおき、振り返る。
「もうすでに、どこから話そうかと僕の中で武勇伝プレゼンテーションが構築され始めてるんだから、聞いてよ！」
「今眠いから今度じっくり聞くよ……」
「ええーーーーーーー」
「じゃあ三行で……」
　理人が不服げな表情を浮かべる。

理人が詳しい[illegible]素性を消[illegible]く[illegible]

「僕の武勇伝が三行で収まるはずないだろ……」

そう言って大きくため息をつく。

「どちらもとあるネットゲームに因んで付けた、架空人物の名前だよ。ヴァルトレイクは塩湖に刺さった名もなき魔剣の通称名。これには良くも悪くも、色々と思い出があってね。フューラーはドイツ語でリーダーって意味。僕がチームリーダーを預けられたときに付けた」

司が目を見開く。

「本当に三行でまとまったな」

「今の三行で一本物語掛けるよ、僕」

「おやすみ」

司が理人に背を向ける。

「…………」

司が目の前の壁をぼんやりと眺める。

「…………」

しばらくそうしてから、司は目を閉じた。

「……気のせいか」

——翌日。
廊下に出た日向子が玄関鍵を閉める。
それを、ミリャが見つめている。
「いこっか」
振り返った日向子が言い、ミリャがうなずく。
二人が廊下を進むと、他の部屋の扉からも人がでてくる。
日向子が軽く会釈をして、そのままロビーに出る。
「！」
日向子が、ロビーの中央の椅子に座る司の姿に気がつく。
司が顔をあげ、日向子のほうを見た。
「お、おはよう。新田くん」
ミリャが司のほうを見て目を見開く。
司とミリャの目が合い、ミリャはすぐに視線を逸らした。
司がその様子を見つめてから、日向子に視線を移す。
「ああ、おはよう。箒木さん」
鞄を持って司が立ち上がる。
「その……誰か待ってるの？」
「えっと……。理人を待っててね」
「……あ、そうなんだ」
「うん。じゃあ、またね」

くんじゃあ　ミカ」
司が片手を上げる。
「あ、うん。またね」
日向子が手を振る。
ミリャは視線を合わせずに軽く会釈する。
二人の後ろ姿を、司がぼんやり見つめた。

生徒の群れに混ざって、日向子とミリャが学園に向かって歩く。
日向子が片手で顔を覆う。
「あああぁぁぁ…………」
細長い悲鳴を上げる日向子をミリャが見上げる。
「……あれって、絶対私たちのこと待ってたよね……。絶対白々しかったよね……バレてるよね……ぁぁああ……。私、冷たい女だ……」
落ち込む日向子を、ミリャが困ったように見上げる。
日向子の背中をポンポンと優しく叩く。
「あとで謝ろう……でもどうやって……いやだってあれは事故だし……新田くんもそう言ってたし……。だよね？」

そう言ってバッと、ミリャを振り向く。
ミリャが固まる。
それから、こくこくとうなずく。
「うん……そうだよ。あっちから声を掛けづらいもんね……それなのに待っててくれたんだから……」
日向子が前を向き、顔を上げる。
「うん、謝ろうっ」
日向子とミリャの周囲の人々が、一様に同じ方に向いている。
「ん？」
日向子も視線を向ける。
「ふむ、大丈夫ですね」
ももが桜の木に向けたタブレットを引き寄せ、画面をタッチする。
理人がそれを覗きこみ、腕を組む。
「自動デバッグツールが優秀すぎるね～」
「この手の物はどんどん自動化していくでしょうねえ」
片手を腰にあて、ももがタブレットを見下ろす。
そこに日向子とミリャが近づいていく。
「おはよー。二人とも何してるの？」
その声にももと理人が振り返る。
「おっはー。ちょっとこんどゲームのテス、プレイをね

おっはー。ちょっとしたゲームのテストプレイをね」
ももがミリャと日向子を交互に見つめる。
「おはよう、ございます」
日向子が、戸惑っているももを見て首をかしげる。
「……………」
ミリャがじっとももを見つめる。
「あっ、作業は今終わったところなので、一緒に学園へ向かいましょうっ」
ぎこちない微笑みを浮かべて、ミリャの視線から逃げるようにももが理人を振り返る。
背負った鞄を前にして、タブレットをしまう。
日向子がその様子を見つめてから、ハッとして理人に歩みよる。
「あ、理人くん。さっき新田くんとロビーで会ったんだけど……。その……理人くんのこと待ってたりしたんじゃ……」
「え？」
理人が日向子に顔を向ける。
「僕もロビーで司と会ったけど、先に行っててほしいって言われたよん」
「ですよね……」
日向子ががくりとうなだれる。

「？」
理人が不思議そうに日向子を見つめる。
日向子がその視線を受けて苦笑する。
「あはは……」
ももはミリャをじっと見つめていた。
ミリャがその視線に気付き、ももを見つめる。
お互いの視線が合う。
「……」
ミリャがももの視線から逃げるように目を逸らした。

タブレットを持った生徒たちが教室から移動していく。
その流れを司と理人ともも、ミリャの四人が見送る。
「じゃあ、僕たちも適当に」
司がうなずく。
それぞれが自分の鞄を持ち、移動の準備を始める。
ミリャが司を見つめ、その視線に気付いた司がミリャに顔を向ける。
ミリャがその視線から逃げるように、教室を出ていく。

ミリャがその視線から逃げるように、教室を出ていく。

「……」

理人もミリャのあとに続いて去っていく。

ももを見下ろすと、ミリャの後ろ姿を見つめている。

「ももちゃん、ちょっといいかな」

「へ？」

ももが司を見上げて首をかしげた。

司とももが移動し、人気のない空き教室へに入って行く。

司が教室の中央まで進み、ももを振り返る。

「さて」

ももが黒板に向けていた視線を、司へ移す。

「……。呼んでおいてなんだけど、実はまだ話がついてないんだ」

ももが目を伏せる。

「そうですか……」

司が首をぽりぽりと指でかく。

「申し訳ないんだけど、もう少しだけ待ってもらえないかな」

「そ、それはもちろんです」

司を見上げたももが、大きな声で言い、また俯いて手慰みをする。

「その……ミリャには、話したんですか？」

司がうなずく。

「うん……平日だと、あまり話せる時間も多くなくてね。二人きりになるのも結構難しいから、なかなかね」
司が困った様に苦笑する。
ももが顔を上げて目を見開く。
「……ミリャ、本当に話せるんですね……」
「え？」
「あ、うん。話せるよ」
司が頬をかく。
ももが深いため息をつく。
「司はずるいです」
「え、なんで？」
「ミリャとお話しできて！」
そう言ってももが頬を膨らませる。
「こそこそこそこそなにをしているかと思えば、そ一ゆ一ことですか……」
腕を組み、ぷいっとそっぽを向く。
「ああ、いや……。……彼女も、みんなと話したいと思っているよ」
「……じゃあなんで、司だけ……」
司が困ったように微笑む。
「[illegible]

「それも、きっと説明できると思うから。だから、もう少しね」
　ももが両手を腰に当て、司の顔を覗き込む。
「もう、わかってますよう。でも、今朝のミリャとのあの距離のおき方はかえって目立ってよくないと思いますよ」
「ん……ああ……。あれって、やっぱり俺避けられてるのかな？」
「へ？　そういう口裏合わせじゃないんですか？」
「少なくとも、今朝のは違うかな」
「はぁ……。では、どうして？」
　司が視線を逸らす。
「それが……俺もわからないんだよね」
「はぁ……」
「そうか……、やっぱり避けられてるか……」
　そう呟いて、司がため息をつく。
「なにか心当たりはないんですか？」
　司が口元に手を当てる。
「あるにはあるんだけど……。俺が思うに、それがある前から少し様子がおかしかったというか。なにか隠してるのかもと思ったけど……違ったしな……」
　独り言のようにつぶやく。
　ももが呆然としながら司を見上げる。

しばらくそうしてからハッと息を飲む。
「も、もしかして」
司がももを振り向く。
「ら、らららら……」
「ラブホテル？」
ももがぐっと牙をむく。
「ばっ！　違いますよ!!　ホテルは余計です!!　司に……ら、ラブ的なやつなんじゃないですかって言おうとしたんです！」
司がクスクスと笑う。
「なにもラブでそんなにきょどらなくても」
それから薄く微笑む。
「まあでも、それはないよ」
ももは顔を赤らめながら、不審げな目を司に向ける。
「言い切りますね」
「うん」
司が顔を上に向けて目を細める。
「彼女、そういうの、全部捨てる覚悟でやってるからさ」

司が図書館の入り口を跨ぐ。
それから周囲を見渡し、個室の並んだスペースに移動する。
窓から中を一つ一つ覗いていく。
「！」
司が立ち止まる。
覗き込んだ個室内のテーブルで、日向子と流花とミリャが作業を進めていた。
「……………」
司が顔を引き、小さくため息をつく。
いったんその場をあとにし、少し離れた、人のいない少年誌のコーナーへ足を向ける。
司がマンガを見ながら歩く。
本棚の前に立ち、ぽっかりと空いたスペースを見上げる。
「……」
タブレットを取り出し、親指で画面を操作する。
画面には『親愛なるあなたへ』『貸し出し中』の文字。
『貸出先』『二上ユウ』
「二上……ユウ。ユウ……」
司が目を細める。

『著者：早乙女はづき』

「……」

司が目を瞑り、しばらくその場に立ち尽くす。

「あ、新田くん」

本棚のコーナーを通り過ぎようとした日向子が、司に声をかける。

司が顔を上げる。

「ん、箒木さん？」

司が日向子を振り返る。

「よかった、まだ残ってたんだね」

司が首をかしげる。

「あ、実はさっき、新田くんが覗いてるのが見えて……」

「ああ……」

司が困ったように微笑む。

「……バレてたか」

日向子が苦笑いを浮かべる。

「もしかして、ミリャちゃんに用があったの？」

「いや……」

司が日向子から目を逸らす。

「……ここに用があったから、ついでに覗いてみただけだよ」

「……そ、そうなんだ」
「うん」
沈黙を誤魔化すように、日向子が言葉を探す。
「あっ、なにか、漫画を探してたのかな？」
「ん……えっと」
司が手元のタブレットを起動する。
「これ、『親愛なるあなたへ』って漫画、まだ貸出中か確認したくて」
そう言って日向子に画面を見せる。
「あ、これ知ってるよ」
司が目を丸くして顔を上げる。
「え、そうなの？」
日向子がうなずく。
「私もこの漫画好きでね。そう言えばずっと最新刊でてないなあ」
日向子が本棚を眺める。
「私も家にならあるから、取りに帰れれば貸せたんだけど……」
「ああ、いいんだ。俺も読んだことはあってね」
「そうなの？」
日向子が司に顔を向ける。
司がうなずく。

「なんなら部屋にあるよ」
「ほええ。あ、そういえば」
日向子がポンと、てのひらを拳でたたく。
「いつか新田くん言ってたよね、新田くんも昔は学級委員長をやっていて、男の子を助けた勇気ある女の子が同じクラスにいたって。よく考えたら、この漫画の状況と同じだなって……。あ、いや、ふと思っただけなんだけど……」
「……………。そうだね、本当に、まさにこの漫画みたいな感じだった」
司がタブレットの画面を眺める。
「憧れていたんだろうね、どんどんと変化していく主人公の姿に」
「ああ一わかるかも、それ」
日向子が納得したように何度かうなずく。
それから司のおろした手に持たれている本に視線を向ける。
「ちなみに、その本は？」
「ああ」
司が手に持っていた本を掲げる。
「これは、夏目漱石の『草枕』だよ」
「ほえ一……どうしてまた？」

「まあ、ちょっとね」
司がかすかに微笑む。
「篝木さん、昨日は勝手にお邪魔しちゃってごめんね」
「あああっ、いやいやっ！　部屋にはミリャちゃんが招いたんだろうし、事故だってわかってるよ！」
「あ……うん」
苦笑いを浮かべた司がうなずく。
「むしろ、ごめんね。私も変にてんぱっちゃって……」
「でも、本当にいつもありがとうね」
前を向いた日向子が手慰みする。
「ん？」
司が首をかしげる。
「ミリャちゃん、クラスには復帰したけど……やっぱりちょっと浮いちゃってるところもあるし。選択授業もミリャちゃんとは別れちゃったから、ちゃんとやれてるか不安だったんだ。同じ選択授業を選ぶことも考えたんだけど、そんな理由で選んだら彼女に怒られちゃうだろうし……」
日向子が手慰みを止めて、穏やかに微笑む。
「……うん……彼女が元気そうな姿が一番嬉しいから……やっぱり笑っていてほしいんだ、あの子には」

顔を上げた日向子が司を見つめる。
「ミリャちゃんにとって、新田くんの存在は大きな助けになっていると思う。だから、ありがとうね」
そう言って日向子が司に微笑みかける。
「…………」
日向子が微笑んだまま俯き、その表情に陰りが混ざる。
そして、小さくため息をついた。
「実は、最近ちょっと落ち込んでて……。……計画が始まってから頑張ってきたつもりだったんだけど、彼女に対して私ができることはなにもないんだって気づいて。……みんなすごいよね……年もそんなに変わらないのに、こんなに違うんだなーって……。無力感というか……寂しさというか……。……嫉妬……なのかなぁ……」
日向子が今度は大きなため息をつき、ハッと司を見上げる。
「あーっ、ごめん！　忘れててっ」
そう言って苦笑いを浮かべる。
「ああ、もう……よくないなぁ……」
「……」
司が日向子の横顔を見下ろす。
「箒木さんは、本当にミリャちゃんを大切に思ってるんだね」

日向子がチラリと司を見あげる。
それから前を向いてうなずいた。
「私にとって、あの子は家族みたいなもので……。…………」
司がうなずく。
「うん……なんとなく……わかる気がする」
日向子が目を見開いて司を見上げる。
「…………」
しばらく司の横顔を見つめてから、日向子が前屈みになり、司を上目遣いに覗き込む。
「新田くん。立ち話もなんだし、中庭のテーブル席に行かない？」
「……」
司が日向子を見下ろし、微笑んでうなずいた。
「うん、行こうか」
桜の舞い散る中庭のテーブルに、司と日向子が向き合って座る。
「私、昔はすごい病弱だったんだよね」
目を細めた日向子が、ポツリと呟いた。
「高校に入るまではほとんど病院で過ごしてて、義務教育の出席日数を満たすだけで精いっぱいで。そんなだから、当然友達もいなくて」

日向子が苦笑いを浮かべる。

「そんな入院続きだった時に出会ったのが紗希ちゃんだった。紗希ちゃんは、私の手を引いて外に連れ出してくれた」

「…………」

司が日向子の伏せた目を見つめる。

「うちは両親が仲が悪くて、紗希ちゃんと出会ってからしばらくして離婚することになったんだ。子供だった私にとっての居場所は、紗希ちゃんがいる病院の中だけだったのに、私を連れて遠くに引っ越そうとする親に、私は言葉を返せなかった。でも、紗希ちゃんが私を守ってくれたの。彼女はそれからずっと私のそばにいてくれて、いつも一緒だった。両親がなにを思ったのかはわからないけど、それから両親はこなくなって、かわりに祖母がくるようになったの。それが、私の今の帰る家になってるんだ」

日向子が桜を見上げる。

「当時の私にとって、紗希ちゃんは絶対の存在だった。でも、私が成長して病状が良くなっていく中、紗希ちゃんはどんどん弱っていって。変わらなかったのは紗希ちゃんの笑顔だけ」

日向子が司に顔を向けて、悲しげに微笑む。

「私が高校に編入することと、紗希ちゃんの転院が、同じ時期に決

まって……。なかなか会えなくなってしまうからって、手紙を交換し合う約束をしたの。それから私は高校が始まって、最初は少し、期待もしていた。これまで、まともに学校に通えることなんてなかったから。だけど私は……、周囲に馴染めなかった。結局、私には紗希ちゃんだけしかいなかった」
司がじっと日向子を見つめる。
「それから、どうなったの？」
日向子が少し顔を上げて、遠くをぼんやり見つめる。
「……紗希ちゃんとは一度も会えなかった。何度手紙を送っても返ってくることはなくて、紗希ちゃんの行き先もわからなかった。誰に聞いても教えてくれなかった」
「……それで……」
日向子がうなずく。
「それから、私は生きることに執着した。一人でちゃんと生きていけるように、せめて他人に迷惑をかけないようにって、ひたすら勉強して、バイトをたくさん掛け持ちして、なんとか会社にも就職できた。それでようやく、私は社会に認められた気がした。だけど、社会はそんなに甘いところではなくて」
日向子の視線の先で、桜の花びらが散る。
「就職そのものが目的になってしまっていた私は、その先になにかを

就職そのものが目的になってしまっていた私は、その先になにかを見出すことができなかった。目的に到達して、私はようやく気付いたの。今まで、償いのためにいきていたんだって。紗希ちゃんには夢があったのに、私にはなにもなかった。だからせめて、彼女にしっかりと顔向けできるように、応援してくれた人に、胸を張って『頑張ったよ』と言えるように。就職することで、そうなればいいと思っていた――」

視線をゆっくりおろして、日向子が司を見つめて、寂しげに微笑む。

「私はそうやってずっと、強くて優しいあの子に依存していたんだろうね」

手を振りながら去っていく日向子の後ろ姿を司が見送る。

互いに見えなくなるまで、日向子は何度も振り返り、目が合っては手を振る。

司もそれに手を振り返す。

日向子の姿が見えなくなると、司は挙げていた手をゆっくりおろした。

微かに風が吹き、司の髪が揺れる。
「司くん」
司が振り返ると、ミリャがぽつんと立っていた。
「……」
司が目を伏せる。
「ミリャ、箒木さんと昔からの友人だったんだね」
「……」
ミリャが小さくうなずく。
「……」
顔を上げたミリャが、舞い散る桜を見つめる。
「私が助からないかもしれないって考えると……日向子に話しかけることができないんだ」
風が舞い上がらせた花びらが、ひらひらと空を漂う。
「……」
ミリャが司に視線を向ける。
「司くん、もものことなんだけど、私に任せてもらえないかな」
司が、ミリャのまっすぐな視線を見つめ返す。
「計画に起きた問題の解決は私に任せてもらって、司くんには自分の目的を探してほしいんだ。言い換えれば、君の思考から、今起きている問題について切り離すべきだと、私は思う

る問題についてのことは切り離すべきだと、私は思う」
ゆっくり顔を伏せた司が、わずかに開いていた口を閉じる。
「……そうだね。それがいいかもしれない」
司がミリャを見下ろす。
「ミリャには、迷惑ばかりかけるね」
ミリャが首を振る。
「なに言ってるのさ。もともと私が一方的にお願いしたことで、助けられているのは私のほうだよ」
ミリャ、司を見つめる。
「だからありがとうね、司くん」
ミリャが司を見上げて微笑む。
「…………」
司もミリャに、小さな微笑みを返した。
それから制服の内ポケットに手を入れ、折りたたまれたノートの切れ端を取り出す。
それを開いて、ミリャの字で書かれたこの世界の概略図を眺めたあと、また折りたたんでミリャに差し出す。
「ももちゃんに、よろしく頼むよ」
ミリャがうなずく。
「任せて」

ミリャがノートの切れ端を受け取る。
二人の手が触れ合う。
「……」
「……」
手と手がゆっくり離れ、二人が見つめ合う。
「それじゃ。またね、ミリャ」
二人の髪が風に揺られる。
「うん。またね、司くん」

・　・　・

授業が終わった教室で、ももが鞄にノートパソコンをしまう。
「ん？」
ももが鞄の中に手を入れ、小さな紙片を取り出す。
『明日　６月６日　放課後　桜公園』
「……」
目を見開いてから、その紙片をカーディガンのポケットへ突っ込み、

も。
蓋を閉じてから鞄を背負いくるりと踵を返すと、鞄についたケルベロスのストラップが揺れた。

ももが桜の並木道を一人で歩いていく。
顔を上げて、木漏れ日を見つめる。
円状になった並木道へ入ったところで、その中央に目を向ける。
公園の中心にたつ桜の木。
その幹に寄りかかるようにミリャが座っている。
「……」
ミリャのいるもとに、ももがゆっくり歩いていく。
ももに気づいたミリャが顔を上げる。
二人の視線が交わる。
ももがミリャの前で立ち止まると、ミリャが立ち上がる。
「…………」
「…………」
しばらく無言のまま見つめ合ったあと、ミリャが瞬きをして口を開く。

「こんにちは、もも」
ももが口を開けたままミリャを見つめる。
「……へっ？　あっ」
ももがペコリとお辞儀する。
「こんにちはっ」
その勢いで、もものツインテールが振り下ろされ、ミリャの頬を叩く。
「いたっ」
「あわっ、すみませんっ。うちのツインテールがっ」
「いえいえ」
会話が途切れる。
呆然とミリャを見つめるももに、ミリャが微笑みかける。
「……驚いた？」
ももが深くうなずく。
「……それは、もう。驚きますよ」
「それはなにより」
クスリと笑ったミリャが、両手を後ろにまわす。
「改めまして、三国紗希です」
「通称、ミリャ・Ｂ・ホラトリア。よろしくね、もも」

終日のトロイメント

光。
明るい視界。
外から差し込んだ陽が、窓を通り辺りを照らす。
中央玉座の前に二つの影。
フードを被った人物が、地に倒れ伏した女性を見下ろしている。
その様子を少し離れた場所から見つめる白髪の少女。
「……いつも思うよ」
少女の凜とした声が響く。
「□□□が役目を終えて、いつか世界から□□がなくなったとしても」
そう言って、白髪の少女を振り返る。
「人が人である限り、戦争は形を変えて永遠になくならないんじゃないかって」
白髪の少女がフードを被った人物を見つめる。
沈黙が続き、空気が張りつめる。
やがて、フードを被った人物が白髪の少女のほうに歩き始める。

「この身に、□□□の人格が代替するたび」
「わたしは、人が変わりようのない存在だと思い知らされる」
フードを被った人物が白髪の少女の横を通り過ぎる。
白髪の少女が振り返り、その動きに合わせてサイドテールが揺れる。
少女は去っていく背中を見つめていた。
入口の前で、フードを被った人物が立ち止まる。
「きみはどう思う？」
わずかに振り返り、白髪の少女に横顔を向ける。
「わたしという□□がこの世界からなくなった時」
「人は次に、なにを敵と定めるだろうね」

・　・　・

教員たちがそれぞれのデスクに向かって作業を進めている。
職員室の隅にある会議スペースで、司と伊砂がテーブルを挟んで向き合っていた。

「特別支援学校の成り立ちについて……ですか」
司がうなずく。
「実は、伊砂先生が特別支援学校を立ち上げた一人だと知って、直接お話を伺ってみたいと思っていたんです。可能なら、立ち上げにあたって考えたことや、苦労したこととか――」
司がチラリと、上目遣いに伊砂を見やる。
「どうやってメンバーを集めたとか」
「ふむ……」
目を伏せていた伊砂が司に視線を向ける。
「…………」
司はその視線を見つめ返して、伊砂の言葉を待った。
「……そうですね」
伊砂がテーブルの上で手を組む。
「父の影響もあって、私は昔から社会的な問題について興味があったんです。なぜ、問題は起きるのか……なぜ、社会問題なのか……そんなことを考えているうちに、実際的な結果を出すことが私の目的となっていました。そうして知識を身につけていき、たどり着いた答えの一つが、『問題の核心に迫り、そもそも人々の救済を必要としない環境を築き上げること』だったんです」
司が伊砂を見つめる。

司が伊砂を見つめる。

「最初は、一人一人の意識の変革を求め、社会問題の解決に挑もうとしましたが……それは叶わなかった。なぜなら本質的なところでは、人は変わらない生き物だからです」

芯のある声で、伊砂がきっぱりと言い切った。

「人は生きるため、時代や環境の変化に適応しようとする……表面的に変化しているように見えているだけで、本質的には変わってはいない」

伊砂が司の目を見つめる。

「ある人が、社会問題を解決することで社会に貢献することを目的にし、それを生きがいとしています。その人物が目的を達成しようとする過程に、ある日『環境的な問題』が壁となって立ちはだかる。その人物は、立ちはだかる問題を解決するため『環境に適応』し『変化』を選びますが、本質的な社会問題の解決という目的は変わらない。故に、なにかを変えようとするのなら、『環境を変える』ことで人々の意識に介入し、自身の決断によって『変化』を促す必要があるのです」

口を微かにあけた司が、小さくうなずく。

「……なるほど」

伊砂がうなずく。

「そうした考えのもと、『環境を変える』ため一石を投じたのが、『特別支援学校』であり、『トライメント計画』なんです」
「…………」
　やや目を伏せる伊砂。
「行動の結果、幸いにも意見に共感する声に出会い、少しずつ仲間が増えていきました。正直、『特別支援学校』を実現できたのは結果論です。……初めから目的としていた訳ではなかった。自分自身の行動、出会い……。行動を起こしては失敗し……振り返り、学び、知識を付け新たな計画を立て挑戦する。最大の近道は、考えに考え抜いた準備の果ての地道な挑戦だと、私は考えています」
　司が真剣な眼差しを伊砂に向ける。
　伊砂が司に微笑みかける。
「私の周りには後先考えず行動する人ばかりでしたので、それに比べて私は、考えすぎて踏み出せないばかりでしたけどね。特別支援学校を一緒に立ち上げた『二上金秋』も、そういう人でした」
　司が目を見開いた。
　人気のない教室の窓際に立った三国が外の景色を眺める。

人気のない教室の窓際に立った三国が夕の景色を眺める。
隣の日向子も、三国の視線を追って窓の外に目を向ける。
「トライメント計画は、『新たな時代を正しく切り開き、社会問題を最適化する仕組みを作ること』を目的に掲げていた」
三国が眼前に広がる海を見つめる。
「ことの発端は、今から十年前――。技術的特異点、『シンギュラリティ』が起きたことに始まる」
日向子が三国の横顔を見上げる。
「ニューラルネットの原理を機械が解明した事実は、人類文明に計り知れない変化をもたらすことを示していた。当然、危険すぎるその技術は国によって隠蔽され、国は、手に余る新技術の扱いに頭を悩ませた。一度広がれば世界情勢をひっくり返すような技術だ。法改正も間に合う訳がない。世界中の大国が話し合わなければならない非常事態だった。結果、トライメント計画の礎となる計画案が動き始めることになった」
「……」
三国が教室を振り返り、教壇に向かって歩き出す。
「計画案は多岐に渡ったが、我々が担当したのは新技術の可能性と危険性の解明、一般的な普及におけるメリットとデメリットを想定した、シミュレーション実験だった。そもそも、新技術のなにが問題

だったかという、使用するためのコストが著しく下がり、誰でも使えてしまうことだ。また、これまで現実世界でしか築けなかった生活基盤が、デジタル上で再現可能となってしまった。そうなると、国境さえ完全になくなりかねない」

　教壇に立った三国が、人のいない教室を見渡す。

「実験の検証は瞬く間に進んでいき、とうとう人体実験も視野に入ってきた頃――。実験にあたって国は、より倫理的で安全な体裁を整えるため、世間の支持を得ていた『特別支援学校』を運営する民間企業に協力を要請した。その民間企業が、今の『社会福祉公社LieF』だ」

　三国が振り返り、なにも書かれていない黒板を見上げる。

「公社の目的は、『社会問題を最適化する仕組みを作ること』であり、同時に高度な人工知能技術を独自に開発し、活用していた。そうして最終的に、『新たな時代を正しく切り開き、社会問題を最適化する仕組みを作ること』がトライメント計画の目的となった」

　三国が窓際に立つ日向子に顔を向ける。

「新技術の発展と共に、急激に変化するであろう社会の秩序を保つため、環境を用意し、先見的なシミュレーションを行う。同時に、多額の予算を捻出するため実利のある計画を示した結果、未来ある計画性に多くの支援が行われ、計画は想定をはるかに超える大規模予算案で

決済された」
三国が表情を変えずに言葉を続ける。
「結果、多くの組織によって実現したのが、トライメント計画なんだ」

・・・

亜麻色の髪が風に舞う。
一本の桜の木を背に、ミリャが歩く。
「本気で今を変えたいと願った人たちの想いを……お父さんたちの想いを、私が守る」
凛とした表情のミリャがそう呟いた。
その足が、ゆっくりと止まる。
立ち止まったミリャを風が撫でる。
「…………」
ミリャがゆっくり振り返る。
風が吹き、髪が揺れる。
ミリャの視線の先で、アイが桜の木の下に佇んでいた。

二人の交わる視線の間に、風が流れる。

「……」

アイがゆっくりとまばたきをして、口を開く。

「こんにちは、ミリャ」

陽の差し込む暗がりの部屋に、アイが入っていく。

その背中から、ミリャがアイの行動を見守る。

アイが木箱をソファに寄せてミリャを振り返る。

「どうぞ、座って」

ミリャが頷き、ソファに座る。

ミリャに向き合うように、アイは木箱に腰かけた。

二人の視線が交わる。

「……さて、どこから話したものか……」

困ったように微笑むアイが目を伏せる。

両手を合わせ、指先を付けて離してを繰り返す。

アイの手元を、ミリャがじっと見つめる。

「ああ……そうだ」

指先の動きを止めたアイが顔を上げる。
「お手紙、ありがとう。あれはちゃんと読ませてもらったよ。……ごめんね。ずっと返事ができなくて」
ミリャが首を振る。
「……でも、どうして急に話そうと思ったの？　それも……私だけと」
「……。そうだね……」
そう呟いたアイが目を伏せる。
「ボクが君たちとの接触を避けるようになったのは……ミリャと司が目覚めたあの日、根本的な間違いに気づいたからなんだ」
「根本的な間違い……」
言葉の感触を確かめるようにミリャがつぶやき、アイがうなずく。
「知っての通り、ボクたちには救いたい人がいる。司だけではなく、君も、その他にもいるんだ」
ミリャが目を見張る。
「……そう言えば、アイのお姉さんも私の病気のこと、知っているようだったけど……」
「うん、響子から君のことは聞いていたから。お互いに知らぬ存ぜぬという不干渉関係性だったようだけど、司の母親と君の父親は協力関係にあった。そもそも、トライメント計画を利用して脳の治療法を最

適化するという案は、義貴が教えてくれたものだからね」
「えっ」
　ミリャが目を丸くする。
「……そう、だったんだ……」
　アイがうなずく。
「実は、今回の計画は元々中止になる予定だったんだ。直前のトライメント計画でのできごとが原因だったんだけど……そういう訳で、当時は計画内部でもピリピリしていてね。そんな中で原因追及のために真が声をあげて、響子と義貴が行動をおこして、計画の続行が決まった」
　ミリャがアイをじっと見つめ、次の言葉を待つ。
　アイが両手を組む。
「ボクは……ボク達は、この島で司がくるのをずっと待っていた。再会できたときのことを考えて、色々準備をしていたんだ」
　アイの視線が、窓際におかれたフリージアに向けられる。
「司がこの島にやってきた日……ボクたちは困惑した。想定していた状態より、ずっと不安定な状態だったからだ」
　アイが目を細める。
「ボクたちは司をしばらく観察することにして、すぐに司が記憶喪失

たと気が付いた」

　アイが俯く。

「司がボクのことを覚えていなかったのはショックだったけど……また新しい思い出を作っていければいい。お姉ちゃんも同じ意見だったから、ボクたちは予定通りに動き始めた。徹底した司への支援。司に起こる障害をすべて取り除き、最適な結果へ導くこと。それが、お姉ちゃんがボクに指示した行動指針」

　言葉を切ったアイが自嘲する。

「ボクは当初、司の友人として現れる予定だった。けど、その必要はなくて」

　アイが顔を上げる。

「司は学園でよくやっている。ボクたちが動くまでもなく、彼は新しい人生を歩んでいた」

　アイが無表情のままミリャを見つめる。

「そんなある日、彼が目覚めたんだ」

　ミリャもアイの瞳を見つめ返した。

「……もう一つの、人格……」

　アイがゆっくりとうなずく。

「根本的な間違い。それは司の状態を、ただの記憶喪失だと考えていたこと」

アイがゆっくり首を振る。
「でも、違った。いまの司は——。記憶を持った人格が分離した存在だった。そして、この電脳世界での人格の分離は、それぞれの意思を自立させてしまうことにも気づいた」
アイが唇を噛みしめる。
ミリャがその様子を不安げに見つめる。
「もしかして……元に戻らないとか……？」
アイが首を振る。
「わからない。分離したそれぞれの意識は、人を形成する上で必要な機能を独立して持っている可能性が高い。例えるなら、主要な臓器が分離して、そこからそれぞれ一人の人間を形成しているような状態でね。もし、失った臓器を人の治癒能力で補完生成されると、戻るためのスペースがなくなって、一つの状態に戻れなくなる可能性は十分にある」
「……………」
アイが自分の胸に手を当てる。
「……ボクは司に、今の司のままでいいと告げた。でも司の状態に気付いたあと、ボクは司に、なんて声をかければいいかわからなくなった」

アイが目を閉じて顔を歪ませる。
苦しげなアイをしばらく見つめてから、ミリャが俯く。
薄暗い部屋に、重たい沈黙がたちこめる。
しばらくして、アイがゆっくり口を開く。
「お姉ちゃんが絶対に司に教えたくなかったことがあるんだ」
ミリャが顔を上げ、首をかしげる。
「……ボクにはお姉ちゃんを止めることも、回線防壁を消すようなこともできないけど――」
アイが顔を上げる。
「司にはそれができる」
口を開けたミリャが、呆然とアイを見つめる。
「お姉ちゃんにもしものことがあった場合のために響子は、司に絶対的な管理者権限を持たせた」
アイは言葉を切って、寂しげに微笑む。
「実を言うと、ボクも司には伝えないほうがいいと思ってる。こうしてボクがミリャだけに話をするのも、そういう理由なんだ。このことを今の司が知れば彼は……そういう選択をするでしょ」
「……管理者権限……」
ミリャが顔を伏せる。
「そうだね　司くんなら　そうだろうね」

アイがため息をついて天井を仰ぐ。
「そういうところは、司だなあって思うんだけど……。……でも、それじゃだめなんだ」
アイがゆっくり顔を下に向ける。
「司が助からないからじゃない……今のままだと……」
ミリャがアイを見つめる。
「わかるよ。それじゃ、だめだ」
アイが顔を上げてミリャを見つめる。
「最低でも、私たち以外に救わなくちゃいけない社会がある。そうだよね」
アイが目を丸くして、ゆっくりとうなずく。
「お願い、ミリャ――」
二人が見つめ合う。
アイがゆっくりと口を開く――。

翌日。
司が部屋を出て、扉を閉める。

靴を片手に、廊下に出る。
「よし」
振り返り、先に出ていた理人に並ぶ。
「行こう」
「ん」
二人が連れ立ってロビーに歩いて行く。
「もーっ、二人ともしっかりしてください！この程度の徹夜でだらしないですよっ」
ロビーから聞こえてくる声に、司と理人が顔を見合わせる。
二人がロビーに出ると、流花ともも、ミリャが集っていた。
ミリャが目を瞑ったまま欠伸する。
流花は覇気のない呆れ顔を浮かべていた。
「なんでお前はそんなに元気なんだよ……」
流花がため息をつく。
ミリャは目を瞑ったまま立っている。
「徹夜ってなにしてたの？」
その声にももと流花が振り返る。
理人の隣で司が手を挙げる。
「おはよう」
「ああ、おはよう、二人とも」

理人がひらひらと手を振る。
「あ、おはようございます、司、理人。昨日、日向子さんと流花の資格試験合格を祝って、ちょっとした女子会を開催していたんですよっ」
ももが両手を腰に当てる。
「いいでしょう、羨ましいでしょう！」
「ああ、そっちもやってたんだ」
ドヤ顔を浮かべていたももがキョトンと目を丸くする。
「そっちも？」
理人がうなずき、鞄を肩にかけなおす。
「男子は五十嵐の部屋で飲み会みたいな感じだね。せっかくだから自由学習組もまとめてみんなでみたいな」
「ええ一、飲み会ずるいです一一っ」
流花がももを睨む。
「おい、お前がお酒の匂い嫌だって言うから、あたしと日向子は我慢したんだぞ」
「それはそれ、これはこれ」
ももが司を見上げる。
「って、司もお酒飲むんですか？」

「ん、俺はまだ未成年だからね。飲めないよ」
「ですよね！　司にはコーヒーが似合いますよっ」
「コーヒーかぁ……ブラックは俺にはまだ苦いなあ」
　ももが唇を尖らせる。
「えーっ。香りもいいですし、豆の種類や挽き方によって味わいが変わる奥深い飲み物なんですよ！　ももちゃんがコーヒーの良さを教えてあげるので、司もレッツトライです！」
　司が微笑む。
「まあ、嫌いって訳じゃないからね。挑戦はしてみたいかも」
「おっ、悪くない反応ですね！　じゃあ明日明後日の週末、ももちゃんがコーヒーのすべてを一から百まで……。あたっ」
　ツインテールを引かれたももが振り返る。
　ももの視線の先でミリャがそっぽを向く。
　ももがもう一度司を振り返る。
「研究が終わって時間ができたら一緒に飲みましょうね、司」
　司が苦笑する。
「ああ、楽しみにしてるよ」
　司がももの背後にいるミリャにチラリと視線を送る。
　ミリャはそっぽを向いたままだった。
「そういえば、箏木さんは」

「そういえば[illegible]さんは？」
「あたしたちは寝坊した日向子待ち」
「なる」
「なんで、こっちは気にしないで」
　理人が司に顔を向ける。
「どうする、司」
　司が、ミリャに向けていた視線を理人に移す。
「ん、ああ。まあ、気を遣わせちゃうだろうし、先に行ってようか」

　制服姿の生徒たちが学園側に歩いて行く。
　司と理人もその流れの中にいた。
「来月にもなったら、いよいよ僕らも発表かぁ」
　司は海に向けていた視線を前方に向ける。
「まあ、こっちは理人のおかげでとっくに終わってるから気持ち的には余裕だけどね」
「褒めたってなにも出ないぞ」
　理人がニヤリと微笑んで司に顔を向ける。
「ま、実際うまくいき過ぎて、怖い位だったけどね。専門学生時代に失敗が多かった分、うまくいき過ぎると素直に喜べないないというう

か……。成功する攻略法が確立されていたり、サポートが手厚いと思考しなくなる気がしてね」
「まあ、僕がひねくれているんだろうけど」
理人が前を向きながら淡々と言った。
「…………」
司がチラリと理人の横顔を見て、再び視線を前に向ける。
「そっか、そういうのもあるのか……」
司が目を伏せる。
「……実際、考えれば考えるほど正解がわからない。良いとされていることの裏には悪い部分も必ずあって、その逆も然りだ。バランスが重要なんだろうけど……思った以上に難しいな……」
理人が司に顔を向ける。
「司、最近なにかをつかんだようだね」
司が顔を上げ、理人を振り向く。
「…………」
理人を見つめてから、前を向き直す。
「……どうなんだろう」
理人が微笑む。
「アンテナが張れているっていうかね、今の司にはそういうのを感じる

そ」
　理人が微笑んだまま前を向く。
「いいと思う、今の司」
「…………」
　教壇に立った伊砂が、手元のタブレットに目を向ける。
　顔を上げ、席に着く人々を眺める。
「ホームルームの連絡は以上です。なにか、質問はありますか？」
　教室を見渡し、伊砂が目を伏せる。
「自由学習の発表も来月の頭に行われるので、皆さん、追い込み頑張ってくださいね。それでは、ホームルームを――」
　一人の男性が手を挙げる。
　伊砂の視線がその男性に向けられる。
「あの、質問いいですか」
「どうぞ」
　狩野は手を下げると、隣の席に座る五十嵐に視線を向ける。
　五十嵐がうなずく。
　狩野は少し目を泳がせてから口を開く。

「その……素朴な疑問と言いますか、最近、学園でも話題になっていて気になってるといいますか……」
　伊砂が目を細める。
「もう、６月の下旬なのに、どうして桜がいつまでも咲いているのかなあと」
「……………」
　静寂した空気の中、教室の視線が狩野に集る。
　教室の多くの人たちが、狩野の疑問に同調するように、壇上の伊砂に顔を向ける。
　ももが周囲の様子に目を細めた。
　日向子と流花は、そのももを見つめる。
「……………」
　伊砂が目を瞑り、ゆっくり開く。
「よい質問ですね。皆さんは、この御雲島が常春の島と呼ばれているのをご存知でしょうか」
　何人かの生徒がうなずく。
「東京都の南に位置したこの島は、長崎県の佐世保や高知県の室戸岬と同緯度にあって、九州の鹿児島よりも温暖な気候なんです。実は、この島の性質を利用して、桜の町プロジェクトというものが動いているんですね

そんですね」

伊砂が窓の外の風景を眺める。

「島という特性上、雇用問題や収益に関する問題は避けられない事情です。現在、桜の町プロジェクトは、桜の品種改良を行い、花見の期間をより長く維持して観光の目玉を増やすことを目指しています。同時に、実験費用の収益を得るなどして、プロジェクトを軸に雇用を増やして問題改善に挑戦している結果なんですね」

伊砂が教室を見渡す。

「私も、そろそろ散るころなのではと考えていましたが、まだまだ元気なことに驚いています」

「……なるほど。ありがとうございました」

伊砂が微笑んでうなずいた。

鞄を手に持った生徒が、教室の外に出ていく。

教室に残ってお弁当を広げる人や、タブレットを眺めている者もいた。

司が机の上で鞄を開き、中にタブレットをしまう。

「頼むよ一、女の子がまじ足りてなくって！」

五十嵐の大きな声が教室に響く。

「お誘いは嬉しいんだけど……でも、その……ほら、怒られちゃうと困るし……」

　司が顔をあげて、日向子の声がしたほうを振り向く。

　司の視線の先で、五十嵐と狩野が日向子と流花の席を囲んでいた。

「？」

　五十嵐が後頭部をかく。

「やっぱそこかー」

　五十嵐が狩野に顔を向ける。

「もう例の廃墟でよくね？　立ち入り禁止地区はハードル高いっしょ」

「いや、それだと今回の趣旨からずれるじゃん！」

「そうは言ってもよー。お前はいいけど、男子だけで肝試しとかないわー」

「……まあ、そうなんだけどさ……」

　司がぼんやり、そのやりとりを眺める。

「やってるねえ」

　司が振り返ると、鞄を持った理人が立っていた。

「五十嵐はチャラいからなー。人が集まるかどうか」

　司が再び、五十嵐のほうに顔を向ける

司が再び、五十嵐のほうに顔を向ける。
　五十嵐が両手を合わせて日向子に頭を下げているうしろで、流花と狩野が話し合っている。
「……他の面子を集めるのはわかるけど、肝心の中村さんは捕まったんだろうか」
「まあ、本人が調べたがってるんだし、くるんじゃゃない？」
「俺、五十嵐の計画は成功しないように思えるけど……」
「……相手があの中村さんじゃね……既に計画に気づいていてもおかしくない」
「だなあ……」
　司が鞄を持って立ち上がる。
「学食でいいよね」
「もーまんたい」

　空き教室の机を二つ繋げた席にももとミリャが座る。
　ももは菓子パンを並べ、ミリャはサラダと野菜スティックを広げる。
　ももかメロンパンの封を開けて、もふもふと咀嚼する。

「結局、春が終わらない理由って何なんでしょうね」
ミリャが野菜スティックをかじりながら、チラリとももを見る。
「うーん……」
箸を持ち、グリーンサラダを一口分つまみあげる。
「なんだろうね」
そう言ってサラダを口に含む。
考えるように机を見るミリャ。
「伊砂先生はうまく誤魔化していたけど、立ち入り禁止地区で肝試しするなんて企画も立っているし、学園の空気の変化を感じる」
「……そろそろ公社側から動きがあってもおかしくないですよね」
ミリャがうなずく。
「だから、急がないと……」
ミリャが野菜スティックをかじる。
「ですね」
ももはメロンパンをかじり、缶コーヒーで流し込んでから小さくため息をつく。
「しかし、さすがに購買の菓子パンも飽きてきましたねえ」
「野菜は食べてあげるから、お弁当とか食べればいいじゃない」
「ダメですよ、あれは。もう野菜と中身が交わったあとですから」

「……それ、ほとんどの料理がダメってことになるけど」
「そうなんですよ、世知辛い」
「別に、ご飯くらいみんなと一緒に食べてきてもいいんだよ」
ミリャが、ももの机に並べられた菓子パンを眺める。
もも、もふもふとメロンパンを頬張る。
「だって、ミリャは最近学食に行きたがらないですし」
「ももと二人で食べてたら目立つもん」
「前みたいに司や理人も入れて食べればいいじゃないですか」
野菜スティックをかじったままミリャの動きが止まる。
「……うーん……」
ももが上目遣いにチラリとミリャを見る。
「司と話し辛いんでしょう」
「…………」
ミリャが身を乗り出し、野菜スティックをももの口に近づける。
「ひーーーーーっ！　ごめんなさいごめんなさい！それだけは勘弁をっ」
椅子ごと体を大きく後ろに引いたももが叫んだ。
ミリャが椅子に座りなおす。
「もも、アイや管理者権限のこと、絶対に話しちゃだめだよ」
ももが呆れたようにため息をつく。

「……当り前じゃないですか。ま、こんな状況ですしね」
　そう言って椅子を元の位置に戻し、机におかれたタブレットを見つめる。
　画面内ではいくつかのウィンドウが展開され、トトが目を瞑っている。
「今日の放課後、トトを使って疑似的な接続テストを行います。検証結果に問題がなければ、いよいよ来週末に本番です」
　ミリャがももを見つめる。
　ももが目を伏せる。
「……ですので、ミリャも『準備』をお願いします」
　ミリャがももを見つめたままうなずく。
「わかった」

　四人かけのテーブルを挟んで、司と理人が向き合って座っている。
　それぞれのお盆には空の食器が乗っている。
　理人がコップから一口水を飲みテーブルに戻す。
「まあ……こういう大義名分を掲げてはいるけど、これは社会的な力

を得るための過程として、半分は仕方なくやっていることなんだよ」
理人が顔をあげて、ぼんやりと視線をさまよわせる。
「ただ、その個人個人の『仕方なく選択した』結果の積み重ねが、今の世論を作り上げている」
「ふむ」
「仮に、僕たちが開発しているこのシステムを世に公表したとして、僕らの望んだ形で利用されるとは限らないしね」
理人がコップの縁に指を沿わせる。
「結局、便利なシステムを利用するのは生産者側ではなく、アイデアを持つ人たちだ。生産者は作ることで手一杯だからね。作る手間を省いたとしても、生産者が作り続ける状況には変わりない。そうしないと、生き残れないからね」
「……経営側が新しいシステムを取り入れて余剰時間ができれば、生産者にも還元されないかな」
理人が肩をすくめる。
「されないんだな、これが。経営側は、消費者側の要求に答えるために余った時間を使って更なるクオリティアップを求めるんだよ。なぜなら、そうしないと競争社会で生き残れないと考えるからだ」
司が腕を組んで、片手を口に当てたままうつむく。
「…………」

理人が再び天井を見上げる。

「日本はいったん始めた事業から撤退することは難しい上、品質向上と賃金カットを繰り返しながら、いいものを安く売り続ける。でも現実には新興国との競争で完全に行き詰まっている状態だね。消費者サービスといえば、ひたすら安く多様化して品質管理を徹底する、という発想が根付いている。これは生産者にとっては大きな負担で、消費者は無限にわがままになる。最悪の悪循環だよ」

呆れたように理人がため息をつく。

「なるほどね」

司が口に手を当てたまま目を伏せる。

「……消費者は安くて良いものを求めて、生産者は労働時間を増やして対応する。経営者は会社存続のため有限のアイデアをより大量に消費し続け、国は生産性の上がらないところに投資はできないと」

理人が苦笑する。

「資本主義経済という考え方で言えばそれで正しいんだけど……問題なのは実際には淘汰されていないってことだ」

司が理人に視線を向ける。

「ギリギリで、回し続けてるよね」

理人がうなずく。

「それだけ失業は大きい。業界が限界なら、再雇用先もないわけだしね」
「経営者は負債を抱えているからあとには引けない……と」
「そう、問題の本質はどちらにもない」
司が再び顔を伏せる。
「現状を可能にしてしまう環境か……」
「おもしろそうな話をしているな」
司と理人が振り返る。
二人の視線の先に、お盆を持った流花と日向子が立っていた。
「二人とも、こんにちは」
司と理人も二人に挨拶を返す。
流花がテーブルの上の空になった食器を眺める。
「二人はもう教室に戻る感じ？」
「いや、昼休みの終わりまでゆっくりするつもりだった」
「じゃあ、ご一緒してもいいかな」
司と理人が目を合わせて、席を詰める。
「悪いね」
流花が理人の隣に座る。
「あ……失礼します……」
日向子が頭を下げて、司の隣に座る。

流花と日向子が手を合わせて、いただきます、と声に出して食事を始めた。
「えっ、大舘さん、肝試し参加するの？」
流花が視線だけを理人に向ける。
「まあな」
そう答えてから箸でご飯を口に運ぶ。
「どうしてまた。ああいうのには一番参加しなさそうなイメージなんだけど」
司が流花を見つめる。
流花がゆっくり咀嚼するのを見つめてから、司が隣に視線を移すと、なにかを訴えるような日向子の視線とぶつかった。
「……………」
「第二地区にいるはずの姉のことがずっと気になっていてね」
「ああ……」
納得したように理人が小さくうなずく。
「まあ、噂が噂だからね」

流花がご飯を食べ終え箸をおき、コップから一口水を飲む。
「……立ち入り禁止地区って大げさに噂だってるけど、夏には合同フェスティバルとかで第二地区の学園生と会えるんじゃないっけ」
流花が司に視線を向ける。
「その合同フェスティバルも、中止になるんじゃないかって噂が流れている」
「……そうなの？」
流花がうなずく。
「もともと研究が行われているとは聞いているし、計画の運営方法にも納得はしているが……なにかを隠している様子が気になるんだ」
「……」
「ももを見ていればわかる。あいつはなにかに気づいているようだが、それを隠している。それならいっそのこと、トンネルの先の第二地区へ行って注意されるのもアリかなと。内申書があるわけでもないしな。皆には悪いが、多人数で行動すれば大きな声になるし、運営側ももう少し危機感を持って対応してくれるんじゃないかと思ってね」
「……」
司と日向子が目を合わせる。
しばらくの沈黙のあとで、理人が腕を組んでうなる。
「うーん。それは僕も感じていたことではあるけど　隠してい

るならあまり表だって騒ぎ立てるのは良くないんじゃないかな。大事にするのは簡単だけど、炎上した事態を収拾するのは大変だし、一度騒がれてしまえば0からやり直すこともできないわけだしさ。公社代表の伊砂先生は堅苦しいくらいに倫理観がある人だし、任せてもいいと思うんだよね」

理人が司に顔を向ける。

「な、司」

司がキョトンと目を丸くする。

「あ、ああ……」

うなずいた司が流花を見つめる。

「……その……大舘さんは、先生に直接聞いてみたりした？」

「……………。もちろん聞いたよ。ただ、答えは待ってほしいと」

「……そっか」

流花が苦い表情をうかべる。

その様子を、日向子が心配そうに見つめる。

「いや……理人くんの言うとおりだ。我ながら、浅はかな考えだったかもな……」

流花がため息をつく。

「……まさか、君に諭されるとはね」

そう言って、理人を見やる。
「いやあ、照れるなあ」
軽く微笑んだ理人が言った。
「ま、僕はただ、ももちゃんに賭けてるだけだよ。友人想いの彼女が、一番近しい大館さんのことを無碍にするとは思えないからね」
日向子がすかさず顔を上げる。
「そっ、それは私も思うなっ」
「だね」
司も微笑みを浮かべる。
「……………」
流花が目を丸くしてから、再びため息をつく。
「……あたしの悪い癖だな……」
「いや、お姉さんのこともあるし、仕様がないよ。色々と違和感があることは確かだし、気にするなというほうが無理だと思う」
流花が司を見つめて苦笑いを浮かべ、視線を上に向けて深く息を吸いこんだ。
「……しかし、どうしようかな。もう肝試しは行くって言ってしまったしな……」
「………」
司が流花を見つめる。

司が流花を見つめる。

「……俺も行こうかな、肝試し」

司がつぶやき、日向子と理人が振り向く。

「えっ」「えっ」

司が日向子と理人を交互に見やる。

同じように、流花も二人を見つめた。

「いや、肝試し自体は純粋興味があったというか……。狩野と中村さんをくっつけるっていう五十嵐の目的は応援したいしね」

少し慌てた司が言った。

「あ、あれってそういう趣旨があったんだ……」

「そそ。中村さんが不思議を集めることに夢中なのは周知の事実だけど、五十嵐はそれを利用しようとしてるんだよね。噂の立ち入り禁止地区に肝試し。それを餌に中村さんを誘って、男女ペアになる流れを自然に作って狩野と中村さんを二人きりにする計画らしい。狩野は純に中村さんの調査を手伝いたいだけって言い張ってるけどね」

「なにそれ……！　すごいロマンチック……!!」

流花が口に手を当てて目を細める。

「狩野くんはなかなか試練の多そうな恋をしてしまったな……」

「だね……　そもそも中村さんが恋をする姿が想像できないな……」

「ええ〜っ、私はすごく応援したい！　試練は多いほど乗り越えた先

には深い愛が芽生えると思うんだよね、わたしはっ！」
目を爛々と輝かせながら日向子が言った。
流花と司が同時に苦笑いを浮かべる。
「…………」
理人は一人、視線を上に向けて腕を組んでいる。
司が理人に目を向ける。
「どうした？」
理人がゆっくり顔をおろす。
「いや」
「？」
視線を逸らす理人に、司が首をかしげる。
「そういうことなら私も参加しようかな、肝試し」
「じゃあ、あたしは日向子に任せて降りる」
「ええっ！　なんでぇっ！」
日向子がバッと身を乗り出す。
「いやだってお化けとか怖いし」
「…………」
司と理人が流花に顔を向ける。
「なんで参加したの？」
「いやだから

いやだから……」
「ああ、うん、そうだったね」
日向子はずっと、キラキラした視線を流花に送っていた。
「大舘さん、絶対参加ね」
「……言っておくけど、男女ペアなら日向子とは別になるからな？」
「あ――……」
日向子が頭を抱える。
「まあ、本当にトンネルの奥に行こうとしている人がいたら止めることもできるしね」
「あっ、そうだね」
司がうなずく。
「……そうだな。じゃあ、中村さんが本気だったらあたしが止めるよ。男子はそっちでよろしく」
「うん、そうしよう」
「じゃあ、決まりだねっ」
「…………」
廊下の窓から中庭を見下ろしながら、司が歩く。
綺麗に咲き続ける桜に目を細め、すこし歩を緩める。

「新田くん！」
背後から跳ねた足音が響き、司が振り返る。
日向子が食堂のほうから駆けてきていた。
「どうしたの、箒木さん」
「あ、えっと……」
司の目の前で止まった日向子が息を整える。
それから両手を合わせた。
「その、大舘さんのことなんだけど……」
そう言って、日向子が顔を伏せる。
司が首をかしげる。
「大舘さんがなにか言ってた？」
日向子が首を振る。
「あ、特別なにかを言っていたわけではないんだけどね。その、お昼時に話していたように、大舘さん、ずっと計画への違和感を感じているみたいで……」
日向子が振り返り、周囲を見回す。
人がいないことを確認して、司に顔を寄せる。
「新田くん、立ち入り禁止地区でのこと、覚えているかな」
「……」
つぶやくような問いかけに、司がうなずく……

わずかな間を開けて、司がうなずく。
日向子が目を伏せて手慰みする。
「……第二地区はあんな様子だから……今の大館さんが知ったら、混乱すると思うんだよね」
「……そうだね」
「その……大丈夫だとは思うけど、大館さんが心配で……」
司が日向子を見つめる目を細めた。
「明後日の肝試し、男女ペアでしょ？　……私、理人くんと組むから、新田くんは大館さんと組んでほしいんだ」
「ああ……なるほどね」
司が口元に手を当てる。
「伝えたかったのはそれだけなんだけど……。…………」
「？」
日向子が上目遣いで、司をじっと見つめる。
司は不思議そうにその視線を見つめ返しながら首をかしげた。
「どうしたの？」
「あっ、ううん。なんでもないよっ」
日向子が手慰みをやめ、両手を前で合わせる。
「それじゃ、その……よろしくお願いしますっ」
司が深くうなずく。

「うん、任せて」
視線がぶつかり、二人が微笑み合う。
「じゃあ……私は大館さんのところへ戻るね」
「うん、また」
日向子が手を振りながら食堂のほうに戻っていく。
司がその背中を見送る。
廊下を曲がるところで日向子が振り返り、もう一度手を振る。
司も手を振り返した。
日向子の姿が見えなくなる。
誰もいなくなった廊下を司がじっと見つめる。
「……………」
一人になった司が目を伏せる。
「……ミリャを誘うのは諦めるか……」
呟いて、苦笑する。
「まあ、誘ってもこないだろうけど……」
司が振り返り、その場をあとにする。
[illegible]

教室にキーボードの打鍵音が響く。
ももがノートパソコンに向かってキーボードを叩いていた。
ノートパソコンからは配線が伸び、タブレットに繋がっている。
そのタブレットにミリャが手をおいている。
「……。……」
ももがエンターキーを押す。
「トト、どうですか？　繋がります？」
ミリャの手のひらの下で画面が点滅する。
「……はいっ……もど……す」
ももが画面を見つめながら、片手を口に当てる。
「……」
再び、ももがキーボードを叩き始める。
しばらくしてマウスを動かしてクリックする。
「ミリャ、離していいですよ」
ミリャがピクリと身を跳ねさせ、タブレットから手を離す。
そのまま、自分のてのひらを見つめる。
「ミリャ、調子はどうですか？」
ミリャがももを振り返る。
「うん、大丈夫」
ももがうなずいて息を吐く。

タブレットに視線を移すと、画面が高速で点滅していた。
「ちょっと休憩しましょう」
ミリャがうなずく。
休憩のため、二人は中庭へと移動。
机を囲み、ももとミリャが向かい合って座る。
ミリャが紙パックの野菜ジュースをすすり、ももは缶コーヒーのプルタブを開けて一口飲んだ。
「ミリャ」
ミリャが顔をあげて首をかしげる。
「どうしたの？」
ももはぼーっとミリャを見つめていた。
「……いいえ。やっぱり、なんでもないです」
そう言って缶コーヒーを口に運ぶ。
「？」
ミリャはしばらくももを見つめてから野菜ジュースを飲んだ。
ももが顔をあげてミリャに顔を向ける。
「やっぱり聞いていいですか？」
「ん？」
ミリャが野菜ジュースを机におく。

「いいよ、なにかな」
「えっと……」
ももがコーヒーを机におき、それをじっと見つめる。
チラリとミリャに視線を送ってから口を開く。
「その……ミリャは、司と付き合っているんですか？」
ミリャが表情を変えずに硬直する。
返事を返さないミリャをももが覗き込む。
「ミリャ？」
「え？　あ、ごめん。なんて？」
「ん、ミリャと司は恋人同士なんじゃないんですかって聞いたんです」
「あ一なるほどね」
うんうんとミリャがうなずく。
「って、なんでやねんっ」
ミリャが大きな声をあげた。
「え、違うんですか？」
「違う違う。司くんとは目的を一緒にしていただけで、そういうのじゃないから！」
「あら、そうなんですか」
「いや……まあ、うん」

ミリャか逃げるように顔を背ける。
「まったく、なにを言い出すかと思えば……」
ミリャが大きなため息をつく。
「……」
ももがミリャをじっと見つめる。
そのあとで視線を上に向け、小さく息をつく。
「意外とわかりやすい反応をするんですね」
「…………」
「まあ、任せてください。今はそういうことを考えたくもないでしょうけど、いつまでも今の状況が続く訳ではないですから」
ミリャがチラリとももを見る。
「……」
ももがミリャの視線を見つめ返して、困ったように苦笑する。
「ミリャ、信じてないでしょう」
「いや……っ、……そういうわけじゃ……ないけど」
ミリャがうつむく。
「……結局、病気のことはわからないままだし」
ももがミリャを見つめてから視線を手元の缶コーヒーに移す。
「そうでもないですよ」

「……ミリャがゆっくりと顔をあげてももをまっすぐ見つめる。

「……どういうこと？」

「手がかりはあります」

缶コーヒーを見つめたままももがつぶやき、ミリャを見つめ返す。

「ミリャと司の他にもう一人いるんですよね、同じ脳の病気を持った人が」

「まあ……うん」

ももが小さく微笑む。

「現実の世界に戻って、その女の子とご両親に会うことができれば、確実に答えに近づくことができます。快復の手段は機能しているわけですし、原因が解明されればより適切な処置が行えますからね。ももちゃんに任せてください」

ミリャが目を丸くする。

「……………」

そのあとで、ゆっくり顔を伏せた。

「……きっと無理だよ」

うつむいたミリャを、ももが困ったように見つめる。

「……まあ、口で言ってても仕方がないですからね。さっさと今の問題を解決すれば、すぐに――」

「18年」
ももの言葉を遮るようにミリャが言った。
「18年間、研究し続けたお父さんがたどり着けなかったんだよ」
ミリャが目を伏せる。
「18年間、奪ってしまったんだよ」
「…………」
ももがじっとミリャを見つめて、静かに口を開く。
「無我夢中だったからこそ、気づけなかったこともあるかもしれません」
「そんなこと……っ！　……ない……」
消え入るような声でミリャがそう言い、下唇を噛んだ。
「……ミリャ」
言葉を続けようとしたももが口を開き、閉口する。
「……その、ごめん」
「……いえ……すみません」
沈黙が流れ、ももが手をぎゅっと握る。
「あっ、ミリャ。そういえば、肝試しの件はいいんですか？」
ミリャが顔を上げる。
「……あ、うん。監視も徹底してるし……たぶん、トンネルの向こう

「側に行くのは無理だと思うから、私は行かなくてもいいかな……」
「あ、えと……」
俯いたももが手慰みする。
「ミリャの作業はもうないので……その、参加してきてもいいんですよ」
ミリャが呆然とももを見つめる。
「………………」
しばらくそうしてから、ミリャが微笑む。
「ありがとう。でも、いいんだ」
ももが顔をあげて、ふたたびうつむく。
「……そうですか」
ミリャが困ったように眉を下げる。
「むしろ、ごめんね。ももは行きたかったでしょ？」
「いえ……まあ……」
ももが机のタブレットを見つめる。
タブレットの画面は点滅を繰り返していた。
その様子をももがじっと見つめる。
「早く、終わらせてしまいましょう」
ミリャに向き直ったももがまっすぐミリャの目を見つめる。
「そうすれば、なんでもできるようになりますから」

「…………」

「二人の視線がぶつかる。」

ももが視線を落とし、ミリャの手元の野菜ジュースを見やってそれを手に取る。

「えっ？」

ももが野菜ジュースのストローを一気に吸い込む。

ずずっと音を鳴らしてすべてを飲み干すまで、ミリャは呆然とももを見つめていた。

空になった野菜ジュースを、ももが机に戻す。

「…………」

ももは目を閉じたまま静止している。

その表情が段々青ざめていく。

「……もも、大丈夫？」

ももの視線がどこでもない場所をさまよう。

「…………」

徐々に白目になりながら、ももがよだれを垂らす。

「わあ……」

顔を強張らせたミリャが身を引く。

「本当に苦手なんだね。というか、なんで飲んだの」

静止したままのももが、ゆっくり口に手を当てる。
「はきそう……」
ミリャが息をのむ。
「ええっ!?　ちょ、ちょっと！」
ミリャが大きな音を立てて立ち上がり、周囲を見回す。
「どうしよ……なにもな……」
「おえっ」
ももがえずいたのと同時にミリャがももを振り返る。
「ちょ、ちょ、ちょっ！」
ももに駆け寄ったミリャがももの背中をさする。
「も一、無理するからぁ……」
「うう……」
顔色の悪いももを、ミリャが心配そうに見つめる。
「……。バカだなあ……」
困ったような微笑みをミリャが浮かべた。
「……も……ムリ……」
「へっ」
「テイクアウトします……」
「なに言ってるの!?」
ももがココ手を当てる。

「あっ」
学園を背後に、一羽の鳥が飛んでいく晴れ渡る空をミリャが見上げている。
「………」
前を向いてリュックを背負いなおし、寮のほうへ歩きはじめる。
物思いにふけるように地面を見つめて歩く。
「ミリャ」
校門を通ったミリャはぼんやりとうつむきながら歩き続ける。
「あれっ、ミリャっ？」
歩き続けるミリャの背後に手が伸びてくる。
「ふわっ」
うしろに引っ張られるミリャが歩くペースを乱す。
「あれ」
振り返ると、ミリャの服の裾を手放したアイがひらひらと手を振っていた。
「こんばんわ、ミリャ」

ミリャがアイのうしろを覗き込み、それから背後を振り返る。
誰もいないことを確認したミリャがアイに顔を向ける。
「どうしたの、アイ」
「あ、うん」
アイが両手を胸の前に組む。
「その……」
首をかしげるミリャを、アイが上目遣いに見つめる。
「ミリャに、お願いが……あるんだよね」

・
・
・

週末、日曜日。
街灯に照らされた桜の木の下に集った人々が楽しげにざわめいている。
「いや一、夜桜といい、ここから見える夜景といい、もう僕の中で今日のイベントに満点つけたい気分」
そう言って、急勾配の長い坂を見下ろす。
「もう帰っていいかな」

[illegible]」

司が呆れたようにため息をつく。

「もう体力切れ？　言っておくけど、理人が作ったゲ一ムのゴ一ル地点、ここより倍は上にある『ひすがら草原』だからな」

「ん……ああ。いや別に、体力がやばいわけじゃ……いやヤバイけど……」

「？」

司が理人を眺めながら首をかしげる。

それから司は桜の木のほうに顔を向けた。

司の視線の先で、夏奈と狩野がなにかを話していた。

「…………」

「いや一、司。よくやってくれた」

司の肩に手を回しながら五十嵐が言った。

そのままその手で、日向子と流花のほうを指さした。

「一体どんな手を使ったん？　正直きてくれると思ってなかったわ」

「いや、まあ……」

司がトンネルの奥を見つめる。

「五十嵐、本当にトンネルの中に入るのか？　誘ったはいいものの、やっぱり禁止されていることに巻き込むのは気が引けるというか……」

「わかってるって！　そこはちゃんと考えてあるんだな、これが」

「まあ、計画の研究とやらを邪魔するのはさすがにまずいからな。どちらにしろ第二地区側へはたどり着けないようにしてある」

司が目を丸くする。

「どうやって？」

五十嵐が口角をあげてニッと笑う。

「肝試しには幽霊役が必要だろ？」

司が眉をひそめる。

「幽霊役……その人がみんなを止めるってこと？」

「ご名答」

司が腕を組む。

「……止められるかな」

「よゆーよゆー。適任者にお願いしてるからな」

「え、そんな人いるの？」

「幽霊専門家の新田のお眼鏡にかなうかは、わからないがな」

「……いや、幽霊の専門家じゃないから……。てか、幽霊役がいるってネタバレしちゃだめじゃん」

「そこはお前、それを知っていることを強みに女子と近づくのが目的だからな　男子はみんな知ってる」

だからな！　男子はみんな知ってる」
司がジトっとした目を五十嵐に向ける。
「抜け目ないな……。ちなみに、その幽霊役の人っていうのは？」
「それを言ったら楽しみがなくなるだろ──。ま、期待しておいてくれ」
そう言って五十嵐が笑いながら去っていく。
司はその後ろ姿をぼんやり見送った。
「…………」
理人が音もなく司の隣に立つ。
「なに？　幽霊がなに？　幽霊がなんだって言ってた？」
「え？　ああ……」
司が理人を見てから前を向き直る。
「お楽しみにだってさ」
「…………」
理人が顔を歪める。
「そういや、司。幽霊を見つけたって言ってたけど、その正体はなんだったの？」
司がチラリと理人を見てから顔を背ける。
その視線の先で五十嵐が女子全員に説明を行っていた。
「……まあ。島の安全を守る、ただの管理人さんだったよ」

「！」
理人が司に顔を向ける。
「なるほどね！」
理人が腕を組み前を向く。
「なんだよ、管理人さんか。そりゃそうだよね」
あはは、と理人が笑う。
「？」
司は再びトンネルの奥に視線を移す。
真っ暗な闇の続くトンネル。
暗闇から、人影がこちら側を覗いている。
「！」
人影は振り返り、闇の中へ溶けていった。

暗闇が続くトンネルの奥に誘うように風が吹き抜ける。
その様子を、日向子と理人が並んで見つめる。
「うわ一……夜だといっそう……」
胸元で手を握る日向子が弱々しくささやいた。
「[illegible]

……………。女の子とイチャイチャとこそこそしやがってしよ……こ
れ……」
理人呟くように吐き捨てる。
日向子が振り返ると、入り口で手を振っている人々が見えた。
司が小さくうなずく。
日向子もうなずきを返して、トンネルを向き直る。
「いこっか、理人くん」
……暗闇の中を、日向子と理人がゆっくり歩いていく。
会話はなく、足音だけが響いていく。
無言のまま歩く理人を、日向子がチラリと見上げる。
「……理人くん」
日向子がささやいた瞬間、ガッと音が鳴り、石ころの跳ね転がる音がトンネルに響き渡る。
「………………」
日向子が見つめる暗闇の先から水滴の落ちる音がした。
「あっ」
日向子が理人を振り返る。
「大丈夫？　理人くん」
日向子の声が響き、反響音が静寂に飲み込まれていく。
日向子が首をかしげる。

「理人くん？」
小さな笑い声がトンネルにこだまする。
「ふふ」
「ふふふふふふふ」
理人が闇の中でぬらりと顔を上げる。
「どっ、どぅ？　怖い？　怖かった？　びっくりした？　ふふっ」
「え？　うん……」
「ふふ、ふふふ。やっぱり、やっぱりね。はひゃひぎっ……箒木さんは、こういうの、苦手そう……だもんね。ふふ」
日向子が口を開けて、呆然と理人を見つめる。
「……うん。理人くん、本当に大丈夫……？」
「…………。えっ、なに⁉」
勢いよく振り返る理人に、日向子が少し身を引く。
「あ、なんでもないよ」
「そう……」
理人が立ち止まる。
それに気付いた日向子も、同じように立ち止まった。
「どうしたの？」
理人がトンネルの入り口の光を振り返る。
「[illegible]

「もう、そろそろ引きかえさない…………引き返しても……いいんじゃないかな？」
「えっ……まだ少ししか歩いてないけど」
「少しって？　どのくらい？　何時何分何秒地球が何回まわったくらい？」
「え……地球はわからないけど……2分くらい？」
「そう、そうか。ならもう十分だよ。僕はカップラーメンは少し固ゆでくらいが好みだからね。2分はいい。もういいだろ。帰ろう、ははきっ……はひゃきっ……。…………」
「う、うん。帰ろうか」
理人がなにも言わずに振り返る。
入り口の光に向かって歩きはじめる理人。
日向子がその背後をじっと見つめる。
その背中に、そろりと近寄っていく。
「わっ」
とん、と理人の背中を日向子が押した。
理人がつんのめり、ピタリと止まる。
理人の横に並んだ日向子が、理人を覗き込む。
「ふふ、理人くん。びっくりし――」
「あっ、あっ、あっ」

「理人が唐突に全速力で駆け出す。

「ああ」

叫び声がぐわんぐわんと、トンネル全体に響き渡る。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

どんどん小さくなる理人の背中を、日向子が呆然と眺める。

「……へっ？　あっ、あっ。ごめん、ごめんなさいいいっ」

日向子が理人の背中を追いかける。

「つい、出来心で……！　理人くん、ごめんねぇぇぇぇ――っ!!」

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…………」

完全にすねた理人を狩野と日向子がなだめている。

その様子を横目に、司と流花がトンネルの先を見つめる。

「いや―、いい滑り出しじゃね」

上機嫌な五十嵐が楽しげに言った。

「実は理人があああいうの苦手だって夏奈に聞いてな。最初に組み込ん

て正解だった、ははっ」

司が振り返り、再び理人に視線を送る。

「知らなかった……どうりで幽霊探しに対して懐疑的だったわけだ……」

「まったく……質が悪いな」

司が流花に顔を向ける。

「流花も苦手なんだろ？　俺の胸はいつでも空いてるぜ」

「ありがたい。そのときはサンドバッグ代わりにして発散させてもらう」

「お、それもいいナァ」

流花がため息をつく。

「さ、新田くん。エスコート頼むよ」

「え？」

司がキョトンと流花を見つめる。

「ああ、うん」

「いってら〜」

司がトンネルに向き直る。

「行こう」

流花が司にピタリと身を寄せる。

司は歩き辛そうに、隣の流花を横目で見下ろした。

流花は前方に続く暗闇をじっと見つめている。
「……本当に苦手なんだね」
流花が司を見上げ、自分が司に密着していることに気付いて慌てて体を離す。
「……いや、まあ……」
言いよどんだ流花がため息をつく。
「こういうのは、反射的に体がね……」
司が首をかしげる。
「……姉がお化け屋敷とか、ホラーが好きなやつでね。あたしが怖がって抱きつくのを昔から楽しみにしていて。いつの間にか一人にされたり、ずいぶんからかわれたよ……」
流花がもう一度、大きなため息をつく。
流花がうらめしげに司を見あげる。
「急にいなくなったらぶっ飛ばすからな」
司が苦笑する。
「……お姉さんは、そういう反応を楽しみにしていたんだろうね」
「…………」
顔を上げた流花がぼんやり視線をさまよわせる。
「……確かに、あたしに殴られて笑ってたな」

「…………。……大舘さんのお姉さんが……想像できないな」
「あたしの逆だって考えてもらえればいい。背もあたしより小さいし、性格も全然似ていない」
「へぇ……」
流花が大きく息を吸いこみ、ゆっくり吐き出す。
「……おかげで緊張がとけてきた。そのままずっと話し続けてくれ」
「ええ……」
「なにか質問してくれてもいいよ」
「……そうだな」
司が前の暗闇を眺める。
「大舘さんは、どうしてトライメント計画に？姉妹参加って、結構珍しいよね」
「ああ……」
流花が自分の足元を見つめる。
「……少し、話したと思うけど。あたしの前の職場は、国際法務まわりの事務処理を引き受ける、まあ、ある種の法律事務所みたいなところだったんだよ。とある理由でその会社がなくなって、再就職を考えていたときに姉から誘われたんだ」
「へぇ、お姉さんに誘われたんだ」
「姉もあたしと同じ時期に会社を辞めていてね。知り合いにトライメ

ント計画について教えてもらったんだそうだ」

「……なるほど」

司が流花に向けていた視線を前に向ける。

「会社がなくなって……大変だったね」

「ま、当然の末路さ」

「…………」

司が再び流花を見下ろす。

「……その、なにがあったか聞いても……？」

流花が上目遣いに司を見てから前を向きなおす。

「古い会社でさ、結局、時代の流れについていけなかったんだよ」

流花が小さくため息をつく。

「過去において優れたノウハウをもっていたとしても、それをデジタルで再現できるようになってしまえば独自性なんてのは一瞬にしてなくなってしまう。独自性がなくなるということは競争力がなくなるということだ。誰だって、同じような製品なら安くてわかりやすいほうに流れるだろう。まあ、あたしたちの場合、扱ってるのは製品ではなくコンサル業務や法律知識だった訳だけどね」

流花が目を伏せる。

「いま、法律業務は膨大な情報や判例を取り扱うのに、人工知能を利

用するようになっている。けど、あたしの会社はその変化を受け入れなかった。技術進化の波についていけなかっただけなのに、上の連中はデジタル化をしなくても自分たちのノウハウがあればやっていけると豪語し続けた。狐と葡萄の寓話だよ。教科書の一番最初に書いてあるくらい、基本的なことなのにね」

「……………」

「時代のトレンドを理解できず、経営判断を誤って……気付いた時には、どうしようもないぐらいに会社は傾いていた。いよいよ経営が厳しくなってから動き出しても、とっくに周回遅れだ。……多分、聡い連中はさっさと会社に見切りをつけて、同業他社に行ったんだろうな。けど、あたしにはそれができなかった。他の会社へ流れる社員達を引き留めてでも、必死に追い付こうとした。でも、追い付こうにも資金がない。資金がなければ投資もできない、人も集まらない。だからますます、競争力が衰えていく。どうしようもない悪循環。悲惨なものだよ、そういう企業の末路はさ」

流花が口を閉じると、二人の足音だけが暗いトンネルに響いた。

「……なんかごめん、嫌なこと思い出させて」

「いや、もう過去の話だからね。そう、だからこそ」

流花が歩きながら顔を上げる。

「だからこそ、あたしはこのトライメント計画に――」

言葉の途中で流花がピタリと止まる。
流花を見下ろしていた司も同じく足を止める。

「？」

流花が呆然とした表情で、ゆっくり前方を指さす。
司が流花の指さした先を目で追う。

「!?」

トンネルの中央で闇の中に佇む人影を司がとらえ、目を見開く。

「ぁ…………？」

流花の額に汗が流れる。
青ざめた流花が後ずさりする。

「……なに？　なに、なんなの」

「お前たち……」

闇に佇む影が、二人に一歩近づく。

「ひっ……」

流花がビクリと跳ねる。

「……おおお、おお……おばけ？　おばけぇ」

司に身を寄せた流花が司の両肩を掴む。

「おばけえ、おばけえ！」

ガクガクと肩を揺らされ、司の首が前後する。

「ちょっ、大舘さん、落ち着いてっ」
ざっと音を立て、影がもう一歩前に出る。
「ひゃっ」
流花の動きがピタリと止まる。
涙目になった流花が一歩後ずさる。
「あぁ……ごめんなさい」
一歩、また一歩と下がっていく。
「ごめんなさい、ごめんなさい。ごめんなさいいいいいいっ」
乱れた足取りで踵を返した流花が全速力で走り去っていく。
その背中を司が唖然としながら見送る。
足音が遠のいていく。
小さくなっていく流花の背中を見て、司が大きくため息をつく。
「なるほど……適任者ってそういうことか……」
トンネルの中央に佇む影が、ふむ、と息づく。
「……三国先生」
暗闇の中から、三国が血色の悪い表情を覗かせる。
「……以前も注意されたはずだが」
三国が司を見つめる。
「意外と不真面目なんだな、新田」
「あ、いえっ、そんなつもりはなくて　。むしろ、事情を知ってい

[illegible]……[illegible]
たので皆を止めようと思って……」
「ほう……そうか」
三国が司の背後に視線を送る。
「協力してもらえるのは助かる。一応、情報規制があるからな」
「…………」
司が三国をじっと見つめる。
その視線に気づいた三国が、司に視線を戻す。
「……どうした？」
「ああ……いぇ」
誤魔化すように、司が視線を逸らす。
「……なんというか、よく幽霊役を引き受けたな──と……思いまして」
「ああ。……五十嵐は、わかっていて私に持ちかけてきたからな」
司が首をかしげる。
「わかっていて……ですか？」
三国がうなずく。
「皆が感じている違和感について、これ以上大きくしないために釘を打ちましょうと、依頼された」
「えっ、五十嵐が？」

「普段はお調子者にしか見えないだろうが、それを利用している切れ者だよ」
「…………」
三国が小さく微笑む。
「協力してくれた新田には悪いが、お前も週明けには反省文が待っているから、楽しみにしておくといい」
「ええっ！　そんな……」
司がうなだれる。
「同じ悪さをした仲間と芽生える絆もある。だが、ほどほどにな」
「……はい」
三国が振り返り、再びトンネルの奥に顔を向ける。
「ではな」
そう言い残して、三国の姿が暗闇にとけていく。
「……」
その背中を見送ったあと、司もその場を後にした。
ひたひたと、暗闇の中を一定のペースで足早に進む足音に、もう一人の足音が続く。
「ちょ、ちょっと、夏祭」

さっ、さっきの夏奈」
狩野が夏奈を呼び止める。
夏奈が顔だけを狩野に向ける。
「どうしたの！」
「しっ、静かに」
狩野が口元に人差し指を立てる。
夏奈が狩野を振り返る。
「どうしたの！」
狩野が気まずそうに頭をかく。
「とりあえず、黙ってこっちについてきてもらえるかな」
「わかっ――」
狩野がサッと夏奈の口を塞ぐ。
「もごもご」
呆れながら夏奈を見つめてゆっくり首を横に振る。
それからハッと息を飲み、手を離す。
「ご、ごめん」
「わかった！」
狩野が苦い表情を浮かべる。
それから、トンネルの側面にある扉を振り返った。
「こっちきて」

夏奈がじっと狩野の背中を見つめてから、そのあとに続いた。

狩野が生い茂った木々の間を抜けて、後ろを振り返る。

「……よし」

人がいないことを確認してから前を向き、薄暗い森の奥へ視線を向ける。

「問題はここからだな……」

夏奈が狩野の隣に並ぶ。

「すごーい、こんな抜け道あったんだね！」

狩野が夏奈を見下ろしてうなずく。

「トンネルをあのまま進んでも、三国先生が待ち構えているからね」

狩野が再び前に目を向ける。

「第二地区へ向かうなら、トンネルを迂回する必要がある」

「なるほど―」

夏奈がふむふむとうなずく。

「狩野くんは、第二地区に行きたいんだ？」

「え？」

狩野と夏奈の目が合って、狩野が視線を逸らす。

狩野と夏奈の目が合い、狩野が視線を逸らす。

「……いや、ほら……夏奈が立ち入り禁止地区について知りたがってたからさ……」

「知りたい！」

狩野の表情がパッと綻ぶ。

「でしょ！」

夏奈がにんまりと口角を上げて狩野をまっすぐ見上げる。

「だから、なんとか行ける方法を考えてたんだ」

再び狩野が夏奈から視線を逸らす。

「今回の遊びに乗じて、みんなが見ているはずの幽霊から逃げたって名目にすれば、偶然迷って第二地区にたどり着いちゃったと言い訳しても納得してもらえるかなって。だから、この方法なら大して被害も出さずに……」

まくしたてるように狩野が話しながら、夏奈があらぬ方向を見ていることに気付いた。

「……夏奈？」

狩野が夏奈の視線の先を追う。

「一体どうした……の……」

狩野の声が消え入っていく。

「…………え？」

夏奈と狩野が森の隙間を見つめる。
二人の視線の先に、目のついた白い布が浮かんでいた。
「……なんだ、あれ……」
眉間にしわを寄せた狩野が目を細める。
「……ゆうれい」
夏奈がぼそりと呟き、狩野が夏奈を見下ろす。
「ゆうれいだ!!　やった――――！！！」
大きな声を上げながら、夏奈が一目散に白い布の方へに走り出す。
「えっ、ちょっ、ちょっと!?　いや、夏奈待って!!　おいて行かないで!!」
狩野が慌てて夏奈のあとを追いかける。
白い布は水平方向にゆらゆらと遠ざかっていく。
それを夏奈が追いかけ、その背中を狩野が追いかけた。
「まてまて――――!!」
森の中に夏奈の声がこだましていく。

桜の木の下に集った人々が楽しげに談笑している。
その中で、五十嵐の視線は、ンネルの入り口に向けられていた。

その中で、五十嵐の視線はトンネルの入り口に向けられていた。

「……あいつ、おせーな……」

五十嵐が目を細める。

「……やっぱり俺も行くべきだったか……」

そう小さくつぶやく五十嵐を、司が横目で見守る。

「……………」

ガサガサという音が森の中から聴こえ、それに続いて、まてー、という女性の声が届く。

人々の間にざわめきがひろがり、全員が森に目を向ける。

「おっしゃーーーーー!!」

白い布を両手で掴んだ夏奈が、森の中から飛び出す。

「うおっ、なんだっ!?」

人々が目を丸くする。

夏奈が掴んだ白い布をたかだかと掲げる。

「つかまえたーーーーー!!」

その後ろから、狩野がよろめきながら出てくる。

「ちょ……　まじ……　はやい……」

五十嵐が二人に駆け寄る。

「お前ら、どっから出てきてんだよ！　それに……なんだそれ？」

顔を上げた五十嵐が、夏奈の掲げる白い布を見る。

「幽霊！」
夏奈がこたえて、**掲**げた自分の手元を見上げる。
「……あれれ――」
白い布がだらり垂れ下がっていることに気付いて、夏奈が首をかしげる。
夏奈が手をおろし、白い布をじっと見つめる。
「さっきまで動いてたのに――」
「はあ、動いてたぁ？」
夏奈がうなずく。
狩野がうしろでぜえはあと荒い息を吐きながら息を整える。
「……いやっ、まじ、動いてたんだよ、それ」
五十嵐が眉を寄せる。
「てかお前、なんで森から出てきたんだよ」
「え？」
狩野がポカンと五十嵐を見つめる。
「あ……それは……」
狩野が気まずそうに視線を逸らし、五十嵐が目を細めて見つめる。
「あ、ごめんね」
五十嵐と狩野が夏奈を振り返る。
「[illegible]森の[illegible]行[illegible]幽霊を連[illegible]の[illegible]

「私が森の中に入って行く幽霊を見かけて、つい！」
夏奈がぺろっと舌を出す。
「え……いや」
夏奈が白い布を狩野にぐっと押し付ける。
「これあげるね」
「はっ？　え、ああ……ありがとう……？」
狩野が手元の白い布に目を落とす。
白い布に付いた目と狩野の目が合った。
「三国先生か……？」
五十嵐が後頭部をかきながらつぶやく。
三人を見守る人々から少し離れたところに立っている司が目を細める。
トンネルを振り返り、再び人々の集まるほうに視線を向ける。
それから夏奈と狩野の出てきた森のほうを見る。
司は人の群れから離れて、一人森の中に歩き出した。

木々の隙間から街灯に集まる人々を見下ろす人影。
ぼんやりとその光と見つめながら小さく息をつく。

「あれ、ミリャ？」
草をかき分けて現れた司が口を開く。
ミリャが顔を上げて振り返る。
「やあ、司くん」
司が呆れたようにため息をつく。
「やあって……」
司がミリャに歩み寄っていく。
「中村さんの持っていた布って、ミリャの仕業？」
ミリャがうなずく。
「……そう、なるほどね。もしかして、アイかアルファかな……と思ったんだけど」
ミリャがチラリと司をみて微笑む。
「私で残念だったね―」
司がミリャをじっと見つめる。
「いや、正直君でよかった」
それから司はミリャから視線を逸らした。
「まだ心の準備もできていないし、なにを話せばいいかわからなかった」
「……ふむ。彼女たちじゃなかったら、誰でもよかった……と」

司が目を丸くしてミリャを見る。
「え、そうは言ってないけど。……」
ミリャが人々のいる街灯を無表情のまま眺める。
「君に会えてうれしいよ、ひゃっほいめっちゃテンションあがるとか言えばよかったかな」
「全然うれしくなさそう」
「もう、わかるだろ、察してよ」
少し声を跳ねさせて司が言った。
「…………」
「いや、わかるだろってのは良くないか」
司がミリャに向き直る。
「ずっと君に会いたかっ——。ぐえっ」
ミリャの肘打ちが司の腹部に入った。
「やめい」
「……威力、強くない？」
司がお腹をさすりながら体を起こし、困ったように微笑む。
「本当、こうしてちゃんと話せるのは久しぶりだね」
「うん」
ミリャは無表情のまま、森の外側の人々を見つめている。
しばらくミリャの横顔を眺めてから、司も同じように見下ろした。

「まあ、実は予想は五分五分でね」

「？」

　ミリャが司に顔を向ける。

「ここにいるのが、彼女たちか、ミリャか。……正直に言うと、今はもう、彼女たちや記憶のことはそんなに気にしていないんだ。たぶん、それよりも気になる目的を見つけることができたからだと思う」

　司がミリャを振り向く。

「君に会えるかもしれないと思ってここにきた……というのが本音だったりする」

　ミリャがやや目を見開き、すぐに視線を逸らす。

　赤らんだ頬が司に見えないように、顔を前に向ける。

「それは……どうも」

　司が微笑み、ミリャと同じように前を向く。

「ああ……もう、こういうの止めるつもりだったんだけどな……」

　司がため息をつく。

「君がおちょくるから」

「私のせいですか……そうですか」

　ミリャが司から顔を背ける。

「あ、そういえばミリャ。多分だけど、さっき、前に君の言っていた

「光るキノコを見つけ――――」
「どこ⁉」
司を振り返り、ぐっと顔を近づける。
司が少し身を引く。
「……えっと、あっちに……」
「あっちってどっち⁉」
司が指をさす。
「……案内しようか？」
ミリャがうなずく。
「はやく！」

暗闇の中で、キノコの傘が青緑色にぼんやり発光していた。
ミリャが屈みこむ。
「懐かしいなぁ」
ぼそりと呟くミリャを、司がうしろから見下ろしていた。
ミリャがしゃがんだまま司を振り返る。
「ほら、せっかく見つけたんだから、司くんも記憶に焼き付けないと」

　司が微笑む。
「いや、俺はさっき十分見たからさ」
「もう、いいからこっちきて」
「ん……ああ……」
　言われるがまま、司がミリャの隣にしゃがむ。
　目を細めて、キノコのぼんやりとした光を見つめる。
「……綺麗だね」
「でしょ」
　ミリャが微笑む。
「でも、不思議だな……私にとってはちょっと前の出来事のはずなのに、もう感じ方が違う」
　司がミリャをチラリと見つめる。
「……確か、この島での記憶が最後だって……前に言っていたよね」
　ミリャが目を伏せる。
「正確には、体が動かせていた最後の場所なんだ。植物状態にはなってしまったけど、私の意識はたまに目覚めていたから」
「え、そうなの？」
　ミリャがうなずく。
「体を動かしたり、反応するための機能が働かなくなってしまっただ

けで……確かに意識はあった。だから知っているんだ。お父さんがどれだけの時間と苦悩を要して、今を手に入れたのかを」

「…………」

ミリャがキノコをじっと見つめる。

「このヤコウタケが光るのは、多くのキノコに含まれるヒスピジンと、このキノコだけが持つ酵素が反応することからなんだ。そういう『化学反応』の数々を機械を使って演算し、可能性のある未来をすべて……お父さんは繰り返し検証し続けていた。それでも……見つけられなかった」

ミリャの横顔を見つめる司が目を細める。

「でもそういう苦難の数々を、『失敗だった』で終わらせるようなことにはしたくない。お父さんだけじゃない。伊砂先生だって、このトライメント計画でみんなの『化学反応』を起こして未来を変えたいと願っていた。ももも流花も日向子も……事件を起こしてしまった『誰か』だってきっと、今を変えたいと願って、この世界に挑んだんだ。それを私は『事件』で終わらせたくない」

「…………」

司の視線が、ミリャの横顔からヤコウタケに移る。

「……そうか。そういうことか……。ミリャの行動の意図が、ようやくわかった気がする」

ミリャが司に顔を向ける。

「君は……君が見ていたのは、今起こっている『事件』なんかじゃなかったんだ。君が見ているのは、この先、未来に起こりうる――」

ミリャの手が司の口を塞ぎ、司の言葉を遮る。

司が目を丸くする。

ミリャは口元に人差し指を立て、ゆっくり司の口から手を離した。

司が周囲を見渡す。

ミリャが後ろを振り返り、司に顔を寄せる。

「誰かくる」

そうつぶやくと、ミリャはすぐにその場から移動し始めた。

音を立てないように去っていくミリャを、司が呆然と見送る。

ミリャの足音が遠のいて行き、別の足跡がだんだん司に近づいてきた。

司が立ち上がり、足音のほうに体を向ける。

やがて、伸びきった草を避けて三国が姿を現す。

「……………」

司が目を見開く。

「新田、なにをしている」

「あ……いえ……。あ、その……狩野が森の中で見たという幽霊が気

になって、調べに……」
三国がため息をつく。
「……お前もか」
三国は足元にぼんやりとした視線を落としてから、再び司に顔を向けた。
「なにか、見つけられたか」
「それが、全然……」
「……そうか。もう少し準備をしておくべきだったか……」
そうつぶやいた三国がため息をつく。
司が三国を見つめる。
三国の視線が司の後方に向けられ、三国が目を見開く。
「……？」
司も後方を振り返った。
司の視線の先に、暗闇が続いていた。
「……幽霊ではない」
司が三国を振り返る。
「ただ、懐かしいものを見たなと思ってな」
「…………」
三国の視線を慎重に追い、司は後方のヤコウタケを見やった。
「皆が新田を探している。早く戻るんだな」

……皆[illegible]」
そう言って三国が帰り道に司をうながす。
「あ、はい……すみませんっ」
司が慌てて三国の横を通り、その場を去っていく。
三国は去っていく司の背中を見送った。
遠くで司が振り返り三国に会釈をする。
三国は手を挙げてこたえた。
「……」
司を見送り、三国は再びヤコウタケを見つめる。
やがてその視線を暗闇に向けた。
「……ミリャ」

・
・
・

一夜明けて。
教室に集った十二人の生徒が机に向かってペンを走らせている。
黒板には『好きな本や記事の内容をレポート用紙１０枚でまとめること。実行や提出は任意』と書かれている。

ペンの音だけが続く。
それぞれのレポート用紙の周りには本やタブレットが無造作におかれている。
刻一刻とかたむいていく太陽が、床に落ちる影を伸ばしていく。

日の暮れ始めた教室で、狩野が立ち上がる。
「それじゃ、お先に失礼」
レポート用紙を掲げた狩野が残った三人を振り返り声をかけた。
おつかれ、と声があがり、狩野が教室を出ていく。
「……いやあ、実際悪かったな。巻き込んじまって」
五十嵐がそう言うと、司と流花が顔をあげた。
「いや、これは任意でやっていることだからね」
五十嵐が二人の机を交互に覗き込む。
その視線が司の机におかれた『草枕』の上で止まる。
「司はなんで草枕？」
司が手元の『草枕』をチラリと見てから、五十嵐に向き直る。
「いや、ちょっと思うところがあってね」
五十嵐が目を細める。

五十嵐が目を細める。
「夏目漱石の『草枕』か？　……深いな」
流花がペンを持った手を口に当て、レポート用紙を見つめたまま口を開く。
「五十嵐くん。君はもうとっくにレポートを書き終わってるだろ。帰らないのか？」
五十嵐が流花を振り返る。
「あ、バレた？」
五十嵐が前を向く。
「二人とは前から話したいと思ってたんだよね」
「ほう？」
顔をあげた流花が五十嵐を見る。
五十嵐は背もたれに寄りかかり、腕を組んだ。
「実はさ、今回の企画の一番の目的、公社側へのアピールだったんだよな。今の空気感を諫める意味合いもあったけどさ。なぜなら、俺は卒業後に社会福祉公社へ就職したいから。二人もだろ？」
「……」「……」
司と流花が目を合わせる。
「新田くん、そうだったのか？」
「……いや、まあ……」

五十嵐がニヤリと口角をあげる。
「学生のうちに知り合った共通の目的を持つ奴ってのは、なによりの財産だからな」
流花が視線をレポートに戻す。
「……まあ、それは同感だが……」
司が眉をひそめて五十嵐を見る。
「五十嵐……お前、そんなキャラだったの？」
「付き合いある奴はみんな知ってるよ」
「…………」
司が口元に手をあてる。
「で、実は聞いてみたかったんだ」
言葉を切った五十嵐が、二人の顔を交互に見つめる。
「第二地区、つまり今の立ち入り禁止地区に入った二人って、お前らだろ」
「‼」
流花がゆっくり顔をあげて五十嵐に細めた目を向ける。
「は？　なにを言っているんだ」
五十嵐が片方の口角をあげる。
「……へえ、司はビンゴか」
「おまっ

「……おい？」
司が顔をしかめる。
「汚い奴だな……」
「いいぞ、もっと褒めてくれ」
流花が司に目を向ける。
「……」
「ま、別にそれを責めるつもりもないし。俺だって司のあとに試したしな。捕まったけど」
司が目を丸くする。
「てか、完全に女子は流花だと思ってたが、違うとなると誰なんだ？」
「……」
司がため息をつく。
「誤解しているようだけど、あの時俺は第二地区に興味なんてなかった。ただ、幽霊が入って行くのが見えて、一緒にいた女の子もついてきちゃっただけだよ」
五十嵐がキョトンと目を丸くする。
「司が幽霊を追っているって噂、本当だったんだな。というか、幽霊ってマジでいるの？」
「俺が聞きたいくらいだよ。気になって一時期眠れなかった」

「……司ってマジで不思議ちゃんだったんだな」
「眉間にしわを寄せていた五十嵐が、納得したように息を飲む。
「あ、それで今回も幽霊を追って急にいなくなったのか」
「……そういうこと」
流花の視線から逃げるように、司が前を向く。
「……ちなみに、第二地区には行けたけど、すぐ掴まったから俺もよく知らないんだ」
「……ふーん。そういうことにしておこうか」
司が五十嵐を振り返る。
「本当だよ。まったく……」
司が頬杖をつきながらため息をつく。
「…………」
流花は視線を落として、自分のレポートを見つめていた。
廃墟に背を向けて、アイが両手を後ろに組む。
「改めて、肝試しの件はありがとね、ミリャ」
橙色に染まった空を見上げていたミリャが、アイを振り返る。
「ううん。学祭は大したことできなかったけどね

ミミん、実験はフしかことできなかったけどね」

アイがゆっくり首を振る。

「そんなことない。ミリャのおかげで、変な遺恨を残さずに終えられた」

ミリャが横向きになった体をアイに向ける。

「ミリャは、これからどうするの？」

ミリャが顔を伏せる。

「……特にないかな。検証が終わったから今すぐにでも実行に移せるけど、念のため残り６日間は繰り返しテストをしていると思う」

「……そっか」

ミリャが顔を上げる。

「アイは、どうするの？」

「……。全部終わったら、お姉ちゃんに会いに行くよ。ミリャが勝ち取った結末を目の当たりにすれば、お姉ちゃんも諦めると思う。そもそも、ボクたちの終わりは、初めから覚悟していたことだから」

「……」

アイが顔を上げる。

「なぜ、ボクは生まれたんだろうって、ずっと疑問に思っていた。お姉ちゃんは、動けない自分の代わりにと……そう言ってボクに仕事を預けたけど。今では、それは違うんじゃないかって思ってる」

「アイが……生まれた理由……」
アイの右手が、自身のサイドテールに触れる。
「ボクも、彼と出会うあの日まで気付かなかったんだけど」
するりと、髪をすきながら右手をおろす。
そのまま自分の手のひらに視線をおとす。
視線の先、地面に転がった木の枝を見つける。
「…………」
黙ったまま、アイがその枝を拾い、じっと見つめる。
ミリャがアイを不思議そうに見つめる。
顔を上げたアイが、自分を見つめるミリャの視線を見つめ返して微笑む。
「ごめん、なんでもない」
アイが枝を、もとあった場所にそっと戻した。
両手を軽くはたいて砂を払う。
「……」
ミリャがアイの動作を見守る。
「6日後、日曜日だよね」
顔を上げたアイがミリャを見つめる。
「うん」
アイが微笑む。

アイが微笑む。
「わかった。……どうか」
両手を前に組んだアイが、ゆっくり頭を下げていく。
「よろしくお願いします」
ミリャはしばらくアイを見つめてから、ゆっくりうなずく。
「任せて」

レポート用紙を手に持った司と流花が廊下を並んで歩く。
無言のまま、二人の足音だけが廊下に響く。
しばらく歩いてから流花がゆっくり口を開いた。
「……さっきの話なんだが。第二地区に入ったもう一人の女の子って、日向子だろ」
司がゆっくりと顔を上げる。
「そうだね」
「…………」
司が少し目を伏せる。
「第二地区には、そもそも生徒はいなかった」
流花が目を見開き司を振り向く。

「………………。そうなのか？」

前を向いたまま司がうなずく。

「大舘さんのお姉さんがどうしているかはわからないけど、もしかしたら、この島にはいないかもしれない。他言しないように言われてたから、今まで話せなかった」

流花が顔を伏せる。

「そうか……それは、そうだろうな……。…………」

廊下を曲がった二人が階段に差し掛かる。

階段をのぼり、踊り場を曲がり、再び階段をのぼり、上の階にたどり着く。

そこで流花が足を止めた。

「……新田くん」

司が立ち止まって流花を振り返る。

流花が口を開き、ゆっくり閉じる。

目を伏せて眉間にしわを寄せ、意を決したようにもう一度司を見つめる。

「新田くん、君は……本当はもっと、色々なことを知っているんじゃないか。……どうしてみんな、なにかを隠そうとしている？」

「……………」

司が、流花の疑いの眼差しをじっと見つめる。

「……失敗として認識されるわけにはいかないんだ」

流花が眉をひそめる。

「……どういうことだ？」

司が目を伏せる。

「失敗は罪だ。失敗と第三者から認識されれば、それが永遠になる。この社会において、失敗は後ろ指をさされる対象だから」

「……」

流花が黙ったまま司を見つめる。

「その考えは間違えだと断定され、過去の栄光が永遠の強者になる。未来を生きなければならないのに、認識された過去は嘘か真か関係なく絶対になる。社会福祉公社LieFは、そういう『今』を変えるために築かれた革命的なシステムだったらしい」

「…………知っている」

司がうなずく。

「大舘さんにとって、今の『トライメント計画』は『失敗』だったかな」

流花が目を細める。

「その判断がつかないから、私は真実を聞いている」

「そう、誰も『真実』を知らない。誰も知らないなら、問題にもなら

ない」
流花から表情が消える。
「『隠蔽』を良しとすると？」
司が首を振る。
「開示した問題がさらなる問題を呼び、社会を混乱させ、世の中の均衡が崩れるなら。『隠蔽』にも価値がある場合はあると、俺も考えている」
「…………」
「だから俺は、信じる人に賭けることにした。俺には俺の役割がある」
司が流花を見つめる。
「俺は、知っていることを大舘さんに話すことはできない。その責任を負えない。……だから、ごめん」
「…………」
司が頭を下げ、流花が目を伏せる。
「……そう」
そう呟いた流花が一歩前に出て、司の隣に並ぶ。
司を見上げてから前を向く。
「行こう」

流花が職員室に向かって歩き出す。
「……」
その背中をしばらく見つめてから、司もあとに続いた。

ミリャが職員室の扉を開ける。
職員が顔をあげるが、すぐに机に向き直る。
周囲を見渡すミリャの視線が一つの机に注がれる。
ぴょこぴょこと歩いていき、立ち止まる。
「三国先生なら、裏手の倉庫あたりにいるよ」
その声にミリャが振り返る。
ぺこりとその職員にお辞儀すると、職員室の裏手に歩きだした。
……教員室の裏手に並べられた鉄製のラックの間を、ミリャが歩いていく。
「――大体、どうして彼にしかわからないようなものがあるんですか……」
ミリャが足を止めて、声のするほうへ視線を向ける。
伊砂と三国が倉庫の隅で向かい合っていた。
その様子をみて、身を隠したミリャが耳を澄ます。

「それは俺にもわからない……。先生が全てを継ぐ前に、偶然亡くなったということも考えられる」
「……ありえないでしょう。だってもう組み込まれていたんですよ？　つまり、誰にも言わずに勝手に行ったということです。事件に直接関係はなくとも、誰かがなにかを隠して計画的な行動をしているのは確かです」
しばらく沈黙が続く。
「確かに奇妙だ……どんなに調べても、犯人の意図がまるで見えない……。……」
再び沈黙が訪れ、空調の音が際立つ。
そのとき、扉を開ける音が響き、三人が入り口に目を向ける。
「失礼します。Ａクラスの新田司です。三国先生、少しお時間頂けますか」
三国が振り返る。
「……それでは、伊砂。あの装置については私のほうで管理しておく。必要なときは言ってくれ」
「わかりました」
三国が踵を返し、職員室に向かって行く。
その様子を、ラックの影からミリャが見つめていた。

司と流花から、三国がレポート用紙を受け取る。
三国が内容に軽く目を通す。
「相変わらず……お前たちは真面目だな」
流花が苦笑する。
「いえ、不真面目だったからこそ、こうして反省をしているわけなんですけど」
三国が顔を上げ微笑む。
「そうだったな。遅くまでご苦労だった。もう帰っていいぞ」
司と流花がペコリとお辞儀する。
「失礼します」
「失礼します」
司と流花が三国に背を向けて出入り口に向かう。
「ああ、新田」
司が立ち止まり、三国へ振り返る。
「お前は、少し残ってくれ」
「？」
司が流花の顔を見やってから、三国のところに戻る。
流花は司の背中を見つめてから、すぐに職員室から出て行った。

「なにかありましたか？」
三国が黙ったまま司を見下ろす。
「……少しな」
三国が周囲の職員を見渡してから司に視線を戻す。
「場所を変えよう」
そう言って廊下のほうに向かう。
司も三国に続いて、職員室をあとにした。

三国が空き教室のベランダの手前で立ち止まる。
振り返り、司を見つめる。
「……」
司も黙ったまま、三国の視線を見つめ返した。
三国が小さく微笑む。
「大きくなったな」
「…………」
司が目を見開き、ゆっくり口を開け、また閉じる。
「……新田、お前は……、思い出しているのか？」

「…………。いえ。今は、なにも……」
「今は？」
司が顔を伏せる。
「前は、少しだけ……断片的に思い出すことがあったんです。ただ、そもそもそれが本当の記憶なのかもよくわからなくて……」
司が顔を上げて三国を見つめる。
「記憶の中に、三国先生を見たような気がしました。やっぱり、先生は俺を知っているんですか？」
「…………。少しだけな」
三国が視線を落とす。
「…………」
三国がゆっくり顔を上げて、再び司を見つめる。
「……新田、お前はなぜ、白髪の少女を追う。彼女の、なにを知っている」
「…………」
三国を見上げていた司が視線をそらす。
「わからないから、追っていたんです。でも、彼女とは会ったことがある気がして……彼女が姿を隠すのは、それが理由なんじゃないかって……」
「…………。会ったことがあるというのは、白髪の少女の、彼女に

…………

か」

「？　はい」

「…………」

三国が目を見開く。

「……どういう……ことだ。……………」

うめき声にも似た三国の囁きに、司が首をかしげる。

三国がぎゅっと目を閉じ、ゆっくり息を吸い込む。

「……いや」

三国がゆっくり息を吐き出す。

「……すまないが、少し考えたいことができた。悪いが、改めさせてほしい」

司が不思議そうに三国を見つめる。

「……いえ……」

三国が目を閉じる。

「……。悪かったな、呼び止めて」

目を開き、三国が司を見下ろす。

「もう行っていいぞ」

「……はい」

司が小さく頭を下げる。

「失礼します」
三国に背を向けて、司が出口に向かう。
三国がその背中を見送る。
「……」
司が教室をあとにしてから、三国が大きくため息をつく。
「……アルファ……二上……」
額に手を当て、眉間にしわを寄せる。
「クソ……なにかが引っかかる……」
それから顔を上げ、司が出ていった教室の出口をじっと見つめる。

人気のない廊下を司が歩いていく。
「……」
一人分の足音が続く。
「……なにかしくじったか……？」
目を伏せた司が呟く。
瞬きをして、顔を上げる。
しばらくして、司が立ち止まる。
窓側に視線を移し、夜空を見上げる。

窓側に視線を移し、夜空を見上げる

視線を動かしながら、窓際に近づいていく。

「……見えないな……」

じっと夜空を見つめたあと、顔を落としてため息をつく。

「………………」

目を細めてから、司は目を閉じた。

・　・　・

白く、靄のかかった世界。

「司は、いつもなんの本を読んでいたの？」

司と呼ばれた少年が顔を上げる。

立ち上がり、鞄のおかれた椅子のほうに歩きだす。

鞄から本を取り出し、元の位置に戻る。

「これ、『草枕』っていう夏目漱石さんの本」

そう言って本を高く掲げ、表紙を向ける。

「どんな内容の本なの？」

司が手を引き、本を見る。

「えっと……難しくて、僕もよくわからないんだ。学校でこの本の有名な一文を訳すっていう宿題が出されてて。せっかくだから読んでみようと思ったんだけど、すごく難しかった。そうなんだ」

司が本を開き、中を見る。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。アルファにはこの意味、わかるかな。先生は、それが社会だってまとめてたんだけど、よくわからなかったんだ」

「…………。確かに、難しいね。私にもわからないな」

「そっか」

司が本を見つめる。

・　・　・

「…………」

ゆっくりと司が目を開く。

窓際から身を引き、再び歩き出そうとした司の足が止まる。

「

「……顔を横に向け、空き教室に視線を向ける。
開かれた扉。
その奥に佇む人物を見て、司が目を見開く。
「！　ミリャ……」
司がミリャに体を向ける。
ミリャが口元に人差し指を立てる。
「？」
そのままミリャは、一歩、二歩とさがり、空き教室に入っていく。
司もミリャに続いて、その教室に足を踏み入れた。

ベランダから差し込む薄明かりを浴びるように、ミリャが夜空を見上げる。
司はその背中を見つめた。
ミリャが振り返り、初めて司に気付いたように目を丸くする。
首をかしげる司のもとにミリャが駆け寄る。
司が顔を引き、真下から自分を見上げるミリャを見下ろす。
「ミリャ……？」

ミリャが再び人差し指を口元に当てる。
「司くん、三国先生に跡をつけられてる」
「！」
咄嗟に振り返ろうとした司の服を、ミリャが慌ててつかむ。
「司くん、私を抱きしめるフリをして」
「えっ……」
口から漏れた声を押し殺すように、開いた口をゆっくりと閉じる。
「はやく」
「……」
両手をミリャの背中へ回すように、ゆっくりと上げる。
そのまま、じっとミリャを見つめる。
司の頬に汗が流れる。
ミリャに注ぐ薄暗い明かりに、司が顔を上げる。
夜空に見える半月が司の瞳に映り、司は目を見開いた。

・・・

[illegible]

白昼の空、バラバラになった紙片が舞い上がる。
はかなく散っていく桜の様に、散り散りになっていく。
その背後に、驚愕の表情を浮かべた少年の姿。
そうして、世界は反転する。

・
・
・

ミリャが司の襟元のネクタイを掴み、力を込めて引き寄せる。
「――」
二人の体の隙間がなくなり、唇が重なる。
世界から音が消えたように、辺りが静まり返る。
目を見開いた司がミリャを見つめる。
閉じられたミリャの瞳が、静かに開く。
お互いに見つめあい、瞳の中にそれぞれの姿が映る。
司とミリャの唇がゆっくりと離れる。
ミリャが自分の唇に指を触れ、そっとなぞる。
司は呆然とした様子でミリャを見つめていた。
顔を赤らめたミリャが目を伏せて押し黙る。

無音の時間が続く。
しばらくしてミリャが司の隣を横切り、出入り口から廊下の様子を覗き見る。
ゆっくりと振り返った司がミリャの背中を見守る。
「……………」
キョロキョロと廊下を確認してから、ミリャが司の前に戻ってくる。
「行ったみたい」
ミリャが目を伏せて言った。
司がミリャをじっと見つめている。
ミリャが居心地悪そうに、何度も司を見上げては俯いた。
「さ、さっきのはいつまでたっても司くんが動かないからっ……。その、お父さんを騙すための芝居で、フリだから、大丈夫だから。だから、その、気にしないでほしいっていうか……」
司の返事がなく、ミリャが恐る恐る顔をあげた。
「――――」

ミリャの体を、司が抱き寄せる。

「…………。司くん……？」

司の腕に力がこもる。

「ミリャ、ごめん。この気持ちは、もうこれで最後にするから」

「…………」

ミリャが両手を、司の背中に回す。

「……もし、次に君と会うことができたとして。その時は俺はもう、君の知る俺ではないかもしれない」

長い前髪が司の顔にかかり表情を隠す。

「……それでも、今ここで俺が感じているこの想いは、本物だ」

「…………うん」

ミリャも腕に力を込めて、強く司を抱きしめる。

「大丈夫。それでもきっと、一つだけ変わらないものがあるから」

司がうなずく。

「ああ……君と俺の叶えたい目的は一緒だ。それだけは必ず、果たしてみせるから」

二人の体がゆっくり離れる。

「君だけが知っていた世界を……今は俺も知っている」

ミリャが微笑む。

「うん」

・・・

二段ベッドの下段で日向子が寝息を立てる。
カーテンのわずかな隙間から薄い明かりが漏れる。
鳥の鳴き声がかすかに部屋に届く。
そこを、人影が音を立てずに静かに移動する。
壁側を向いて眠る日向子に影がかかる。
日向子の頭に、白い指先が優しく触れる。
「いってきます」
小さく囁いてから手を引き、人影は去っていく。
玄関から人が出ていく音がして、日向子は閉じた目を、ゆっくりと開いた。

ロビーの大きな窓ガラスから、ミリャが外を見渡す。
しばらくすると、パタパタとした足音が近づいてくる。
「すみません、ミリャ。お待たせしました」
ミリャがゆっくりと振り返る。
スクールバックを背負ったももが、タブレット持って立っていた。
「ミリャさん、おはようございます」
タブレットの画面から、トトが挨拶をする。
「おはよう、二人とも」
タブレットの画面から顔を上げて、ミリャがももを見つめる。
「それじゃ、行こうか」

夜明けの薄暗い空をミリャが見上げる。
「……涼しい」
そう呟いて、心地良さそうに目を閉じる。
「この世界が、作り物だなんて信じられない……」
大きく深呼吸してから、ミリャが目を開く。
「技術的特異点。この先の未来は、どうなっていくんだろうね」
「

「……」
ももが隣を歩くミリャを見上げてから、手元のタブレットを見る。
トトと目が合う。
「…………」
ももが顔を上げ、目の前の学園を見る。
「私は、変わりゆく世界をみんなで一緒に見送っていきたいです。ここで生まれた関係が、これから先、どう変化していくのか……私はそれが楽しみです」
ミリャが隣を歩くももを見る。
「力を持つということは、どこまでも孤独にある運命なのだと思っていましたが。今はミリャに必要としてもらえるこの力を誇りに思っています」
ミリャが照れくさそうにはにかむ。
「ももの技術力は、世界中の人から必要とされるような力だと思うけど」
ももがミリャをチラリと見上げる。
「ももちゃんは、私の好きな人に必要とされたことが嬉しいんですよ」
「…………」
ミリャがはにかんだまま頬をかく。

ももが小さく微笑む。
「私には気づけなかったことがありました。研究から離れた今……この環境だからこそ気づけたことがたくさんあります」
ももがタブレットの画面に視線を落とす。
トトが心配そうにももを見上げていた。
「他人なんていなくても、トトがいればいい。でも、私が作ったオリジナルのトトは、自分の写し鏡でしかなくて……自分にとって都合のいい『友達』でしかなかった」
「……」
ももが目を伏せる。
「トライメント計画にトトを連れていこうとしたときも、両親に全力で止められて……。結局、うまいこと誤魔化して私はこの世界でトトのデータを再構築しました。ですが、トトは自ら学習し……いつしか私ではなくなっていた」
ももがトトをじっと見つめ、画面を優しく撫でる。
「私の依存していた研究も、都合のいい自分自身も、ここにはなにもなくて。他人に触れざるをえなくなった状況で、私は初めて自分が何者なのか、気付くことができたんです」
「……もも」
ミノアがももをじっと見つめる。

ミリャがももをじっと見つめる。
ももがトトに微笑みかける。
「だから、今日のことは、命令ではありません。私は、一人の友人として……あなたにお願いしたい」
トトがももをじっと見つめ返す。
「私たちの未来を、よろしくお願いします」

東側に見える山に向かってミリャとももが歩いていく。
しばらく無言が続き、朝を唄う鳥の鳴き声が響き渡る。
北側へ続く道に差し掛ったとき、一台の車の音が二人の背後から聞こえてくる。
ミリャとももが立ち止まり振り返る。
車は二人の前で停車した。
「？」
「……なんでしょう」
エンジン音が止まる。
ミリャとももが顔を見合わせる。
運転席の扉が開く。
「えっ」

運転席から降りた日向子が扉を閉め、ミリャとももに微笑みかける。

「日向子さん……!!」

「おはよう、二人とも」

「……………っ」

ミリャの動きがピタリと止まる。

ももがその様子にチラリと目を向けてから日向子に向き直る。

「その……朝からお出かけですか？」

日向子が両手を前で組む。

「……お出かけというか……。見送りというか……」

ミリャとももが沈黙する。

日向子が困ったような微笑みを浮かべる。

「ごめんね、驚かせて。……二人は、これからひすがら草原へ行くんだよね」

「えっと……」

ももが横目でミリャを見る。

ミリャが日向子にうなずいた。

「そっか……。山頂まではすごく時間が掛かるし、足があると便利なんじゃないかな」

「……」
ももがおどおどと、日向子とミリャへ交互に視線を送る。
日向子が道脇に止めたバンの後部座席の扉を開ける。
「ほら、乗って。大丈夫、本当に山の麓まで送るだけだから」
「……」
ミリャがうなずく。
それから車に乗り込んだ。
もももそのあとに続く。
車の前で立ち止まり、日向子に頭を下げる。
「その、よろしくお願いします……」
「任せて」
微笑んだ日向子がうなずく。
日向子が扉を閉める、運転席に戻ってエンジンをかける。
「それじゃ。ひすがら草原へ」
会話のない車内。
後部座席から、ミリャとももが日向子を見つめる。
しばらくそうしてから、ミリャは俯いて自分の手元を見下ろした。

日向子がその様子をバックミラーでチラリと確認する。
「……日向子さんは、私たちがひすがら草原へ行く理由を知っているんですか？」
「うん、知らないよ」
日向子が前を向いたままこたえた。
「では、どうして……」
日向子が小さく微笑む。
「それは、着けばわかると思う」
「…………」
二人の会話に耳をかたむけていたミリャが、再び顔を伏せる。
それ以上会話は続かず、車は坂道を進んでいった。

広がる草原の手前に車が停車する。
車を背に、ミリャとももが草原に足を踏み出す。
眼前に広がる空を、ミリャは目を細めて見渡した。
「色々な知識を得ると、今まで見えなかったたくさんのことに目が向くようになる」

ミリャが日向子を振り返る。
「知ればおもしろいこともあるし、怖いものだったんだってわかるものもあって。……だから、知らないものを知って、経験を積んでたくさんのことを試してみたい」
「……………」
日向子がミリャを見つめる。
「ねぇ、ミリャちゃん。今の私は、紗希ちゃんの知っている頃と変わったんだよ」
そう言って日向子がミリャに微笑みかける。
ミリャが目を伏せる。
「だからね、紗希ちゃんが知りたかった知らないもの、今度は私がたくさん教えられると思うんだ」
日向子がミリャに歩み寄っていく。
「紗希ちゃんが私を外に連れ出してくれたように、今度は私がミリャちゃんを連れて行ってあげたい」
日向子がミリャの前で立ち止まり、その手を握る。
「ミリャちゃん」
ミリャが顔を上げる。
日向子の微笑みを見上げたあと、自分の手を握る日向子の手をぼんやり挑めた。

日向子の手が小さく震えていることに気付いたミリャが、ゆっくり日向子を見上げる。

「ミリャちゃん……。その時はまた、私と友達になってください」

震える声で日向子が言った。

「……」

ミリャが小さくうなずき、日向子の手を優しく握り返す。

二人を見つめていたももが微笑む。

「……それじゃ、日向子。いってくるね」

日向子の唇がかたく結ばれる。

「……うんっ」

ミリャがゆっくり手を離す。

「いってらっしゃい」

ミリャが歩き出し、ももの隣に並ぶ。

日向子が涙を拭い、顔を上げる。

それから二人に、穏やかな微笑みを向ける。

ミリャも日向子に微笑みを返した。

「いってきます」

風に吹かれる草原の中をミリャとももが歩いていく。
登り始めた朝日が海面に映る。
小鳥が羽ばたき、草原に影を落とす。
海からそよぐ風が、ミリャの頬を撫で、ももの髪を揺らした。
水釜がところどころに点在する草原をかき分けていき、二人がユウの後ろ姿を見つける。
「……………」
ユウは桜の木の下で朝日の上る方向を見つめていた。
「……あれは……」
ももが眉をひそめる。
ミリャが凛とした表情でユウに近づいていく。
そしてユウに対面するように立ち止まった。
その少し後ろにももが立った。
「……アルファ……」
ももの手元のタブレットの中で、トトが少女の名前を発する。
ユウがゆっくりと振り返る。
伏せた目を、二人に向ける。
「……………」
感情が読み取れない静かな表情で、ユウが二人を見つめる。

「……当然、私が止めにくることは、わかっていましたよね」

「………」

ミリャがわずかに顔をしかめる。

「どうか、お引き取りを」

ミリャが口を開き、なにも言わないままゆっくり閉じる。

「……時間がないんだ」

両手を強く握りしめたミリャが絞り出すように言った。

「みんな……人々は気づき始めている」

ユウが目を細める。

「疑問の種が芽吹けば、瞬く間に世界中へ広がる。この事件がどんな毒性を持っているか……あなたならわかるはずだ」

「……」

ユウが目を閉じる。

「では、逆にお尋ねしますが」

ユウの目が、ゆっくりと開かれる。

「あなたがたが今、頼うとしているその『人工知能』は危険ではないんですか？」

「……！」

ももが目を見開き、ぎゅっとタブレットを抱える。

「……」

「……」

ミリャがももに顔を向ける。

「私が止めにきた……いえ、削除しにきたのは、その『人工知能』です」

「……っ。トトは……っ。大切な友達です……っ」

タブレットを抱きしめるように、ももが胸に抱える。

「削除だなんて……っ」

ももがうつむく。

ユウの視線がももからミリャに戻る。

「自立する『人工知能』がどんな毒性を持っているか……あなたはよくわかっているはずです」

「……」

押し黙ったミリャが目を伏せる。

「ただ一方的に削除しようとは言いません。あなたがたは今、私の管理の届かない緊急保護サーバーへの移動を考えている。そこに自立した『人工知能』を連れていくと、その『人工知能』が暴走した場合の最悪の事態に誰も対応できなくなります」

「……」

ユウが両手を、おなかの前で組みなおす。

「私は、この世界においてなら、『トト』が活動することを黙認します」

「……」

ももが抱えていたタブレットを両手に持って、画面に映るトトを見下ろす。

ももとトトの目が合う。

トトがももに微笑む。

「もも、大丈夫ですよ。あなたにお願いされたことは、必ず守ります」

トトがミリャに視線を移す。

「ミリャ、『Ａｌｇｏｒｉｔｈｍ』にアクセスしてください！」

ミリャが目を見開いてトトを振り返る。

それから目を細めてうなずく。

「！」

ミリャが桜の木に向かって走り始める。

「……」

走ってくるミリャに向かってユウが手を伸ばす。

白い光が、ミリャを包み込むように集まる。

「……！」

それに抗うように、透明な防壁がミリャの周囲に現れる。
「……」
ユウが伸ばした片手をわずかに握る。
「！」
瞬間、ミリャを包んでいた防壁が消え、光がミリャを捉える。
「……っ」
ミリャの足が固まり、前方に倒れこむ。
風が止み、辺りが静まり返る。
「……」
ユウが目を閉じてゆっくりと手をおろして、深く息をつく。
目を開き、ももの手元のトトに目を向ける。
「……諦めてください。この世界で私の力をこえることは――」
パリンと、ガラスがはじけるような音がして、ミリャを包んでいた光が解かれる。
ユウが目を見開く。
「……え」
ユウがミリャを見下ろす。
ミリャが起き上がり、ふたたび桜の木に向かって走り出した。
「……っ」
ユウがミリャこ手をのばす。

光がミリャを包むが、その光はすぐに霧になって消えていく。
「！　……どうして……！」
ミリャの手が桜の木に触れる。
ユウがミリャの元に駆け寄る。
海面から上る陽に二人が照らされる。
桜が散り、吹き出した風に乗って舞い上がる。
ユウの走る速度がだんだん緩やかになる。
やがて立ち止まり、顔を伏せる。
「…………」
桜の木の下で、ミリャは眠るように倒れていた。
暗がりの空に朝日が登る。
ユウが桜の木を見上げ、落ちてくる花びらに手をそっと伸ばす。
ユウのてのひらから花びらが零れ落ちる。
「………」
目を細めてのひらを見つめ、やがて目を閉じる。
振り返り、草原に立つ人影に目を向ける。
「司」
静かな早朝に、風のざわめく音が伝わっていく。
枝が揺れ、桜が舞い、一枚の花弁がユウの横を通り草原に立つ司の

ほうに流れて落ちる。

「…………」

伸ばした手を、司がゆっくりとおろす。

司の背後からアイが顔を出す。

「……間に合ったようだね」

ユウに対峙するように、司とアイ、ももの三人が立つ。

ももが手元のタブレットに目を落とす。

画面にはなにも表示されていなかった。

「……」

桜の木の下で眠るミリャを見た司が目を細める。

そしてその視線をユウに向けた。

ユウが悲しそうに微笑む。

「……管理者権限。あなたが教えたんですね……アイ」

ユウが顔を伏せる。

「……それでは、私の負けですね」

アイが、俯いたユウを見つめる。

「……お姉ちゃん……」

風が吹き、アイの解けた髪が揺れる。

顔を上げたユウがアイの髪を見つめながら微笑む。

「まさか　自分自身に止められるなんて」

「ミミズ……自分自」って」とはねえ……」
「…………」
　ユウが、視線を司に向ける。
「…………」
「…………」
「司と見つめあってから、ユウが再び顔を伏せる。
「司……ごめんなさい……。私はあなたを守り切ることができなかった……」
　司が目を見開く。
「…………」
　悲しそうな表情のユウを、司がじっと見つめる。
　なにかを言いかけた口を、なにも言わないまま閉じて、司は手をぎゅっと握った。
「……智に働けば角が立つ」
　ユウが顔を上げる。
「情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい」
　司が目を伏せる。
「いつか、司が読み解けなかったこの言葉の意味が、最近になってようやくわかったよ」

「……」
　ユウが目を見開いて胸に手を当てる。
「覚えて……いるんですか……？」
　司がユウを見つめたまま、ゆっくりうなずく。
「……じゃあ、どうして……」
「……それを、俺も知りたい」
　司が目を細める。
「バラバラになった記憶のどれが本物で。どれが……俺の思い描いた理想の記憶だったのか」
　司が顔をあげる。
「それを、俺は知りたい」
「……」
　アイとももが司の背中をじっと見つめる。
　司が自分のてのひらを、目を細めながら見つめた。
「けどそれは、あくまでも私情だ」
　手のひらを握る。
「本当なら、この管理者権限を使って今すぐにでもみんなを現実へ返すべきなのかもしれない。でも、それでは世界に火種を残してしまう」
　手をおろすと、司が顔をあげる。

言をおとして、司が顔をあげる。
「検証していた新技術は危険なもの、多額の資金が投入された実験は強制的に中止。起きた問題に対して更にお金と時間が動いた果てに、未解決の問題だけが残される。技術的特異点の問題は、高度な新技術を用いれば、人ひとりで百人以上の成果を簡単にあげられてしまうことだ」
　司がまっすぐユウを見つめる。
「悪意のある人物が使えば計り知れない被害が及ぶ。そういう可能性を未然に防ぐための検証がトライメント計画に求められている。これは個人の問題じゃない。世界中の人々が当事者であり、だからこそ社会問題なんだ」
　司が顔を伏せ、自身の胸に手を当てる。
「俺はこの計画に起きた事件の真実を偽造する。これが自分で考え、決断した答えだ」
　顔を上げた司がユウを見つめる。
「アルファ」

目を閉じたミリャの上で、木漏れ日が揺れる。
緑の葉が一枚、ひらひらと舞ってミリャの額に落ちる。
ミリャは目を閉じたまま、額に手を伸ばす。
葉を掴み、それがなにかを確かめるように目を開く。
「……はっぱ」
ミリャがぼんやりと、空を見上げる。
空にかぶさるように、木の葉が風に揺れていた。
「………………」
ミリャが体を起こす。
なにもない広大な草原を見渡して、ミリャが立ち上がる。
土を落とすようにぱっぱと身を叩く。
「……」
背後にある木へ振り返り、もう一度顔を上げる。
ミリャの視線の先に、緑の葉をつけた桜の木が立っていた。
「……夏……」
しばらく木を見つめていると、ミリャの耳に声が届く。
ミリャが振り返る。
「……トト？」
草原の奥、山の内側の方から二つの影が歩いてくる。

「……」
しばらくその人影を見つめてから、ミリャが目を見開く。
「……」
口を開け、呆然とその姿を捉える。
「……」「……」
赤茶の髪をなびかせるあやめと、その少しうしろに立つ司。
二人がミリャのほうに歩いてきていた。
ミリャが眉をひそめる。
「……」
草原で三人が対面する。
草の上を風が駆けていく。
強い日差しが、流れる雲の影を落とす。
それぞれの出会いを象徴するように、夏の声が際立っていた。

夢の終わり

夜空に浮かぶ赤い月。
茶色い髪の少女が空を見上げる。
その瞳の中で、赤い月が揺れていた。
「紗陽」
少女が、声のほうに目を向ける。
「……………」
二人の少女が見つめ合う。
襟足を肩の上で切りそろえた少女が微笑んだ。
茶色い髪の少女がその微笑みを見つめる。
「お互い、挨拶がまだだったよね」
ショートカットの少女が手を差し伸べる。
「はじめまして、私は早乙女はづき」
茶色い髪の少女は目を丸くして、差し出されたてのひらを見つめた。
「……………」
二人が向かい合う。

「茶色い髪の少女は顔を伏せて、微かに表情をこわばらせる。
「すみません……私……」
少女は言葉をつまらせる。
手をさしのべた少女が微笑んで言った。
「実はさ、私たち、お互いに自己紹介を交わしたことがないんだ。だから、本当にこれが、はじめまして」
そう言って、手をさらにぐっと差し出す。
茶色い髪の少女は少し驚いてから、とまどったような微笑みを返す。
ゆっくりと手を、差し出された手に近づけていき――
二人が互いに手を握った。
「私は、甘利紗陽」
茶色い髪の少女がまっすぐショートカットの少女を見つめ、笑顔になる。
「ずっと会いたかった」

・
・
・

色濃い緑の葉の隙間から、太陽の日差しが注ぐ。
虫の鳴き声が風に乗り、その風が木漏れ日をゆらゆらと泳がす。
パジャマのような服を着た子供が、松葉づぇをつきながら草原を歩いていく。
よく手入れされた自然の中に、大きな病棟が佇んでいた。
ベッドに座る少女が日差しを浴びながら本のぺ一ジをめくる。
腕には点滴が付けられ、体は補助器具で固定されている。
あやめがぺ一ジをめくろうとして本を膝の上に落とす。
転がった本の表紙を見つめて、あやめがため息をつく。
『脊髄損傷理学療法マニュアル』といぅ題字をぼんやり眺めたあと、窓の外に視線を向けた。

　受付の前に立つ四宮が医師と向かい合っている。
「では、面会は可能なんですか？」
「はい。ですが、本人の精神状態は決して安定しておりません。くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします」
四宮が目を細める。

四宮が目を細める。

「……その、彼女の状態は医師のかたから見てどのような様子なんでしょうか」

「……驚くほど前向きに受傷の事実を受け入れ、自立を志しているようには見えます。リハビリに対しての意思から、これからの生活についても既にしっかり考えられていました。ですがそれは恐らく、現状の実感が持てていないのではないかと思っています。今は損傷レベルの診断中でして、星乃さんは理学療法士と作業療法士の指示を受けてリハビリに臨んでいる段階です。いずれはリハビリ専門の病院へ転院する可能性が高いので、そのように考えていただければと思います」

「そうですか……ありがとうございます」

そう言って四宮が頭を下げた。

病室の扉を開けた四宮が中に入っていく。

閉められたカーテンに人のシルエットの影が落ちていた。

四宮がベッドに近づいていく。

「先生……」

ベッドに寝そべるあやめを見下ろす。

四宮が微笑む。

「久しぶりだな、星乃」

ベッドに横たわったまま、あやめが視線だけを四宮に向ける。
四宮がベッド脇の椅子に腰かけ、あやめを見つめる。
「……すまないな。色々言葉を用意してきたつもりだったんだが……いざ君の姿を見て、なんて言えばいいのかわからなくなってしまった」
あやめが小さく微笑む。
「いいんです。正直、私も四宮先生がお見舞いにきてくださるとは思っていなかったので、なにを話したらいいか……」
四宮が目を伏せる。
「……そうだな」
沈黙が生まれ、あやめがチラリと四宮を見上げてから目を伏せる。
「……すみません。ずっと見てくださっていたのに、連絡もできなくて」
四宮が顔を上げる。
「いや、謝るのは私のほうだ」
再び四宮が目を伏せる。
「正直、君の我慢の限界には気づいていた……それでも私は、君を止められなかった。私が、上り詰めを見送った

めなかった。……私が、止め時を見誤った」

　あやめが、小さくゆっくり首を振る。

「先生が止めなかったのは、それを乗り越えた経験があったからだと思っています。……たぶん、私は……見つけられなかったんです。うまく向き合っていく方法を」

「……。私も、見つけられなかった。やはり、師であるはずの私の落ち度だ」

　四宮があやめの目を見てから目を伏せる。

「すまない」

「……」

　あやめが四宮をじっと見つめてから、ゆっくりと天井へ視線を移す。

「……でも、見つけられたんです。音楽と向き合っていく方法を」

　四宮があやめを見る。

　あやめが静かにまばたきをする。

　そのまま顔をおろして、視線を自身の両足に向ける。

「……」

「今は麻痺の具合を診断している段階ではあるんですが……ずっと両足の感覚が感じられないんです。お母さんとお父さん、そして両足を失って……それで考えたんです。新しい生活のこと。リハビリをし

て、自立生活を送って、お金を得るために仕事を見つけて……」
「あやめが言葉をつまらせる。
「……余裕ができたら、また違う楽器を始めてみるかもしれません」
四宮が目を細め、顔をゆがませる。
「………」
なにかを言いかけた四宮が、そのまま口を閉じ、息をついた。
「……そうか」
あやめが目を伏せる。
「……」
目を閉じた四宮がゆっくり呼吸をして、ふたたび目を開く。
「星乃、またきてもいいか？」
「……」
あやめが小さくうなずく。
四宮が微笑む。
「……ありがとう」
席を立ち鞄を手に持ってあやめを見下ろす。
「君が無事で、本当によかった」
そう言って四宮はその場をあとにした。
あやめが四宮の背中を見つめる。

「…………」

・

・

・

ビジネスバッグを手にした男性が廊下を歩く。
男性の硬い足音に、細いタイヤがロビーの床を踏みしめる音が混ざる。
三国が音のほうに目を向ける。
その視線の先に、車椅子に乗ったあやめがいた。
看護師に車椅子を押されているあやめが、視線を三国に向け、二人の目が合う。
三国が軽く会釈し、二人がすれ違う。
三国はそのまま、病院の出口に向かった。

窓際に立つ三国が草原を眺める。
その視線を、手元の腕時計に向ける。

「や、三国さん」
三国が振り返ると、七瀬がロビーを出て三国のほうに歩いていた。
三国が微笑む。
「ご無沙汰だな」
七瀬が苦笑する。
「いや、君が無事でなによりだよ」
三国が眉を寄せる。
「……どういう意味だ」
「三国さん、いつ見ても死相が浮かんで見えるようだからさ」
そう言って七瀬が三国の隣に立つ。
「…………」
三国が前を向く。
「紗希の件は今のところうまく進んでいる。トライメント計画も……一応は順調だ」
七瀬がチラリと三国を見る。
「なにかあったのか？」
三国が顔を伏せ、うなずく。
「……レイ先生が急死された」
「…………」
七瀬が目を見開

七瀬が目を見開く。
「……大問題じゃないか」
三国が小さく相づちをうつ。
「トライメント計画が始まる直前のことだった。お陰で公社内は、計画の見合わせが騒がれるほどバタついてね。無事に計画を終えた今でも、うちの機関は対応に追われ続けている」
「…………」
七瀬が前を向く。
「……先生がいなくて、大丈夫なのか……？」
「先生が不治の病にあったことは知っていたからね。もちろん対策はしてあった。なにより、先生はご自身が亡くなった時のことを想定して、遺書に後任や対応について書いていた」
七瀬が三国を見つめる。
「もしかして、大出世か」
「ばかな」
三国が苦笑いを浮かべる。
「二上だよ」
「おお――……」
三国が腕を組む。
「積もる話はあるが、今日は聞きたいことがあってきた」

「ふむ？」
七瀬が三国と同じように腕を組む。
「なんだい？」
三国がチラリと七瀬を見る。
「以前、私の娘と一緒に入院していた、箒木日向子といぅ女の子についてだ」
机に広げられた紙を、三国が立ったまま見つめる。
その三国の背中を、斎藤がじっと見守る。
「……なにも、ここまでやらなくてもいいと思うんですけどね」
三国が手を止めず、机上の資料をめくっていく。
「例えば、町中の人物を無差別に集めて、同じ家で一年間の共同生活をするように定めたとしたら、うまくいくだろうか」
「まあ、不明確ですね」
「そうだ。最適な環境を作るということは、人選の段階で始まっている。そのための適性検査だ。人間関係を築きやすく、有意義な生活を送れる環境を作るために、機械は関連性の近い人物を算出する。結果

に基づいたことを我々が行うことで、この計画の土台をより最適なものにしていく必要がある。こういった偶然に任せない論理的な選択が、この計画が目指さなくてはいけない『環境作り』なんだよ」
「……こうやって正しい最適解を導き出すことができるようになったら、私たちの選択もまた、初めから決められていくんですかね」
「大切なのは思考する行為そのものであって、未来を拒絶することではない。私たちは過去を反省して前に進むべきなんだ」
三国が資料を閉じ、一枚の紙を手に持つ。
振り返り、その紙を斎藤に渡す。
「次は、この子ですか」
三国がうなずく。
「箒木日向子。彼女の務める会社の取引先として潜入し、彼女と仲良くなってほしい」
「で、傾向があればトライメント計画へ誘うと」
「あくまで紹介のみだ。選択は彼女に任せる」
渡された紙に目を落としたまま、斎藤が後頭部をかく。
「それにしても、今回はなかなか限定的な選定ですね？」
「……そういうこともある」
斎藤が目を細め呆れたようなため息をつく。
「心理カウンセラ一の仕事も多種多様になったもんですね」

そう言って紙を畳み、鞄に入れる。
「わかりました。謹んでお引き受けします」
「よろしく頼」

・
・
・

ベッドに横たわったあやめが本を読んでいる。
病室の扉が音を立てて開き、あやめが本から顔をあげる。
車椅子に乗った祖母が、病室に入る。
遅れて、車椅子を押している叔母も病室に足を踏み入れた。
「あ……」
叔母があやめに会釈する。
「度々ごめんなさいね。お母さんがどうしてもあやめちゃんに会いたいって言うから連れてきたの」
あやめが叔母を見てから、祖母を見つめる。
祖母は表情を変えず、あやめをじっと見つめている。
「おばあちゃん……久しぶり」

祖母があやめをじっと見つめ、涙を浮かべる。

「……！」

祖母の口がぱくぱくと動く。

あやめがうなずく。

「……！……!!」

祖母は俯き、声にならない声をあげながら泣いた。

「……おばあちゃん」

祈る様に両手を擦り合わせながら、祖母があやめの両足に手を伸ばし手を震わせる。

「……っ」

あやめの目じりに涙が浮かぶ。

両手を祖母の手の上に重ねる。

二人のすすり泣く声が、病室の空気に溶けていった。

・
・
・

男性が受付で面会証を見せる。

カウンターの内側の女性が会釈する。

カウンターの内側の女性が会釈する。
男性は病棟の地図に目を向け、歩き出す。

扉がノックされてから開かれる。
「失礼、渡会だ」
渡会が病室に入り、あやめの前まで歩いていく。
あやめが渡会を見上げる。
渡会は会釈をしてから、椅子を引き寄せて腰かけた。
姿勢を正そうとするあやめを、渡会が手で制する。
「そのままでいい」
渡会が前屈みになって両手を膝の上で組む。
「今日はね、改めてあやめさんの意思を確認しにお伺いした」
あやめが目を伏せる。
「以前伝えたように、祖母君の奈美恵さんは、伯母上様の一家が引き取ってくれることになりそうだ。本来であれば奈美恵さんが後見人に選ばれるが、彼女も介護が必要な身だ。父君もご実家とは絶縁状態にあるし、親類からの後見人の選出が難しくなっている」
渡会が両腕を組む。

「あやめさんは一人で自立していくことが困難な状況にある。ご家庭の事情から後見人の選出が難しい場合、未成年後見人の選任を我々家庭裁判所に任せることもできる。この場合、裁判所は最も君のためになると判断できる人物を選ぶ。ここで決定というわけではないが、君の意思を改めて聞かせてほしい」
　あやめがうつむく。
「私は……」
　ゆっくり顔を上げて、渡会に視線を向ける。
「リハビリをして、在宅復帰しようと思っています。来年、私は二十歳になります。これから一生付き合っていかなくてはいけない体ですから、自立生活を目指したいです」
　渡会が目を閉じ、腕を組む。
「そうか」
　そう言って目を開き、あやめを見る。
「今回の場合は遺書も存在しない。相続登記、遺産分配を行っていくことになるが、その際には専門の事務所に委任するのがいいだろう。ご両親が残した財産、今回不慮の事故によって発生した慰謝料を合わせれば、しばらく生活を維持することは十分可能だ。住んでいる市や町の役所には福祉事務所が存在する。なにかわからないことがあれば、彼ら公的機関のプロに頼るといい」

い。彼の人的機関のことは頼っていい」
「ありがとうございます」
　渡会がうなずく。
「あなたはしっかりしている。だが、頼るものは頼ったほうがいい。あなたはまだ子供なのだから」
　そう言って渡会が立ち上がる。
「リハビリ専門の病院に転院するそうだな。次はそちらに伺うことになる。その時はよろしく頼む」
　あやめがうなずく。
「では、失礼する」
　渡会が病室の出口に向かう。
「ありがとう……ございました……」
　渡会が振り返り、会釈して病室をあとにした。

・　・　・

　横長の机が並ぶ会議室の席が参加者で埋められている。
　各人物は壇上に立つ男性に視線が集っていた。

参加者の中には三国と伊砂もあり、部屋の隅の席に座る二上はぼんやりとした視線を天井に向けていた。

司会が壇上に向かい、大きなスクリーンを背にマイクに顔を近づける。

「本日はお忙しいところ、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただいまより、ＬＥＡ総会を開催したいと思います。私は司会進行役の小林と申します。よろしくお願いします。第一回トライメント計画が無事に終了し半年が過ぎました。計画に参加された被験者の方々はもちろん、運営に関わった各機関もそれぞれの目標を達成し、当計画への感謝の言葉が寄せられております。今後とも明確で安全な運営進行のもと、参加者のかたがたが目標を定め、明るい未来に向かって卒業を迎えられるように頑張ってまいりましょう。さて、本日の総会の流れを説明します。まず伊砂会長の挨拶がございます。そのあとに、本日お集まり頂いた各機関より事業報告、今後の活動方針の説明をおこないます。どうぞよろしくお願いいたします」

その後、続いて会長の伊砂が壇上に立つ。

その様子を、周囲の人々が静かに見守る。

「改めて、当計画の目的について表明させていただきます。トライメント計画。表向きは模擬就学制度による若年者再就職支援プログラムとして語られていますが、その真なる目的は『新たな時代を正しく切

として掲げていますが、その真の目的は新たな時代を正しく切り開き、社会問題を最適化する仕組みを作ること』にあります。当計画は、『ＲｅｌｉｅＦ』の次代システムを担うための、『人工知能研究所アルファ』による情報統制・管理・判断に基づいたシステムの最適化――。それと、『神経内科学研究機関エミス』の『Ｏｍｅｇａ』による、人体情報のデータ化、それにより導き出される新たな医療技術の治験――。その二つの新技術検証をベースに、『社会福祉公社リーフ』によって統制された組織が運営しています。技術は、しばしば生活を便利にするために発展してきましたが、今の高度な新技術を知識がないままに乱用するのは危険だと言えます。だからこそ、正しい活用方法を世間に示し、すべての人々が納得できる形で変革の力を治めなくてはなりません。そして、新しい技術によってあらゆる観点から現状問題を最適化し、より良い未来を築いていくための環境を我々が作り、次世代へ繋いでいく。これが、我々の目指す『トライメント計画』です」

東雲がストローをすすり、カフェオレのグラスを空にする。
東雲の対面に座る颯太が、氷とオレンジジュースの入ったコップをくるくると揺する。
「まあ、同い年である僕たちの存在は星乃さんにとってはあまりにリアルな存在だろうからね」
東雲がストローから口を離し、視線を外に向ける。
「……」
「それに、星乃さんって演奏がうまくなることを楽しむよりも、うまくできない自分が許せないってタイプだと思うんだよね。これからピアノを続けていくなら嫌でもその事実に向き合うことになるし、今の状況でそんなの、精神がもたないよ」
「……そうよね」
東雲がため息をつく。
「今更会いに行ったって、嫌な顔されないかしら……」
颯太が目を伏せる。
「……僕が思うに、星乃さんに必要だったのは、一緒に歩いていける存在で。でも、それが今では僕たちが星乃さんの目の前に現れることで、彼女の中に確実に『同じ演奏者の今』として僕らが映ると思うんだ。それが星乃さんの思考の中に残り続けて、リハビリや自立生活への復帰を邪魔する可能性は大いにありえる

「の復帰を邪魔する可能性は大いにありえる」

「…………」

颯太が体を背もたれに預ける。

「お互いに辛い面会にはなるだろうけど……それ以上に、星乃さんは不安だと思うから」

東雲が小さくうなずいてからうつむく。

颯太がじっと、東雲の不安げな表情を見つめた。

そしてコップに残ったオレンジジュースを一気に飲み干した。

「それじゃ、行こうか」

顔を上げた東雲が颯太を見る。

「……そうね」

東雲が、隣の椅子におかれていたカゴを手にとる。

カゴいっぱいに飾られた菖蒲の花を、東雲はぼんやりと見つめた。

「あやめさん、花とか好きなイメージそんなになさいのよね」

「ふふ。でも名前の通り、その花彼女にすごく似合うと思うな。退院祝いに送るにはぴったりな花だってお花屋さんもいってたし」

東雲が小さく微笑む。

「そうね」

東雲が席から立ち上がる。

「行きましょうか」

東雲を見上げてから、颯太も立ち上がった。

病院の入り口に医師と看護師が並ぶ。

車椅子に乗ったあやめと叔母が彼らに頭を下げ、医師達も同じように会釈した。

「どうするの？　星乃さん、行っちゃうよ」

少し離れた木々の隙間から入り口を見ていた颯太が振り返る。

東雲も同じように、あやめたちに視線を向けていた。

「……やっぱり、今日は止めにしない？」

「ええ――――っ⁉」

「バカ！　声がでかいっ」

颯太が右手を口に当てて身を隠す。

「今日やらなくていつやるのさあ」

颯太が呆れたように言った。

「あやめの親戚のかた？　もいるし、なんか気まずい雰囲気になったら嫌じゃない……だから、明日とか……」

「明日は用事があるからムリ」

「う

シ、シ……」
萎縮する東雲を見て、颯太がため息をつく。
「ピアノの話はしない。退院の祝福だけ。ただでさえ御見舞いに行けてないんだから、この機会しかないよ」
「……」
東雲が俯いて目を瞑り、大きく深呼吸をする。
顔を上げ、病院の入り口に視線を戻す。
「……行きましょう」

病院の入り口を離れ、あやめが叔母に車椅子を押されていく。
病院の敷地を出る辺りで、あやめの目の前に東雲と颯太が現れる。
「……」
目を見開いたあやめが二人を見る。
東雲がおずおずと前に出て、菖蒲の彩られたカゴを両手で持つ。
「……その、あやめさん……退院、おめでとうございますっ」
そう言ってカゴを差し出す。
あやめが静かにうなずく。
「ありがとう」

東雲の差し出したカゴをあやめが受け取る。
お互いに視線を交わして、沈黙が訪れる。
その様子を眺めていた叔母がハンドルから両手を離す。
「あやめちゃん、私ちょっと家に電話をかけてくるわ」
あやめが振り返って叔母を見上げる。
「あ、はい」
叔母が東雲と颯太に顔を向ける。
「お二人とも、ありがとう。あやめちゃんのこと、よろしくお願いしますね」
そう言って携帯を鞄から取り出しその場を離れていく。
残された三人が叔母の背中を見送る。
少しの間があり、颯太がゆっくり口を開く。
「星乃さん、退院おめでとう」
あやめが颯太を振り返る。
「あ、ありがとう」
颯太が微笑む。
「入院中、一度も御見舞いに行けなくてごめんね。正直、僕たちがすぐに会いにいくのは、精神的によくないかなって思ってたんだ」
「ああ、そうだったんだ……。なんか、気を遣わせちゃってごめんね」

ね」

「いやいやっ、こちらこそ。不安にさせちゃってたらごめんね」

「私は大丈夫だよ。リハビリも結構頑張って一通り一人でこなせるようになったから、家に帰ったら早速新しい生活を始めていこうかなって」

「そっか。さっきの方のところで一緒に暮らすのかな？」

下を向き、自分の足をあやめが見つめる。

「あ、ううん。実家で一人暮らししていくつもり」

黙っていた東雲が顔をあげる。

「えっ？」

あやめと颯太が東雲に顔を向ける。

「あ……その、そうなんだ」

「うん」

東雲はしばらくあやめを見つめてから、再び目を伏せた。

「あやめさん……一気に大人っぽくなったわね」

あやめが困ったように微笑む。

「なにそれ、どういう意味？」

東雲があやめに目を向ける。

「いえ。あやめさんは、やっぱりすごいわね」

「そんなことないよ」

あやめが微笑んだまま言った。
「二人とも、綺麗な花、ありがとう」
東雲と颯太が微笑む。
「あやめさん、菖蒲の花言葉って知ってる？」
「……そういえば知らないかも」
東雲があやめの抱える籠の中の菖蒲を見つめる。
「花言葉は、『良き便り』や『メッセージ』、あとは『希望』だそうよ」
「へぇ、いい言葉だね」
「ええ。見た目にも、あなたらしさを感じるわ」
「私らしさか……」
あやめが菖蒲を見下ろして小さく微笑む。
東雲がその様子をじっと見つめる。
「いつから一人暮らしを始めるの？」
あやめが顔をあげる。
「今日から」
「えっ」
東雲が言葉を詰まらせる。
「……随分、早いんじゃない？」
「[illegible]

「なるべく早く自立していきたいから」
「そう……」
東雲が俯き、再びあやめを見つめる。
「また、遊びに行ってもいいかしら」
あやめがキョトンと東雲を見つめてから微笑む。
「うん、なにもないけど」
「なに、今の間」
あやめが東雲から目をそらす。
「そういえば、音楽がなかったら私たちってなにをするのかなって思って」
「……」「……」
東雲が両手をぎゅっと握る。
「そんなの、いっぱいあるわよ、きっと。あやめさんにもなにか、新しい趣味ができたら是非共有して欲しいわ」
「うん、そうだね。ごめん、変なこと言って」
「本当に遊びに行くからね」
「うん、楽しみにしてる」
東雲がチラリと、遠くの方でこちらを見守る叔母に目を向ける。
「それじゃ、私たちはそろそろおいとまするわ」
あやめがうなずき、颯太を見上げる。

「山崎さんも、ありがとうね」
「いいえ。落ち着いたら、僕のことも是非仲間に入れてほしいな」
あやめがうなずく。
「またね、あやめさん」
「うん、またね」

無機質な音を立てながら電車が走る。
窓からさす夕陽が、長椅子に座る東雲と颯太の背中を照らす。
東雲は俯き、颯太は携帯を操作している。
ゆっくり顔をあげた東雲が、窓の外の景色に目を向ける。
「…………」
電車が緩やかに減速し始め、颯太が立ち上がる。
「それじゃ、僕はここで」
東雲が颯太を見上げる。
「うん、今日は付き合ってくれてありがとうね」
「いやいや、こちらこそ。呼んでくれてありがとう」
窓の外にホームが見え始める。

「私、またすぐにあやめさんの家に行ってみるわ」
「うん、それがいいかもね」
東雲が微笑む。
電車が停車し、扉が開く。
「では、また大学で」
「うん、またね」

玄関を出ていく叔母をあやめが見送る。
「それじゃ、なにかあったらすぐ連絡するのよ」
あやめが軽くお辞儀をする。
「色々わがままを言ってすみません。ありがとうございました」
叔母が微笑み、手を振る。
あやめもそれに手を振り返す。
静かな家の真ん中に、あやめの乗った車椅子が佇む。
膝の上で手を揃えて、あやめが部屋をゆっくり見渡す。
あやめの視線が、一つの扉にとまった。
扉を開け、菖蒲の入ったカゴを抱えたあやめが部屋の中に入っていく。

中には埃を被ったグランドピアノがおかれ、窓際に飾られている花は枯れている。
車椅子を進め、あやめの指がグランドピアノに触れる。
それから窓際に車椅子を進め、枯れた花の横に菖蒲の入ったカゴをおく。
花瓶の隣におかれた楽譜とルーズリーフバインダーにあやめの視線が止まる。
手に取り、ゆっくりぺージをめくっていく。
最後のぺージが開かれ、微笑むあやめが両親の間に立っている写真を、あやめが見つめる。
口を小さく開き、すぐにきつく結ぶ。
写真の上に、一粒の涙が落ちた。
ぽつぽつと、雫が増えていく。
「……っ」
あやめが写真を抱きしめ、部屋に嗚咽が響いていく。
暗い森林の中。
その家の明かりは小さい。
静かな虫の声が夜空に響いていく。

・　・　・

駅前のロータリーで東雲が手を上げる。
隅に停まったタクシーの後部座席の扉が開き、東雲が乗り込んだ。
「すみません、東田園都市前までお願いします」

タクシーの窓から東雲が景色を眺める。
遠くからサイレン音が聞こえ、タクシーはハザードをつけて停車する。
走り去る救急車を、東雲が目で追った。
再びタクシーが走り出す。
「今日は救急車が多いよ」
東雲がフロントミラー越しに、運転手の顔に目を向ける。
「そうなんですか？」
「ええ、熱中症には早い季節ですから、なにか事件でもあったんですかねえ」

「事件ですか……」

タクシーの扉がしまり、東雲が小さく頭を下げる。

走り出したタクシーを見送ってから、東雲が森林に顔を向ける。

森林の奥からで赤いランプが点灯しているのが木々の隙間から見えた。

「東雲が……」

東雲が歩き出す。

その歩幅がだんだん大きくなっていき、やがて走り出した。

舗装された道を抜けた東雲が、家の前にたどり着く。

口を開けて荒く息をしながら、目の前の家を見上げる。

救急車が走り出し、東雲が呆然と見送る。

サイレンが遠のいていき、東雲が家のほうに視線を戻す。

東雲の視界に、四宮が佇んでいる姿がうつる。

「四宮先生」

東雲が四宮に駆け寄り、四宮が顔を上げる。

四宮の表情に失意の色が浮かんでいるのを見て、東雲が息を飲む。

「ああ……東雲」
「なにがあったんですか？　あやめさんは？」
四宮が目の前の家を見つめる。
警察が家の中に入っていき、周囲にキープアウトのテープが張られていく。
やがて、四宮がゆっくり口を開く。
「自殺だ」
「え？」
「私がきたときは、大量の服薬が行われたあとだった」
東雲の表情が凍りつく。
「……え、どうして？」
「通報された四宮さんですか？」
二人のもとに、警察官が歩みよる。
二人が振り返り、四宮がうなずく。
「すみませんが、車の中で状況など、事情聴取させて頂いてもよろしいでしょうか」
「……はい」
警察官に連れられ、四宮がパトカーに入っていく。
東雲その背中を見送り、それからあやめの家をじっと見上げる。
周りの喧騒が遠のいていき、東雲の意識の中で、サイレンの音だけ

が大きくなっていく。
目を見開き、体の力が抜け、その場に両ひざをつける。
東雲の瞳に、大粒の涙が脹らんだ。
「あやめ……」

・　・　・

ルーズリーフバインダーの最後のページが開かれる。
フレームにはなにも入っていない。
その空白を、あやめが見つめる。
パタリと閉じて、引き出しにバインダーをしまう。
「……ふぅ」
一息ついて、引き出しが閉じられた。

・　・　・

中央のテーブルを挟んで文実と喜羽が向かい合う。それぞれノートパソコンを開き、キーボードを叩いている。沈黙とタイピングの音が交互に繰り返される。キーボードから両手を話した喜羽が口を開く。

「最近、河居はどうしてるんだ？」

「……相変わらず、ずっとあやめと一緒に勉強会してるよ。織鶴がデッサンを教えて、あやめが音楽理論を教えるみたいな」

ディスプレイから目を離さずに文実がこたえた。

「ふむ」

「……あとは、第二地区のあの子たちとギター練習してるんじゃないかな。すっかりバンドマンみたいになってるよ、織鶴」

再びカタカタと打鍵音が続く。

喜羽が黙ったまま、文実にチラリと視線を送る。

「夏杞、お前はもう進路計画書は提出したのか？」

文実が人差し指を唇にあて、じっと画面を眺める。しばらくしてから、ゆっくり口を開く。

「したよ」

「……そうか。なんて書いた？」

「え―　地元のIT会社に就職

んー……地元のＩＴ会社に就職」
喜羽が画面を眺める文実を見てから、自分のノートパソコンの画面に視線を向ける。
「なんて会社だ？」
「……ええ、なんで」
「俺もそこにしようと思ってな」
「……ふーん」
何度かうなずいてから、文実が顔をあげる。
「え？　なんて？」
喜羽が顔をあげ、文実の視線を見つめ返す。
「俺も、進路先を夏杞の行く会社にしようかと」
「はい？　なんでさ」
喜羽が両手を組む。
「地元って名古屋だろ。俺、近いし。生活が安定するまでは実家から通える場所にするのもアリかと思ってな」
「まあ、わかるけど。でもＩＴ会社っていっぱいあるじゃん」
「……エアーリーディングだ、夏杞」
「ごめん。わかんない」
そう言って文実が両手をあげる。
喜羽が目を閉じてため息をつく。

それから目をあけて、文実を見つめた。
「卒業したら、俺たちはこのままバラバラになるんだろうか」
文実が目を細め、あげた両手を床につけて体を預ける。
「ま、そりゃ住んでる場所も目的も違えば、ここはあくまで就職支援学校だからね」
「……だな」
文実がキーボードに手を乗せる。
打鍵しては、バックスペースを連打する。
それを何度か繰り返した。
「……でも、卒業後もまた会おうよ。みんなでさ」
喜羽が文実を見て微笑んだ。
「そうだな」
喜羽がキーボードを叩いてから、エンターキーを押す。
「まずは先立つ友人を祝ってやらないとな」
「あやめ？」
「うむ。どうやら、二十三日に発つことが決まったらしいぞ」
「あ、そうなんだ……。……よかった。ぎりぎり誕生日は迎えられそうだね」
喜羽がうなずく。
「じゃあ、予定通り二十二日に送別会かな

「じゃあ、[illegible]は二十二日に送迎会だな」
「ああ。女子は頼るか？」
「もちろん」
喜羽が微笑む。
「決まりだな」
文実が顔をあげる。
「……あやめは受験かぁ」
喜羽がノートパソコンの画面を見つめる。
「三ヶ月も卒業が早いのに、もう二年は経った感じがするな」
そう呟いてから、喜羽がまたキーボードを叩き始める。
文実はしばらく、作業を進める喜羽を眺めていた。
「他に、手伝わなくていいの？」
「ん？　ああ」
「本当に？」
喜羽がキーボードを叩く手を止める。
じっと画面を見つめ、再び手を動かす。
「いいんだよ」
文実が困ったような微笑みを浮かべる。
「案外、あたしたちって似たもの同士なんだね」

・
・
・

車椅子に乗ったあやめが中央のテーブル向かい、それを囲むように、翔、織鶴、文実、喜羽、八馬が立っていた。
あやめ以外の手にはクラッカーが構えられている。
「あやめ、誕生日おめでとーっ！」
パンという音と共に、、クラッカーから飛び出した色とりどりのカラーテープが放たれる。
それがあやめの頭にもかかり、あやめは照れ隠しするように目を伏せた。
「あ、ありがとう。みんな」
全員が微笑み、拍手を送る。
「それじゃあ、みんなからあやめにプレゼント！」
カラーテープが髪についたままの文実が手をパンと叩いた。
全員の視線が文実に集まる。
「……おい、喜羽。ケーキだよ！　やくしろよ！」
「あ、そうだった」

喜羽がクッと息を飲んで、クラッカーを持ったまま冷蔵庫に向かっていく。
翔が喜羽を追いかけてキッチンに向かい、顔を赤らめた文実が二人の背中に視線を送る。
「はい、これはあたしからのプレゼント」
あやめが文実を見上げて、それを受け取る。
「わあ、ありがとう。開けていい？」
「どぞどぞ！」
箱を包むリボンを解き、包装を丁寧に開けていく。
その様子を全員が見守った。
ケーキの箱を持った喜羽とお皿を持った翔が戻り、テーブルにおく。
「わ、かわいいハンカチ」
あやめが箱の中からハンカチを手に取り広げる。
文実が微笑みながら、あやめを眺めた。
「え？」
喜羽が文実を振り返る。
「ん？」
「プレゼント、俺もハンカチなんだが」
「はい!?」

「あらまあ」
　文実がわなわなと口を震わせる。
「今から変えてきて!!」
「まあまあ、いいんじゃないか。右手にハンカチ。左手にハンカチ。ウィンウィンだ」
「やだ!　喜羽と同じ思考レベルっていうのがやだ!!」
　文実と喜羽が言い争いを始め、それを眺める面々が苦笑いを浮かべる。
「さて、私からはコレです」
　織鶴があやめに、黒いペン状のものを差し出す。
「これって……デザイナーズボードのオプションペンだよね」
「そそ。包装とかなくてごめんね。一応、私が使ってたおさがりなんだ。便利だから是非使ってみて」
「いいの……?　河居さんの仕事道具だよね」
「いいのいいの。私はもう使わないし、これから勉強していく人に使ってもらいたいから」
「……ありがとう、大事にするね。河居さん」
　織鶴が微笑む。
　入れ替わりに、八馬があやめの前に立った。
「[illegible]

星乃さん、僕からはこれを。できれば、受験が終わったあとに開けてもらえると嬉しいです」

八馬があやめに封筒を渡す。

「わ、なんだろ。すごい気になる」

「本当は卒業式あたりで渡そうと思っていたのですが。地味なもので申し訳ありません」

「ううん、中身はすごく気になるけど……ありがとうございます、終わったら開けてみますね」

八馬が一歩引き、カメラを構えた翔が正面からあやめの写真を撮った。

あやめがきょとんと目を丸くする。

「私からはこれをプレゼント」

翔が手に持ったカメラの紐を、あやめの首にかける。

あやめがそのカメラを見つめる。

「これって……」

「うん。トライメント計画での思い出がいっぱい詰まったメモリーカード入りだよ」

「…………」

あやめがカメラをぎゅっと握る。

顔をあげ、翔をまっすぐ見つめる。

「ありがとう、翔」
あやめが嬉しそうに微笑んだ。
空になったケーキの箱がテーブルに開かれている。
取り分けられた人数分のお皿にもケーキは残っていない。
テーブルの端に車椅子をつけて座るあやめを、翔、織鶴、文実、喜羽、八馬が囲んで座っている。
「ねえねえ、あやめ。美大受験ってどんなことするの？」
「えっと、そうだな……」
ぼんやりと天井を見上げながら、あやめが指をくるくるとまわす。
「私はデザイン科専攻だから、デッサンと平面構成かな」
「デッサンって、織鶴といつもやってたアレ？」
あやめがうなずく。
「美大だと、どの学科でもやるみたい。平面構成は、なにかモチーフとなるものが配られて、それを元にキャンバス上に構成する感じかな。あ、国語や英語みたいな学科試験もあるよ」
「なんか、順位を決める基準がよくわかんないなー」

「実際、明確な答えが見えないという意味では、何度も浪人を重ねる人は多かったりしますしね」
喜羽が片手で顎をさする。
「そんな試験をくぐった奴らは、就職活動も難なくこなすんだろうな」
「う一ん……有名な芸術大学の就職率は1割切るっていわれてるけどね……」
「すくなっ！　ええ……燃え尽きちゃうとか？」
「まあ、それもありますけど……表現者にとって、自分の表現を仕事にどう活かすかを見つけるのが、意外と大変だったりするんですよ」
「ああ一、なるほどね」
「結局、自分の能力を見極めてプレゼンしなくちゃいけないって点ではみんな同じわけか」
四人の会話に盛り上がるのを、翔と八馬が見守る。
「なんか、こういうの久しぶりだね」
八馬が翔に視線をむける。
「そうですね。夏のフェスティバル以来、でしょうか」
「あ一、そうだね」
翔が頬杖をつく。
「もう年末かあ。物凄く長くも感じるし、短くも感じるなあ」

「充実している証拠ですね」
八馬がマグカップからコーヒーを一口飲み、楽しげに会話を続ける
四人に目を向ける。
「とは言え、やはり一年は短いですね。なにかを見つけるには十分でしたが、勉強はせいぜい準備するくらいが限界でした」
「あくまでも、これから挑戦するなにかを見つけさせることに重点をおいてるんだろうね」
「間違いありませんね」
八馬が翔に顔を向ける。
「君島さんのこの九カ月間は、どうでしたか？」
翔が八馬をチラリと見る。
「後半はみんな勉強に必死で、自分も頑張ろうって気になれたからよかった」
そう言って目を伏せた翔が苦笑する。
「問題はこれからだな」
翔が楽しそうに会話を続けるあやめを見つめる。
「……そうですね」

翔が、あやめの乗る車椅子をゆっくり押す。
二人と向かい合うように、織鶴、文実、喜羽、八馬が立つ。
「それじゃ、あやめちゃん。応援していますよ」
あやめが微笑む。
「うん、ありがとう。頑張るね」
「あやめ、あたしたちが卒業したら絶対また会おうね」
「うんっ」
あやめと翔も手を振り、その背中を見送る。
喜羽が立ち止まり、二人を振り返った。
「…………」
あやめと喜羽の視線がぶつかる。
遅れて、他の三人も立ち止まった。
それから、文実が織鶴と八馬の背中を押して前に進み、廊下の奥に消えていく。
喜羽があやめを見つめたまま、ゆっくり口を開く。
「……またな、星乃」
あやめはただ、喜羽をまっすぐ見つめていた。
喜羽が振り返り、あやめに背を向ける。
「喜羽くん」

歩き始めた喜羽の背中にあやめが声をかけた。
喜羽が振り返る。
「……」
あやめが口を開いて、閉じる。
それから微笑みを浮かべる。
「私、ちゃんと合格を勝ち取ってくるから。全部終わったら、いつか……小夜湖に連れていってね」
喜羽が口を小さく開き、右手を左胸に当てる。
「ああ。任せろ」
喜羽も微笑みを浮かべてから、背を向けて歩き出す。
穏やかに微笑んだ翔が、あやめの後頭部を見つめる。
静かに廊下の奥へ歩いていく喜羽を、あやめは見つめていた。

ベッドにおかれた大きなボストンバッグにあやめが荷物をまとめていく。
中身いっぱいに詰め込み。蓋を閉める。
「これで全部かな？」

両手を腰に当てベッドの前に立った翔が、あやめを見下ろす。
あやめが翔を見上げてうなずいた。
翔が微笑み、ベッドに腰かける。
「……本当、あっという間だったな」
「……うん」
あやめが目を伏せる。
沈黙が、微かな夜の音を際立たせる。
二人はしばらく、顔を伏せていた。
やがて、翔がぶるりと身を震わせる。
「さむっ」
あやめが顔をあげ、二人の目が合う。
そのまま翔は、あやめをじっと見つめた。
「？」
翔がスリッパを脱ぎ、ベッドに上がる。
あやめがその様子を見守る。
「さむさむさむい」
翔がもぞもぞと、布団の中に入っていく。
「ので、今日はここで寝ます」
布団にくるまった翔があやめを見上げる。
あやめがクスリを笑い、ボストンバッグをベッドから降ろす。

それから、布団をめくり、翔の隣に入り寝そべる。
「翔は、夏至生まれだもんね」
「さむい」
あやめに身を寄せ、翔が丸くなる。
翔をチラリと見てから、あやめが天井に視線を移す。
「…………」
ぼんやりと天井を眺めながら、ゆっくり口を開く。
「翔」
「うん？」
体を丸めている翔が、あやめに顔を向ける。
あやめが瞬きをする。
「私、音楽を諦めてはいないからね」
「…………」
翔があやめをじっと見つめる。
「…………」
目を伏せた翔が口を開き、なにも言わずに閉じる。
「今は、病気を治すために治療に専念しないといけないから」
「……うん」
「きっと、翔もそうなんでしょ」

翔が目を見開き、あやめを見上げる。
あやめも翔に顔を向けていた。
「…………」
二人の視線が交わる。
「なんの病気かは知らないけど……、わかる気がする」
「……うん」
翔が目を伏せ、あやめが翔の手を取った。
「……私、少しずつだけど思い出してきたんだ」
「えっ」
翔が顔を上げる。
「……っと……」
翔が目を泳がせ、下を向く。
「翔は、私が記憶喪失だってこと……、それに、過去にあったことも、全部知ってるんだよね」
「翔が息を飲む。
「…………」
顔を伏せて、翔が小さくうなずく。
あやめが微笑みを浮かべる。
「この場所で過ごして、自分の記憶と向き合って……わかったことがあるの。翔も気付いていると思うけど、私には人格が二つあってね。

この翔も気付いていると思うけど、私には人格が二つあって、そ
それぞれの人格は、記憶を切り分けているみたいなんだ」
「…………」
「多分だけど……私が失った記憶は、ピアノを辞めるまでの記憶で。
もう一人の私は、ピアノを辞めたあとの記憶全てを切り離したんだ。
そうして生まれたのが私」
翔が目を見開いてあやめを見上げる。
「……そんな……。……そんなことって……ありえるの……？」
あやめが静かにうなずく。
「人間って、すごいよね」
そう言って、あやめは笑った。
「……あやめ、大丈夫なの……？」
翔があやめを覗くように見てから、ふたたび顔を伏せる。
「いや、大丈夫なわけないか……」
「大丈夫だよ」
あやめが翔の手をぎゅっと握る。
「翔がいたから」
「…………」
「最近までは事故のあとの記憶は忘れていたんだけどね。それを思い
出したんだ。でも、今の私からすると、当時の出来事も、もう色あせ

たもので。そう感じることができたのは、今の私がみんなに支えられて、翔という存在がいて……過去にピアノを頑張った自分がいたからだと思う」
　あやめが微笑む。
「きっと、私が思い出せたのは、私を理解してくれたあなたに、答えたいと思ったから。だからありがとう、翔」

・・・

　太陽が水平線の果てから顔を出す。
　その光に照らされて、西側に寮の影が伸びる。
　すっかり枯れ果てた木と、地面に残る残雪。
　あやめが白い息を吐く。
　手をこすりあわせ、助手席から窓の外を眺める。
「あやめ、覚えてるかな」
　ハンドルを握る翔があやめに言った。
　あやめがバックミラーごしに翔を見る。
「ここにきた初日、伊沙先生が私たちを学園に送る最中に言っていた

ここは未来都市　伊砂先生が私たちを学園に送る最中に言っていたこと」
　あやめが前に視線を向ける。
「あー、ごめん。あの時はいっぱいいっぱいだったから……覚えてないかも」
「あはは、まあそうだよねぇ。伊砂先生、『社会』っていう言葉は人間と人間のあらゆる関係を指したもので、その関係を支援することがこの計画の目的だって話をしていたんだ」
「あ、うん。確かにそんなこと言ってた」
「職業病っていうか、漫画に登場する人物の関係性はどうだったかなとか、その時は考えてたんだけどさ」
　翔が目を細める。
「あやめにとって、私たちの関係は、どういう関係だったんだろうなって」
　あやめがキョトンと目を丸くする。
「それはもちろん……」
　あやめが口を閉じて顔を伏せ、顎に指を触れる。
「お、船だ。もう到着してるね」
　あやめが顔を上げ、目の前に広がる海を眺める。
「ほんとだ……」

海に浮かんだ大きな船。
車は中央通を進んでいき、船着き場に向かっていく。

船の下で、翔が船上員に荷物を渡していく。
あやめは少し離れたところに車椅子を乗りつけていた。
船上員が荷台に運んでいくのを見送ってから、翔は船を見上げた。
あやめが、船を見上げる翔の横顔を見つめる。
「……」
あやめが目を伏せる。
翔があやめを振り返り、困ったような微笑みを浮かべた。
「なんか、名残惜しいね」
船の乗船口にタラップが接続され、乗船準備ができたことが大きく伝えられる。
乗船を待っている人々の目がタラップに向けられ、あやめと翔も同じように視線を移す。
船上員のアナウンスが流れ、再びあやめと翔が向き合う。
「翔は、どうして私をルームメイトに選んでくれたの？」
翔が目を丸くする。

翔が目を丸くする

「そっか……話、聞いたんだ」
「うん」
　翔、困ったように苦笑いを浮かべて、島の内側に目を向ける。
「あやめなら私をわかってくれるんじゃないかって――。あやめの過去を聞いて、勝手に期待したんだ」
　遠くを見つめたまま翔、翔がつぶやいた。
　あやめはその横顔を見つめていた。
　翔の目にかかった髪が、風に揺られる。
「嬉しい」
　翔があやめを振り返る。
「……どうして」
　風が二人の髪をなびかせる。
　あやめが、顔に掛った髪をかきあげた。
「だって、私の過去に価値を感じてくれたんでしょ。私の辿ってきた過去は、無駄じゃなかったってことだよね。それを翔は証明してくれた。だから、すごく嬉しい」
　翔が口を開く。
　目をうるませながら、震える唇を噛みしめる。
「でも……それは……。それは、過去のあやめじゃないか」

顔を伏せた翔が、両手を握りこんだ。
「それなのに、私はずっと今のあやめに……忘れたいと思ったはずのあやめに……勝手な期待を寄せていた。同じであってほしいと……どこかで強制していた……っ」
あやめが穏やかに微笑む。
「だからこそ、私は思い出したんだ」
翔が、涙の浮かんだ瞳をあやめにむける。
「きっとどこかで、過去の私も願っていたんだよ。今を変えたいと」
あやめが翔を見上げる。
「そこに、あなたが現れた。同じ表現者でありながらも、異なる表現方法を持った、あなたが。辛くても辛いと言葉にしない、必死に今を生き抜こうとするあなたが」
静かに微笑んだまま、あやめが目を伏せる。
「私は、そんな翔に憧れた」
翔が目を見開き、涙が頬を流れた。
「翔、私たちの関係はなにかって聞いたよね」
翔が涙を拭いながらうなずく。
「過去の私は、ピアノを演奏したくないと感じていたと思う。それは、抗いようのない感情で。でも、私は……それを超える感情を、翔に教えてもらった

に教えてもらった」
あやめが顔を上げて、翔を見つめる。
「今の私は、あなたに答えるために演奏したい」
船の影が、水面に揺らめいていた。
鮮やかな日差しが翔を照らす。
あやめが車椅子を前に進め、光の中にいる翔の両手を手に取る。
「たとえ音楽ができなくても、今の私は諦めないよ。別の表現で、必ず翔に答えてみせる。翔、終わらせよう。苦しい記憶や病の全てに決着をつけて、ゼロから新しい人生を始めよう。私にはあなたが、あなたには私がいる。私たちの関係は、友人でも親友でもない。――戦友だ」

――出航の合図を船が鳴らす。
大きな船体が海をかき分けて北にゆっくり旋回し、やがて水平線に向かって行く。
翔がその船を見守る。
船が汽笛をあげ、船端のデッキに影が動く。
目を見開いた翔の視線の先に、立ち上がったあやめの姿があった。

唖然とする翔に向かってあやめが手を振る。
翔はしばらくその様子を眺めてから、手を大きく振り返す。
やがて、船のデッキから一筋のフラッシュが光る。
翔が目を丸くして、困ったように微笑む。
それから鞄に手を入れ手鏡を取り出し、太陽を反射させる。
きらりと光った鏡に応えるように、船上からフラッシュが光る。
翔が微笑みを浮かべてから腕を下げ、しゃがみ込む。
離れていく船を見上げて、大きく息を吸い込んだ。
「ああ、世界はとっても広いね、あやめ」

・　・　・

暗闇の中、連なった提灯がぼんやりと灯っている。
その明りが水面に揺らめいていた。
小さな神社に列をつくる人々。
神社の前にはおおきな篝火が焚かれていた。
人混みの中に、織鶴と文実、喜羽、八馬が集まっている。
「あと、十秒です」
周囲から、『八』と声が響く。
それに続き、周囲のざわめきが集団でのカウントダウンに集約していく。
「五！」
「四！」
「三！」
「二」
『一』と、神社に集った全員の声が揃う。
「ゼロ――――！！！」
うおおー、という歓声が大きく周囲に響いていく。

拍手と、いたるところからあがる『おめでとう』という声が重なる。
「明けましておめでと――っ!!」

喧噪のなか神前に並ぶ人々の列に、喜羽と文実が並んでいた。
「わあぁぁぁ……」
押し寄せる人の波に飲まれ、前へ前へと二人が押し込まれていく。
「すごい人ですね……」
二人と離れたところから、織鶴と八馬も同じ列に加わる。
「それでも並んでしまうのは日本人だからなんでしょーかねぇ」
ばらけていた列が、だんだん規則正しくなっていく。
八馬が、横並びになった列の右斜め前あたりに視線を向ける。
八馬の視線の先にいた喜羽がその八馬に気づき手を上げる。
八馬も同じように手をあげて返した。
「いやあそれにしても、学園の人間が一堂に会すると、通う人数の多さ改めて実感できますね」
「そうですね。こういう時、地元の方々との関係性だとか、周囲への

影響をつい考えてしまいます」
「八馬さんらしいね」
八馬と織鶴が、列の先に見える鐘をぼんやりと眺める。
何度か鐘が鳴らされたあとで、織鶴が周囲を見渡し、八馬の視線が自分に向いていることに気付く。
「ん、どうしました？」
八馬がゆっくり前に向き直る。
「いえ……」
「？」
「その、文実さんとは……普段どういった話をされるんですか？」
「ああー」
織鶴がうなずきながら顔を上に向ける。
「うーん、そうですねー」
顎に指をあてて織鶴が考える。
八馬が横目で、織鶴の横顔を盗み見た。
「……やっぱり、その日あったことの話なんかが多いですね。お互い、やってることも違うから、話題には事欠かないです。最近だと、私が音楽活動にはまっているので、好きなアーティストの話とか。あんまり年は離れてないのに、結構世代差を感じますね。私は古い音楽が好きなんですが、文実の好みは現代的で、結構若く

が好きなんですが、文実の好みに近代的で、結構若々しいんですよねー」

「なるほど」

織鶴が八馬に顔を向ける。

「八馬さんは、好きなアーティストとかいますか？」

八馬がきまずそうに頬をかく。

「それが、音楽や表現媒体に関しては疎くて……ここにきて初めて知ったものが多いですね。ニュースを見たり、正直、趣味と言えるものがほとんどなくてですね。雑学本を読むくらいなんです」

「あー、でも私も雑学は好きだよ」

八馬が微笑む。

「僕は運動が苦手なので正明とも趣味が合わなくて。でも、正明がずっと話してくれるので会話が止まることはあまりないですね」

「それはわかる気がする」

織鶴が小さく笑う。

「じゃあ、文実とは普段どんな話をしてるんですか？」

八馬が片手を口に当てて考える。

「いつも文実さんが色々質問をしてくださって、それに僕が答えるというやりとりですね……。気を遣われているのではと心配で……僕は小難しい話ばかりで、いまいち洒落の効いた話ができないんです」

「ほー」
織鶴がぼんやり空を仰ぐ。
「でも、文実はその辺気にしてないと思いますよ。あの子、聞き上手というか、割と他人の夢とかそういうのに興味ありありですからね」
織鶴がなにかを思い出したようにハッと目を丸くして八馬に顔を向ける。
「そうそう、個人的に結構意外だったのが、文実って子供好きなんですよねえ」
「ああ、そうですね」
「あ、知ってました？」
八馬がうなずき、織鶴が前を向く。
「そう考えると、文実ってＩＴとかデスクワーク向きじゃないですよね。人とふれあって、誰かの笑顔が見えるような職業が向いてそう」
「……たしかに、それは一理ありますね」
織鶴が文実に目を向ける。
文実は喜羽となにかを楽しそうに話している。
「八馬さんだから教えちゃうんですけど……文実って普段は心理カウンセラーの勉強とかしていて」
八馬が織鶴に顔を向ける。
「あの子、ああ見えて苦労の多い人生送ってるから、なおさら人を

あの子、あぁ見えて苦労の多い人生を送ってきたから、なおさら人を相手にする職業は向いていると思うんですけどね」

織鶴が上目遣いに八馬を見る。

「……という、ステルスマーケティングをしてみたり」

「…………」

キョトンとした八馬が、小さく首をかしげる。

しばらく織鶴を見つめてから苦笑いを浮かべた。

「さすが、旅行会社で営業を担当していただけのことはありますね」

織鶴が二ッと微笑む。

「でしょー」

八馬が文実を見つめる。

文実が振り返り、二人の目が合う。

文実が小さく手を振り、八馬も同じように手を振り返した。

参拝を終えた八馬が、神前から左手によける。

織鶴がそれに続き、二人が歩き出す。

「あっ、織鶴」

織鶴が振り返る。

「お、つっき──！　きてたんだ！　あ、あけおめことよろ！」
織鶴がそう言って手を掲げる。
「明けましておめでと──！　織鶴、今年もよろしくねっ」
天草がその手にハイタッチした。
「他のバンドメンバ──の人たちもきてるんですか？」
「うん、あっちでバカやってる」
「おおっ、そうなんだっ」
織鶴が八馬を振り返る。
「ごめん、八馬さん。ちょっとだけ友達に挨拶してきてもいいですか？」
八馬がうなずく。
「正明や文実さんには僕から伝えておきます。参拝も済みましたし、部屋で合流しましょう」
「ごめんね、ありがとう。ちょっと行ってきますっ」
織鶴が駆けだし、天草が八馬にお辞儀してからそのあとに続いた。
八馬が辺りを見渡し、境内の隅で文実と喜羽が腰を下ろしているのを見つける。
八馬が歩き出し、ゆっくり立ち止まる。
文実の伸ばした足に、喜羽が絆創膏を貼っていた。

文実が困ったように笑い、喜羽がそれに微笑みを返す。
八馬はその様子をじっと見つめてから、踵を返して反対側に歩き出した。

木々の間を抜け、屋台の広がる場所に八馬が出る。
立ち止まった八馬が連なる提灯を見上げる。
「あ、八馬さん！」
声のするほうを八馬が振り返る。
「ああ、あなたは……」
八馬が六車に向き直り、小さく会釈する。
「あのときは展示ブースにきてくださったのに、まともに挨拶もできずすみません。投票用紙、見ました。ご丁寧に感想までいただき、ありがとうございました」
六車が両手をぶんぶんと振る。
「いやー、いいんですよお！　それよりも覚えていてもらえてよかったー」
足元をふらつかせながらそう言って、姿勢を正す。
「明けましておめでとうございますっ。僕、『六車』むぐるま『虎次郎』

こじろう」って言います。今年もよろしくお願いしますね一」
　そう言って、顔を赤くした六車虎次郎が挨拶した。
「ああ、これは失礼。僕は八馬奏といいます。謹んで新年のご祝詞を申し上げます」
　八馬、もう一度、軽くお辞儀する。
　その様子を見て、六車が小さく笑う。
「あれ、八馬さんはお一人ですか？」
「……はい、仲間とはぐれてしまったようです」
「あらあ。まあ、先に帰っている様子がなければ、下り階段の前で会えるでしょうね」
　六車が八馬に微笑む。
「行きます？」
　八馬が小さく微笑む。
「あとで向かいます」
　六車が不思議そうに首をかしげる。
　それから、八馬の隣に並ぶように立つ。
「そうだ。八馬さんは卒業後どうされるんですか一？やっぱり就職ですか？」
　八馬が六車に顔を向けてから前を向く。

「今は、起業することを考えています」
「ええっ!?」
六車が八馬に勢いよく顔を向ける。
「……マジっすかぁ」
八馬が小さくうなずき、六車が上を向く。
「いや……そうですね。よく考えたら驚きはないっすね。驚きましたけど」
八馬が苦笑し、六車がチラリと八馬を見る。
「え、どんな事業をやるんですか？」
八馬が顔を伏せる。
「……社会福祉公社LieFと、おおむね同じような福祉事業を考えています。もともとは直接就職することを考えていたんですが、ここにきてアイデアを得て……。と言っても、初めは伝を頼て、民間公共事業会社のコンサルタントやアシスト業務を経て実績を積むところからですね」
「ほうほうほう」
八馬が六車に顔を向ける。
「六車さんは、どうですか？」
キョトンとした六車が二ッと笑う。
「僕も起業しますよお。おかげさまで、色々計画の現実性が見えてき

たんで！」

「そんな」

八馬が謙遜して首を振る。

「あとは結婚ですね。事業が安定し始めたら、ゆくゆくは考えていきたいっすねぇ」

「なるほど」

上を向いていた六車が、再び八馬を見る。

「八馬さんは、そういうお相手とかはいないんですか？」

八馬が首をかしげてから前を向く。

「僕の考える事業は、収入、環境、立場……すべてが安定しないので、今は厳しいと考えています」

「ふーむ、なるほどー」

六車がチラリと背後に視線を向ける。

その視線の先の草木が揺れた。

六車が八馬の顔を覗き込む。

「あ、あの子はどうなんですか？　あの、夏フェスの時に一緒に出展していた子」

「ああ……そうですね」

八馬が顔を伏せる。

「彼女のことは……気になってはいますが……」
ガサリと音がして、八馬が振り返る。
「？」
しばらく音のしたほうを見つめてから、八馬がまた前をむき直す。
「あのかたは若いですし、今はとても大事な時期です。そんな貴重な時に……僕は待たせるばかりになってしまうかもしれない。それに、僕は恐らく仕事中心の人間です。二人の時間をうまく作りながら働く自信もないんです」
「なるほどなるほど」
六車が前を向いたまま、横目でチラリと八馬を見る。
「じゃあ、好きではあるんですね」
八馬が六車に顔を向けて首をかしげる。
「ええ……まあ……」
八馬が前を向く。
「一緒にいて、安心できるかたですね」
六車が微笑む。
「それはいいですね」
しばらく歩いてから、六車が一歩前に出て八馬を振り返る。
「すみません。僕トイレに行ってきたんで、そろそろ戻りますね」

「ああ、そうでしたか。お引き留めしてすみません」
八馬が足を揃えて立ち止まる。
「お話、ありがとうございました」
「こちらこそ」
六車が手を差し出す。
「八馬さん。これが終わっても連絡取りあいましょうね」
八馬が微笑み、差し出された手をとる。
「ぜひ」
六車も微笑みを返す。
「それじゃ！　ハッピーニューイヤー！」
手を振りながら、六車がふらふらと去っていく。
苦笑を浮かべながら、八馬はその背中を見送った。

八馬が神社の中央あたりで立ち止まり、周囲を見渡す。
境内を囲む木々に目をやるが誰の姿もない。
八馬がため息をつく。
「なにをやっているのか……」

「顔を伏せている八馬の背後から、足音が近づく。
「奏くんっ」
八馬が振り返る。
「あ、文実さん」
着物を着こんだ文実が、頬を赤らめて立っている。
「すみません、迷子になってしまって……」
文実が呆然と八馬を見つめる。
その視線に、八馬が首をかしげる。
「？」
「あっ、えっ、ううんっ。大丈夫大丈夫、ノ一プロブレム。うん」
顔の前で手を振りながら文実が何度もうなずく。
八馬が首をかしげたまま文実を見つめる。
「そういえば、正明は？」
そう言って八馬が周囲を見渡す。
「あっ、喜羽は奏くんを探しにいくって。はぐれないように、あたしは中央で待機してたの」
「それは、申し訳ない……」
「ううん、人でいっぱいだしね」
文実がチラリと八馬の背後に視線を投げる。
「そういえば、識鶚はどうしたの？」

そういえば、織鶴はどうしたの？」

「ああ」

文実の視線を追いかけるように八馬が後ろを振り返ってから文実に顔を向ける。

「先ほど、第二地区のご友人の集まりへ挨拶に行きました。あとで、部屋で合流することになっています」

「あ、なるほどね。織鶴は顔が広いからな──」

文実がうなずきながら言った。

その様子を見て八馬が微笑む。

「あ、奏くん。こっちで待っていよう」

そう言って文実が歩き出し、八馬がそのあとに続く。

無言のまま二人が歩く。

文実の髪と振袖が揺られるのを、八馬が背後から見つめる。

文実は両手を前に組み、少し俯きながら歩いていた。

「…………」

会話を交わすことのないまま、文実と八馬が境内の端で立ち止まる。

文実が八馬を振り返り、二人の視線がぶつかる。

文実が八馬の視線に驚いて目を丸くし、ふたたび頬を赤らめる。

八馬の視線からゆっくりと目をそらして口を開き、なにも言わずに

「

閉じる。
「文実さんの着物姿、とても綺麗ですね」
文実が目を見開いて、ゆっくり顔をあげる。
二人の目が合い、八馬が微笑む。
「すごく似合っています」
文実の顔が真っ赤に染まる。
目が泳ぎ、戸惑いながら文実がうつむく。
「あ……、あり、がとう」
うつむいた文実を見つめていた八馬の頬も、文実と同じように赤らむ。
八馬も視線を逸らし、向かい合った二人がそれぞれ別の方向に顔を向ける。
そこに、大股の足音が近づいてくる。
「おお。奏、見つかったか」
喜羽が駆け寄ってきて、文実と八馬を交互に見つめる。
「ああ……おかえり、正明。迷子になってごめん」
「ん、ごくろうさま」
頬を赤く染めている二人に、喜羽が順番に顔を向ける。
「　　　　」
何往復かそうしてから上を向き腕を組む。

「……」
深く呼吸しながら喜羽が目を閉じる。
「喜羽？」
喜羽が目を開け、文実を見る。
「すまん。今、空気の読み込みが完了した」
喜羽がうなずいてから、腹部を両手でおさえる。
「がぁっ……急に腹痛が……っ！」
その場に膝から崩れ落ち、苦しげな顔を二人に向ける。
「ぐ……すまん。腹が痛いので俺は先に寮へ帰ろうと思う……」
八馬が眉をひそめて、文実がポカンと口を開く。
「へっ？」
文実が慌てて、顔の前で手をブンブンと振る。
「あっ、いや、いいよいいよ」
文実が喜羽の背中をポンと叩く。
「はい、治った」
振り返り、神社の外側に向く。
「それじゃ……行こ」
文実が歩き始め、喜羽と八馬がその背中を見つめる。
「……」
それからお互いに顔を見合わせる。

喜羽がゆっくりと立ち上がり、二人も文実のあとに続いた。
クレープを持った文実とビニール袋を持った八馬が木々の合間に立っている。
そこにクレープを持った喜羽が駆け寄ってくる。
「それじゃさっさと部屋に戻るか。夏杞の怪我のこともあるし」
八馬が目を見開き、文実に顔を向ける。
「文実さん、怪我されていたんですか？」
文実が片足を軽くあげる。
「ただの靴擦れだから大丈夫だよ」
差し出された足の白足袋を八馬が見つめる。
「正直俺が寒い。帰ろう」
「えーっ。……ったく、しょーがないなー」
楽しげに会話を交わす二人を、八馬がじっと見つめる。
「喜羽、ほんとチョコバナナ系好きだよね。さっきも食べてたじゃん」
「フレーバーにチョコバナナがあったら選んでいるだけだ」
「なかったらなに頼むの？」
「頼まない」

頼ない」

文実が二人の前を歩き出し、喜羽と八馬がそのあとに続く。
喜羽が速度を緩めて八馬の横に並ぶ。
「おい、奏」
「はい」
「どこ行ってたんだ、お前」
「すみません、少しお手洗いに」
「ああ……なるほどな」
喜羽が前を向く。
「しかし、女子っていうのは大変だな。今日だけのために結構手間かかってるぞ、あれ」
八馬が喜羽を見上げてから、文実の背中を見つめる。
「そうだろうね……。実際、普段見られない姿というのは、驚きがあるというか……。やっぱり、綺麗だよね」
「………」
喜羽が八馬を見つめる。
「それは、夏杞には言ってやったのか？」
八馬がチラリと喜羽を見上げ、すぐに前に視線を戻す。
「……言ったけど……」
「……ふむ」

喜羽も前を向く。
「ならいいが……。」
喜羽が訝しげに八馬を見る。
「……………………」
「……お前、わかっているのか？」
八馬が喜羽を見上げる。
「？」
喜羽が目を細める。
前を向き、後頭部をかく。
前を歩く文実に視線を向けたまま喜羽が目を細める。
「夏杞のあれは、お前に見せるためだろ」
「……」
八馬がぽかんと口を開ける。
そのまま、ゆっくり立ち止まる。
喜羽が何歩か歩いてから足を止め、八馬を振り返る。
「どうした？」
八馬がハッと息を飲む。
「いや」
八馬が再び歩きはじめ、喜羽の隣に並ぶ。
「……ふむ」
会話がないまま、三人がのぼうへ歩く。

会話がないまま、二人がしばらく歩く。
八馬が文実の背中をぼんやり見つめ、そのあとで周囲を見渡す。
着物姿なのは文実だけだった。
しばらくして、着物姿の女性が、男性と連れ立って歩いてきた。
楽しげに会話をしながら神社に向かうのを、八馬が横目で見送る。
「……。正明、ごめん」
「？」
喜羽が八馬を見下ろす。
「二人きりに、してもらえないかな……」
恥ずかしそうに頬を染めて八馬がつぶやく。
「喜羽がポカンと口を開けてから微笑む。
「任せておけ」

屋台の通りを文実と八馬が歩く。
二人とも無言のまま顔を伏せていた。
文実がクレープの最後の一切れを口に含み、ごみを小さくまとめる。
「喜羽も、寒いだの腹痛だのトイレだの、忙しい奴だね」

文実が困ったように小さく笑う。

「え？」

八馬が文実を見てから前を向く。

「そうですね……」

文実が八馬を見上げて口を開き、ゆっくりと閉じて顔を伏せる。

「…………」

「…………」

再び二人が無言になる。

文実の歩幅に合わせるように八馬が歩く。

周囲の賑わいが、二人の静けさを際立たせる。

「文実さん」

文実が八馬を見上げる。

「ん、なにかな？」

八馬が文実の表情を見てから、視線を逸らす。

「……えっと」

八馬が顔を伏せる。

「……呼んでみただけです」

「…………」

八馬の横顔を見つめて文実が首をかしげる。

それから小さく笑う。

それからくすりと笑う。
文実が穏やかな表情で前を向く。
そのまま顔を伏せて、ゆっくり口を開く。
「……奏くんはさ……多分、色々なものが見えていて……だからこそ、言葉にできないんだろうね」
八馬が顔を上げ、文実の横顔を見つめる。
「そうやって準備をしているうちに機会を逃すんだと言う人もいるけど。それだけ、奏くんは過去に失敗をして、完璧を強く求めるようになって……だから、慎重に、確実な準備をしているんだと思う」
八馬が目を丸くする。
「あたしはそんな、“長所”であり“短所”を抱えた奏くんを好きになったから」
「…………」
八馬がやや顔を伏せる。
「……参りましたね」
八馬が困った様に微笑む。
文実が照れながら笑い、夜空を見上げる。
「ま、だからあれです。仮に失敗したり、だめだったとしても……あたしはそんな時、一緒に悩んで解決したいといいますか……。奏くんの夢は、あたしの夢でもあるから」

文実が手をもじもじと動かし、更に頬を赤らめる。
「……」
微笑んだままの八馬がゆっくりうなずく。
「……そう、ですね」
文実が八馬に目を向ける。
「確かに、同じだ」
前を向いた八馬が、寮に歩いていく人々を見る。
「僕が変えたいと願ったものは、人々の抱えた『モラトリアム』なんです」
文実が八馬を見つめる。
「あらゆる人々が、変えがたい今を、変えてもいいという理由を見つけられるように……」
八馬が目を細める。
「僕の本当の両親が手放した、『僕』という変化を受け入れられるように」
八馬が下り階段の前で立ち止まる。
文実が一段下ったところで八馬を振り返る。
八馬が階段の先をぼんやりと見つめる。
「けど、人は変わらない……変われなかった。だからこそ、僕はその

根底にある本質……『環境』を変えたい」
八馬が一歩踏み出し、階段を一段降りる。
文実と八馬が並ぶ。
八馬が文実に体を向ける。
二人の視線が交わる。
八馬が手を差しだす。
文実がその手を見つめ、そこに、ゆっくり自分の手を近づけていく。
二人の手が触れる。
八馬が文実の手を優しく握る。
文実が、赤くなった顔を上げて八馬を見つめる。
八馬も同じように頬を赤らめながら微笑む。
一人の女性が、一段上から二人を見下ろす。
その女性の姿をとらえた文実が目を丸くする。
「ちっ」
文実と八馬の体がビクリと跳ねる。
八馬が道をあけるように文実に身を寄せる。
「す、すみま……。せん……」
伊砂が階段をおりていく。
その背中を、青ざめた文実と八馬が見つめる。

伊砂の足音が聞こえなくなったあと、互いに顔を見合わせる。

「…………」

「…………」

二人が苦笑いを浮かべる。

「……帰ろっか」

八馬がうなずく。

「……そうですね」

手を繋いだまま、二人が長い階段を降り始めた。

白く透き通った空。

木に降り積もった雪がドサリと下に落ちる。

鳥が羽ばたき、空に消えていく。

人がまばらになった境内を翔が歩き、参拝に向かう。

白い息を吐きながら、神前で軽く一礼をする。

翔がかねを鳴らし、深いおじぎを二回する。

手のひらを少しずらして両手をあわせる。

二回の拍手で乾いた音を鳴らし、再び手のひらを揃え、最後に深い

おじきをする。
振り返った翔が目を見開く。
「……！」
境内の人気はなく、翔の正面にぽつんと、ユウだけが佇んでいた。
ユウが微笑み、頭を下げる。
「ご無沙汰しています、君島さん」
翔が目を丸くする。
「……びっくりしたぁ……」
そう言って、ぱちくりと瞬きをする。
「ほんと……久しぶり、ユウ」
翔がユウに歩みよっていく。
「新年のご挨拶はできませんが、今年もよろしくお願いします」
「……」
「本日は、別れのご挨拶をしに参りました」
「え？　別れ？」
「はい。少し事情があって、卒業式を迎える皆さんをお見送りできなくなりました。ですので、せめてお二人にはご挨拶をと」
「…………」
翔が目を見開いたままユウを見つめる。
「……そっか……やっぱりお仕事関係？」

ユウがうなずく。
翔が悲しそうな表情を浮かべながらうなずく。
「あ……　そうだ」
翔が顔を伏せる。
「ごめん……あやめは、受験で一足早く卒業しちゃって……」
「存じています」
翔が顔をあげる。
「一方的ではありますが、お見送りさせていただきました」
そう言ってユウが微笑む。
「あ、そうだったんだ」
ユウが微笑んだままうなずく。
「ごめんね、後半はずっと忙しくしちゃって……気づいたら年が明けちゃったみたいな感じで……」
「大丈夫ですよ。私も、なんだかんだバタバタしてしまっていたので」
ユウが目を閉じ、ゆっくり目を開く。
「早乙女さん」
翔が目を丸くし、そのあとで小さく微笑む。

「どうしたの、急に」
「君島さんは覚えていないかもしれませんが……いつの日か、私たちを助けてくださりありがとうございました」
　翔が首をかしげる。
「え？　助けた？」
「ユウがうなずく。
「私が、ユウを？」
「はい」
　翔が片手を口に当てる。
　目を細め唇を結び、視線を上に向ける。
「……ごめん、いつのことだろう」
　ユウが微笑む。
「６年前のことです」
「６年前……？　６年前って……、私が漫画家になったときだよな……」
　翔がつぶやいた。
「はい、そうです」
　細めた目を開いた翔が、ユウを見る。
「えっ、私が漫画家になった時のこと、知ってるの？」
　ユウがうなずく。

「えーっ、うっそぉ……」
翔が目を白黒させながら俯く。
「え、編集者の宮城さん……じゃないよね？」
「違いますね」
「うええっ、なんかごめんっ……当時って本当、あんまり人と会ってなくて……。あれぇ……他に会った人、いたかなぁ……」
翔の慌てる様子を見て、ユウがクスクスと笑う。
「いえ、無理もありません。心当たりがあるなら、君島さんはストーカーです」
翔が顔をあげる。
「どういうこと？　全然わかんない……!!」
「答えを言いますね」
翔が手をあげて静止する。
「まって!!　ヒントちょうだい！　ちゃんと当てたい!!」
ユウが目を丸くする。
「……えーと……」
言葉を詰まらせたユウが目を伏せ、しばらくしてからチラリと翔を見上げる。
「……とあるゲームの……第一字の、プレイヤーです……」

翔がポカンと口を開けてユウを見つめる。
「第一字……、ゲーム……？」
しばらくして、翔が目を見開く。
ユウは恥ずかしそうに、翔から顔を背けている。
「それって……もしかして――」
その瞬間、神前からガランガランと大きな鐘の音が鳴る。
翔が思わず振り返る。
そこには誰もおらず、鳴らされた鐘の紐だけがゆらゆらと揺れている。
「……びっくりしたぁ」
そう呟いて、ゆっくりとユウのほうに向きなおる。
「なんでまた急に――。……えっ？」
ユウの姿は無い。
呆然とした翔が、周囲を見渡す。
翔がゆっくり後ずさっていく。
両手で自分の体を抱えるようにして身を震わせる。
「えっ、こわい……」
翔が周囲を見回すが、境内には誰もいない。
翔の顔が青ざめていく。
「なに？　なんで？」

「えい？　えん？」

入り口のほうから、地面を踏みしめる足音が聞こえてくる。

翔がその方向に顔を向け、じっと凝視する。

足音は次第に大きくなっていき、階段の向こうに誰かの頭が見え始める。

「ひぇ」

青ざめた表情のまま、翔はその姿から目を離せずにいる。

やがてその人物が階段を上がり切り、足を止める。

「……どうした？」

三国が翔を見下ろして、訝しげな表情で尋ねる。

翔が息を飲む。

「み、みくにせんせい」

三国が小さく首をかしげる。

「ああ、三国先生だ」

翔が深く息を吐く。

「なんだ、幽霊でも見たのか、君島」

翔が三国を見上げて、うなずく。

「幽霊は、三国先生でした」

「……そうか」

神前の鐘が鳴り、三国が二拝二拍手一拝を行う。
三国が振り返り、ぽつんと佇む翔を見つめる。
翔がじっと三国を見つめる。
「……………」
三国はそのまま、翔が立つ入り口のほうに歩き始める。
翔の横を通り過ぎるとき、翔が口を開く。
「あの、先生」
三国が翔を振り返る。
「ん」
「……三国先生は、どんなことを想ったんですか？」
三国が翔をじっと見つめてから、目を伏せる。
「救済の誓いだよ」
三国が軽く手をあげ、その場から去っていく。
その背中を翔が見送る。
「……」
三国の姿が見えなくなり、翔が小さくため息をつく。
「君島さん」
「ひゃあっっっ」
翔が跳ね上がる。

翔が頭を上げ、
バッと振り返った翔が勢いよく後ずさる。
「……驚かせてごめんなさい」
「ふぁ……ゆ、ゆう」
「はい」
翔、ゆっくりと肩に力が入ったまま、ユウへ向き直る。
「……ゆうは、幽霊なの？」
ユウがキョトンと目を丸くして、ゆっくり微笑む。
「そうです、と言ったら？」
翔が恐る恐るユウに近づき、その体にペタペタと手をふれる。
その様子をユウが見守る。
「触れるよ」
「はい、大丈夫ですよ」
翔が膝に手をつき大きなため息をつく。
「も――――――っ。まじびびったぁ……」
「ふふっ」
ユウが翔を見下ろしながら小さく笑う。
「ほんっと、みんな面白がってさ」
ユウが、両手を前に組みなおす。
「……すみません、君島さんの様子が可愛らしかったもので」

「もう」
翔が唇を尖らせる。
「急にいなくなるから、びっくりしたよ」
ユウが困った様に微笑んでから、入口のほうに視線を向ける。
「……友人に、姿を見られたくなかったのです」
翔も入口に目を向ける。
「友人って……三国先生のこと？」
「はい」
「……」
翔が小さく首をかしげる。
「ユウって、やっぱり変わってるね」
ユウが顔を上げる。
「変わっていますか？」
翔が微笑む。
「うん。昔から不思議な子だな一って思ってた」
「……！」
ユウが胸に手を当て、翔がその様子をじっと見つめる。
「……本当に、君なの？　アルファさん」
「……」
ユウが小さくうなずく。

[illegible]

「……」
翔が目を見開く。
「……どうしてまた……」
ユウが穏やかに微笑む。
「びっくりですよね」
「いやいやいや、びっくりどころじゃないっていうか!!だって、こんなことってある!? というか、ユウはどうしてわかったの??てか、いつから知ってたの??」
「……えっと」
ユウがスカートのウエスト部分に手を入れ、中から本を取り出す。
「えっ、どっからとりだしたの？」
ユウ、本の表紙を翔に見えるように掲げる。
『親愛なるあなたへ』
「……っあーー……」
翔が口を手で覆う。
「そういうことかぁーー…………」
ユウが小さくうなずく。
「ソウトメさんのお噂は学園中に広まっていましたから」
翔が観念したように息を吐く。

「……なるほどね——……」
額に手を当て、翔が目を閉じる。
「いやぁ——……でも……いや——まじかぁ——……」
再び大きなため息をつく。
ユウが困ったように微笑む。
「ソウトメさんの色々な表情が見られて、私は満足です」
翔が顔を上げてユウを見る。
「いやいや……ええぇ……でも、ユウはこれからお仕事忙しくなっちゃうわけだよね。うえぇ、ちょっと語っておこうよ。というか連絡先とか色々教えてよ——っ」
「あ……え、えっと……」
ユウが悲しげな表情を浮かべて顔を伏せる。
「……その……」
翔が首をかしげる。
「……どうしたの？」
「…………」
「…………」
翔が、俯いたユウをじっと見つめる。
ユウが手をぎゅっと握る。
「その、お願いがあるんです

「……お願いがあるんです」
「お願い？」
ユウがうなずき、顔を上げる。
「……君島さんが、漫画を描き終えた時――。その時に改めて、もう一度会いませんか？」
翔が目を見開く。
「…………」
ユウが頭を下げる。
「……すみません……私も、まだもう少し時間が欲しいんです」
翔が顔の前で手をぶんぶんと振る。
「あ、いや、もちろん！」
ユウを見つめながら翔が微笑む。
「ごめん、意外な返事が返ってきてびっくりしただけだから。……うん。大丈夫だよ。私としても、そのほうが嬉しいかもしれない」
ユウがゆっくり顔を上げる。
「……ありがとうございます」
翔が目を伏せ、静かに微笑む。
「でも、そっか……ユウも、色々あるんだね」
翔が何度かうなずく。
「……そうだね、うん……終わったときに再会……それもいいかも

ね」
ユウが翔を見つめて、悲しげな表情を浮かべる。
そのあと、両手を前に組み顔を伏せる。
「……全て、終わらせましょう。そして、また……」
そこで言葉を切ったユウが、ゆっくり口を閉じる。
顔を伏せたユウの目の前に、翔の手が差し出される。
ユウが顔を上げる。
翔は微笑みながら、右手の小指を立てていた。
「約束」
ユウがぼんやりと、翔を見つめる。
「………………」
ゆっくりと手をあげていき、ユウも小指を立てる。
翔がそこに小指を絡める。
「ん！」
ユウの視線が、結ばれた小指に注がれる。
それから翔を見上げる。
「頑張ろう。私も頑張るから」
翔が微笑む。
ユウも穏やかに微笑んで息をついた。
「はい

に」
神社に伸びる道を翔とユウが歩いていく。
広い階段の前までやってきてユウが振り返る。
「私はここで」
翔も立ち止まり、ユウを振り返る。
「うん」
朝日が昇り、二人を明るく照らす。
「君島さん……、トライメント計画は、あなたにとっての楽園であれたでしょうか」
翔が微笑む。
「うん。私は、素敵な出会いとたくさんの勇気をもらって、また再挑戦の機会も得られた。おかげで、もう少し頑張れそうだよ」
ユウが微笑む。
「それはよかった」
翔も穏やかな微笑みを返す。
「私も、一つ聞いてもいい？」
ユウが小さく首をかしげる。

「はい、なんでしょうか」

翔が目を伏せて、ふたたびユウを見つめる。

「ユウ、あなたは神前でなにを想ったの？」

ユウがゆっくり口を開いていく。

「……そうですね」

ユウが階段下に広がる景色に視線を向ける。

ふう、とユウの口から白い息が吐かれる。

「……救済の誓いです。そして、このトライメント計画が、全ての人々の優しい思い出となりますようにと」

風が吹き、ユウが小さく呟く。

「……かつて過ごした、かの楽園のように」

ユウの髪が、風に遅れて微かに揺られる。

その横顔を翔は見つめていた。

「……みんな、想うところは一緒なんだね」

ユウが翔を振り返る。

二人が見つめ合う。

「教えてくれてありがとう、ユウ。それじゃ、お元気で」

ユウが微笑む。

「はい。希くは、あなたの人生がよき旅路であらんことを」

・・・

――。

――。

――――。

静かな校門前に桜が咲き、鳥の鳴き声が静かに広がる。

地面には新緑が芽生えていた。

証書筒を持った人々が会話を弾ませながら列を織りなしていく。

喧噪に包まれる生徒の群れが並び終わるのを、伊砂が見守る。

ざわめきが薄らいできて、伊砂が壇上に上がる。

マイクの電源が入り、人々の視線が一斉に伊砂に向かう。

伊砂がマイクを見つめ、一呼吸し、顔を会場に向ける。

「改めまして、皆さん、ご卒業おめでとうございます。こうして皆さんが一堂に会するのは夏のフェスティバル以来だと思います。島の中で過ごした一年間はいかがだったでしょうか。普段の生活とは違い、交流の機会も多ければ、日常の共有の仕方もそれぞれだったと思います」

　伊砂が一呼吸おき、会場をゆっくり見渡す。

「当トライメント計画は、さまざまな検証結果を導き出すために、毎回異なる施策をもって運営されています。今回は主に、人材育成における『機会損失』を最小限にとどめることを課題としていました。皆さんが無意識に抱える『不可能』という認識を、いかにして解消していけるか。もし、皆さんがこの計画を通して、『不可能』だと思っていたことに挑戦してみようと思えたのであれば——。それが我々の、本望とするところです。最後に、皆さんが本島を出られたあと、この計画に参加をして得られた経験を、アンケートにてお答えいただくことになります。その際は、どうぞ忌憚のない意見をご記入いただけましたら幸いです。それが、私たちの今後、ひいては国の未来を築いていくものになります」

伊砂が横に一歩ずれ、うしろを振り向き、掲げられたトライメント計画の校章を見上げる。

「未来を築いていくために、個人の意識の変革を求めることは、本質的な救済にはなりません。皆さんが出生を選べないように、個人の意識にも外的要因が大きく関わっているからです。我々が変えねばならないものは……、いいえ、変えられるものは、人ではなく、環境なのです」

伊砂が再び、会場を振り返る。

「ゆえに、私たちが目指さなくてはいけないのは、『問題の核心に迫り、人々を救済する必要が全くない環境を築き上げること』なのです」

屋外に設置された沢山のテーブルを生徒たちが囲む。
喧噪に包まれた会場の人たちは、みんなてにコップを持っていた。
八馬と伊砂もその中で向かい合っていた。

「そうですか。……なるほど、あなたはそういう選択をしたのですね」

八馬がうなずく。

「ですが僕の想いは変わりません。最終的に目指しているのは先生と同じ、企業合併による社会問題の最適化です。そのために、僕はきたるべき時のために力をつけ、社会の認識が変わる予兆を見越して、在るべきところへ身を収める所存です」

「…………」

八馬を見つめていた伊砂が、目を伏せる。

「……」

[illegible]、振[illegible]会場に視線を向ける。

そして、賑わう会場に視線を向ける。

「……八馬さん、『シンギュラリティ』をご存知ですか？」

八馬が首をかしげる。

「……技術的特異点、ですよね。人工知能が人間の知性を越えることで、社会生活に大きな変化をもたらすという考え方だったかと……」

伊砂がうなずく。

「技術的特異点はもうきています。そして今、新しい技術が世の中を統治する日は近づいていますす」

「……」

八馬が伊砂の横顔を、眉をひそめて見つめる。

「なにか……問題があるんですか？」

伊砂が八馬をチラリと見てから会場に視線を戻し、目を細める。

「……どう、なんでしょうね」

「……」

伊砂が小さく息をつく。

それから、八馬を振り返る。

「八馬さん。よろしければ卒業後、我が社を訪ねてみてください」

八馬がポカンと口を開ける。

そしてゆっくりと目を見開いていく。

「私は計画における役割の関係上、同席はできませんが、代わりの者

へあなたのことは伝えておきます。ぜひ、これからの未来に向けて協力していきましょう」
そう言って伊砂が微笑む。
「……」
八馬は口を開けたまま、伊砂の微笑みを見つめていた。
そして口を閉じてからうなずいた。
「ぜひ、よろしくお願いします」
八馬が頭を下げる。
伊砂が八馬を、黙ったまま見下ろす。
「……」
顔を上げた八馬が微笑む。
「……僕は先生の築いた特別支援学校やトライメント計画が、必ずや未来に花を咲かすと考えています」
伊砂が目を見開いて息を飲む。
「特別支援学校が世間に認知され、その有用性が認められたのは、設立後のデータの変移を見れば明らかです。先代を悩ませたストレス社会による精神病の数々、福祉が賄える限界を優に超えた患者数も、大幅な減少傾向にあります。これは、世論を変えたばかりではなく、人々の根底の意識をよりよい方向に変化させている」
八馬が笑って、伊砂を見つめる。

八馬がまっすぐ伊砂を見つめる。
「先生が促した変化は、これからもっと多くの人々に波及していくはずです」
「……………………」
伊砂が少し困ったように微笑み、顔を伏せて小さくため息をつく。
「……そうですね」
手元のコップの中で揺れる液体を、伊砂がぼんやり見つめる。
「時代は変わるものでした」
そう呟き、八馬にコップを差し出す。
八馬がキョトンと、そのコップを見つめる。
伊砂が微笑む。
二人の持つコップがぶつかり、液体の表面に波紋が広がる。
八馬がうなずき、同じように微笑んだ。
「あ、奏くん！」
二人に文実が駆け寄る。
「ここにいたんだ……　だ……」
笑顔だった文実が青ざめていく。
そして、文実は伊砂の前で立ち止まった。
「……ど、どうもぉ……」
伊砂は文実を見つめて、ニッコリと微笑んだ。

八馬は視線だけで、文実と伊砂を交互に見つめる。
伊砂が二人に背を向ける。
「時代は変わる」
そう言い残して、伊砂は去っていった。
八馬と文実が、その背中を呆然と見送る。
「……」「……」
八馬と文実が顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

ステージ上の照明が点灯し、アンプの音が会場に鳴り響く。
天草がギターの弦をピックで弾く。
宇賀神がベースを奏で、桜井がドラムを叩く。
影山がキーボードを打鍵する。
それぞれの演奏が重なり、曲が紡がれる。
ステージを見守る生徒が腕を振り上げて、リズムに身を任せる。
翔が喜羽に声をかける。
ステージから離れた後方部で、文実と八馬が隣り合ってステージを眺めている。
文実が笑顔で口を動かし、それに八馬がこたえる。
[illegible]

舞台裏で、繽紛がアニースティックキターの弦をつまびく。

文実と八馬が並んで立ち、ステージを見つめる。

天草が歌声が観客を盛り上げる。

八馬が天草をじっと見つめる。

「ところで文実さん」

「へ？」

文実が八馬に顔を向ける。

「……『宗教』についてなんですが」

「あ、うん。……どうしたの？」

文実が八馬の横顔を見つめる。

「僕は、ハッキリ言って、語れるほどは宗教について知識があるわけではありません。ですが、これについて一つの考えを持っています」

ステージのほうを向いたまま八馬がうつむく。

「以前僕は、宗教は思想の一つだと述べました」

文実がうなずく。

「この世界には大きく分けると『二つの思想』が存在すると考えています」

八馬が文実に顔を向ける。
「それが、宗教と、哲学です。僕は、そのうちの一つ、西洋哲学を学んできました」
再び八馬が前を向く。
「そもそも思想とは、この世界や人の生き方、存在や価値についての、まとまりのある見解です。宗教、哲学は、それらの真理を追い求める学問の一つとも言えるでしょう」
八馬の視線が、掲げられたトライメント計画の校章に向けられる。
「そのうち哲学とは、単なる直感の内容に論理的な反省を施して得られた、まとまった体系的な思考内容だといえます」
八馬が視線を降ろし、演奏する人々を見つめる。
「これに対し宗教は、思考や論理、検証などを超越し、正しいかどうかの証明ももたない絶対的な信仰によって受容するものです」
八馬がゆっくりと、ステ一ジを端から端まで眺める。
「僕はこの両方があり得ていいと思うし、そもそも、そうした二つの相対した性質が共存しえるからこそ、今の世界があるのだと考えています。そして、その『二つの視点』を合わせて持っているのが、文実さんだと僕は思っています」
八馬が文実を見つめる。

文実も八馬を見つめた。
八馬が文実に微笑みかける。
「通常、それぞれの価値観を理解し合うことは難しい。宗教が生まれるのも、結局は人間の認知機能の表象による結果でしょうからね。だからこそ、最終的に目指さなくてはいけないのは、様々な価値観があることを想定した、『ルール』や『仕組み』」
そう言って、八馬は自分の右てのひらを見つめた。
「僕が掲げる企業理念は、この『仕組み』を完成させることです」
八馬が右手を握る。
顔を上げ、舞台を囲む人々を眺める。
「今の社会の根底を築く資本主義という『仕組み』は、言うなれば動物の弱肉強食という性質を利用した、自然淘汰を目的としています。これは本来、生存競争によって社会を成長させ、やがては誰もが納得する一番良い『仕組み』を残すという考え方です。ですが、実際にはそうはならなかった。なぜなら、人間は最悪な状況下でも生き抜く力を持ち、かつこの淘汰という考え方には、競争という『戦い』が前提にあったからです」
八馬が目を細める。
「『戦争』といった視覚化された戦いがなくなっただけで、今も変わらず世界は戦争を続けている。世界は戦いによって生まれた傷を、生

活保障やアフターケアといった形で埋めようとしている。……ですが、本当に必要なのは。そもそも、『戦い』や『ケア』が必要にならないようにする環境作りです」
　八馬が口を閉じて舞台を見つめ、またゆっくり口を開く。
「それを実現したのが、この『トライメント計画』だった」

　八馬と文実の更に後方から、伊砂と三国が人々の様子を眺めている。
「来年から、参加者たちのより微細な状態変化を解析するために、私の元で『監視ＡＩ』を導入することになった」
　伊砂が三国に顔を向け、また前に向き直る。
「やはり、このまま続行するんですね……」
「お前も納得していただろう」
「…………」
　伊砂が顔を伏せる。
「……全体を俯瞰してみればのことです。正直、はじめから私はこの計画形態に不安しかありません」

伊砂が顔を上げてステージを見つめる。

「この計画の代表に私が選ばれた理由もわかる。なにを求められているかわかっているからこそ、不安なんです」

「……三国が視線を逸らす。

「……だろうな」

伊砂がため息をつき、額に手を当てる。

三国がその様子をチラリと見てから、ステージに視線を戻した。

「……次回からは管理システムに一上の『Ａｌｐｈａ』も導入される。『監視ＡＩ』も含めれば、問題の情報収集レベルは現在の５９倍の期待値だ」

「………………」

額に手を当てたまま、伊砂が三国を見る。

「ちなみに、その『監視ＡＩ』とは何なんですか？」

三国が目を細める。

「……人型の情報収集ＡＩ。他のＡＩとは違い、必要な情報集積を独立して行う。そのぶん奇怪な行動は多くなるが」

「なるほど」

「より詳細な情報収集の為、一般参加者とルームシェアを行わせ、ゆくゆくは学園にも入学させる運びになっている」

「……はい？」
伊砂が額から手を降ろし、見開いた目を三国に向ける。
「え、大丈夫なんですか？　それ」
「今回のような事件が起きるよりはマシだろう」
「…………………」
苦い表情を浮かべた伊砂が前を向く。
「……そうですね」
三国は伊砂の表情を盗み見る。
「一般参加者として扱うということは、その『監視ＡＩ』には名前があるんですか？」
「……まあ、一応な」
伊砂がぼんやりと空を見上げる。
「……たしか、あなたのネーミングセンスって酷かった気があるんですが」
三国が目を伏せる。
「……別に、普通だよ」
「では、なんと？」
「……。ミリャ・ブランコだ」

翔と喜羽がライブステージを見上げている。
「喜羽くんは、文実と一緒に、八馬さんの会社に就職するんだよね」
喜羽が翔を見る。
それから再び前を向き、うなずく。
「コネ入社した地元の友人が、関係構築は皆が想像するより大切なものだと言っていた。それを、身を持って学んだよ」
翔が喜羽を見上げ微笑む。
「喜羽くんらしいなぁ」
翔がまた、ステージに顔を向けた。
「やってみるまでは、わからないものだよね」
喜羽がうなずく。
「でもよかった。そこに行けば、また三人には会えるかもしれないんだもんね。なんかさ、そういうのっていいよね。いつまでもこの環境、トライメント計画が続いていくみたいでさ。帰る場所っていうのかな」
そう言って、翔が頬をかく。
喜羽がそれをチラリと見下ろしてから微笑んだ。
「そうだな。というかあれだ。奏の目的も、そのトライメント計

画を続けていくことだそうだからな」
「うん、言ってたね。まさかそのために起業しちゃうとは思ってなかったけど」
「ほんとに。大した奴だよ」
翔が嬉しそうな苦笑いを浮かべる。
「……お前たちと出会って、俺の人生観も変わったよ。今は、お前たちが彩なす未来を、俺も見てみたい。今は、支えたいって思うんだ。直接力にはなれないが……せめて休息の時間くらいは、ちゃんと息抜きができる場を用意してやりたい。だから、いつでも帰って来いよ」
「うん」
翔がうなずく。
微笑んだ二人がしばらくステージに目を向ける。
「ああ、そうだ。君島は聞いたか？　新しい会社の名前」
翔がキョトンと喜羽を見上げる。
「え？　ううん、そういえば聞いていないかな」
喜羽が口角をあげてニヤリと微笑む。
「なんだと思う？」
「ええっ、なんだろ。んん〜〜っ」
翔が口元に手をあてて上を向く。

「八馬さん、真面目だからなぁ……」
呟くように言って、視線を舞台に向ける。
「……さすがに、ヒントがないと……」
舞台上に掲げられた看板が、翔の目に入る。
『第２回　トライメント計画　來夢学園卒業式』
翔が目を見開く。
「…………」
「しばらく看板を見つめていた翔が、勢いよく喜羽を振り返る。
「……わかっちゃったかも……!!」
喜羽が翔を見下ろす。
「おっ、なんだ？　言ってみろ」
翔が微笑んでうなずき、人差し指を立てた。
「トライメント！」
喜羽が目を丸くしてから微笑む。
「ご名答」
ステージ上に立った天草がマイクに手をかける。
汗を掻きながらさわやかな笑顔を浮かべる。

「さて、次が、本当に最後の曲になります」
会場から悲しみの声が上がる。
天草が苦笑しながらマイクスタンドを調整し、一息つく。
「私たちトレイメントは、このトライメント計画で出会って結成された、即席バンドです」
翔と喜羽が天草を見上げる。
文実、八馬も、同じように天草を見つめていた。
織鶴はステージの隅から見つめている。
「私はここにくる前もバンドマンとして活動していました。でも、ずっと続けていたバンドがいつの間にか終わってしまって。それからずっとソロで活動していました。でも、しばらくしてやっぱり、一人じゃなくて、みんなで演奏したいんだって、気付いちゃったんです。それからメンバーを探したけど、情熱とか相性の問題で、またすぐにぶつかっちゃったりして。みんなが就職していく中、やることなすこと、なかなかうまくいかなくて、いつの間にか私は、音楽自体を諦めちゃってたんです。そして――、私は再挑戦の機会を知った」
天草が顔を伏せる。
汗が頬を流れていく。
「計画が始まって、私はすぐにストリートライブを始めました。ギ

ター一本の弾き語りだったけど、みんなが立ち止まって耳を傾けてくれて。その時間は、音楽を始めたばかりのあの頃のようでした。そんなとき、ある人が私をスカウトしてくれたんです。一緒にバンドを組まないかって」
天草が振り返り、キーボードの影山を見つめる。
「すごく、嬉しかった」
天草と影山が見つめ合う。
会場が一瞬しんと静まりかえり、会場から二人を冷やかすような野次が飛んだ。
「いやいやっ、違うからねっ!?　全くもう、お前らこそ最後なんだから想い人がいるなら伝えておけよ！」
顔を赤らめながら天草が声をあげる。
八馬が天草をじっと見つめる。
天草が野次を誤魔化すように、ステージ袖の織鶴を振り返る。
「さっ、織鶴!!」
織鶴がビクリと背筋を伸ばす。
そして、両手に持ったアコースティックギターをぎゅっと握った。
会場の視線が、天草から織鶴に移る。
裏手から一歩一歩、織鶴がステージに上がっていく。
ゆっくり、天草の斜め後方まで歩いて行き、立ち止まる。

天草が織鶴に微笑みかけてから、会場を振り返る。
「さて、最後に送る曲は、トレイメント解散、そしてトライメント計画卒業へ送る曲になります」
会場から惜しむ声があがる。
声援や、泣き声も混ざっていた。
天草が目じりに涙を浮かべながら微笑む。
「この曲は、最後までこのバンドにスカウトできなかった、私の憧れの女の子が作曲してくれた曲です。みんなはよく知っていると思う。彼女は先に卒業してしまったけど、ある思いを込めて、この日のために書き下ろしてくれました」
天草が目を瞑る。
「演奏できない自分の代わりに、わたしに託したいと言ってくれた星乃あやめさん。本当にありがとう」
目を開き、マイクを取った天草が一歩さがる。
動きが硬くなっている織鶴の背中を、空いた手でポンと叩く。
織鶴が軽くのけぞり、呆然と天草を見つめてから、凛とした表情でうなずく。
天草が微笑み、ふたたび前を向く。
「今日この日を――、みんなが夢に描いた想いを、現実に変える門出

第2回 トライメント計画 來夢学園卒業式
KORG TRITON

・・・

少女がペンを走らせる。
開け放った窓から注ぐ風が、長い白髪をなびかせていた。
まばゆい光が、舞い上がる細かな塵をきらめかせる。
窓の外に立つ、一本の桜の木。
風に吹かれ、花びらが舞う。
机に広げた便箋に、少女は書き綴る。
その手元に、花びらが届いた。
少女は手を止め、顔をあげる。
ぼんやりと、光の中の桜の木を見つめる。
少女はゆっくりと立ち上がった。
「心を捨てて臨もう」
――。
――――。
――――――。
ユウがゆっくり手を降ろし、片手に持っていた手紙を胸にあてる。
白髪が風になびかせ、ユウが目を閉じる。

「司」

再びの桜、再びの春。

見上げれば、思いは遥か昔から。

「頑張ってください、司。私は、いつでもあなたを見守っています」

風に乗せるように、手紙を空へと手向ける。

天へと上る、便りの調。

ユウの手紙が燃え上がり、炎に包まれる。

「親愛なるあなたへ。私はあなたを――お慕いしていました」

揺られる船の上、大型客船のデッキで、司は海から覗く遠方の島を眺めている。

水面が朝日を照り返してキラキラと光る。

――。

――。

――。

・　・　・

……。

荷物を持った司が寮に上がり、部屋の奥に歩いていく。

内装を見渡し、窓の鍵を開ける。

窓の外をぼんやりと眺める。

扉の開く音がして、もう一人、人が部屋に入ってくる。

「お、君が僕のルームメイトか」

司が振り返り、音のほうを見つめる。

「僕は佐藤理人。あ、呼び名は理人でよろしく」

司は黙ったままだった。
「君の名前は？」
司が小さく口を開く。
「僕の名前は……」
そう呟いてから俯き、ゆっくり顔をあげる。
「俺の名前は新田司。よろしく、理人」
「おう、よろしく。司」
二人が握手を交わす。

・・・

霧がかった草原を一人の青年が歩く。

一歩一歩、地面にしるしを残すように踏みしめ、伸びきった草花の間を進んでいく。

片手に握られたナイフの刀身が日光を反射して光った。

風が吹き、草原が涼やかな音を奏でる。

青年の前方から、桜の花びらが舞ってくる。

「――どうして、トライメント計画はこのような終わりを迎えることになってしまったんだろうね」

舞い上がった桜の花弁が、霧の中に溶けるように消えていく。

「始まりは……今を変えたいと願う、純粋な想いだったはずなのに」

草原に咲いた満開のナズナの花が、僅かにしだれる。

「……失敗したからだ」

嵐の前触れを知らせるようなざわつきが草原を包む。

「どんなに理想的な願いを掲げても、失敗しては悪手の記録として残される」

風は不規則に吹き、霧の中の小雨が揺れる。

「一度の失敗は間違った考えだと断定され、過去の栄光が永遠の強者になる」
「未来を生きていかなくてはならないのに、俺たちは過去を変えられない」
青年は足を止め、目を瞑った。
目を閉じたまま空を仰ぐ。
ゆっくり目を開く青年の視界に、草原の端から続く広大な海が映った。
霧は晴れ、曇った空の隙間から光の筋が降り注いでいる。
海の波が、それを照り返して光っていた。
「……いつの時代も、最後は勝者だけが、何かを変える権利を有する」
風に揺れていた髪が、ゆっくり動きを止める。
静かだった世界に、目覚めを知らせるように夏の虫が鳴きはじめる。
「そうやって、あの人はキャピタリズムの先に調和のとれた世界を目指したんだと思う」
青年は目を細めて、続ける。
「……ただ、トライメント計画は失敗した」

TrymenT
—今を変えたいと願うあなたへ—
VI

2020年9月30日 発行

脚色
えある

原作
TrymenT

カバーイラスト
雫将維・クロノミツキ

本文イラスト
雫将維・クロノミツキ・mocha

カバーデザイン
shotaro ichinose

公式サイト
re-tryment.com

公式Twitter
@TrymenT_PJ

発行
TrymenT

本書の無断複製、無断転載、無断アップロードを固く禁じます。

©TrymenT AlL RightS ReserveD.

TrymenT

目次

登場人物名簿
RaisoN D'etrE
終日のトロイメント
夢の終わり